不思議な
不思議な夏!!
前 編

エンマ

不思議な　不思議な夏！！
前篇

エンマ

表紙　ツクツクボウシ

プロローグ（２００７－）

不思議な、不思議な夏は、杏リリイの亡くなった、翌年、２００７年から始まりました。

始めの年は、蝶でした。翌年からせみが毎年現れるようになりました。

そして、現在、わたしは１匹のツクツクボウシと、７匹のアブラぜみと生活を共にしています。

それは、個人的な体験として、葬り去ることの出来ない、何かを、人間存在に関わる重大な何かを、伝えてくれているように思われ、その動顛するような顛末について、時系列にそって、お伝えすることに致しました。

尾ひれをつけて、面白おかしく笑いをとるつもりは毛頭ありませんが、真実は嘘臭いもののようです。

時は夏、もともと、夏は魂の活発な月です。

不思議な　不思議な夏！！

第　１　部

はじめは、蝶の姿で！！（２００７．６．１５）

外出しようと玄関ドアからでると、インターホンの脇に、ベージュ色の大型の蝶が張りついていました。全長７―８センチ、よく見ると翅に斑点があり、咄嗟に、何とかヒカゲじゃないかと、わたしは思いました。白目のない、黒い瞳には、つや消しでもしたように光はありませんでした。
外壁と同色で、擬態のようです。

外出から帰っても、蝶は同じ姿で壁にとどまっていました。死んでいるのでしょうか？
そのとき、何かが、わたしの記憶を引っ張りました。こんなことって、何時かあったような？　わたしは目を半眼にして記憶をまさぐりました。
――そっくりじゃない！！
杏リリイの最後の作品「いとしのカメレオン」終末の情景と？ そっくりです。
――もしかして、もしかして、あなたは、杏リリイなの？
わたしは、聞いてみました。
――そう、ああ、やっぱり、そうなのね！　蝶は無言でした。

わたしは作品にならって、そうあって欲しい願望から話しつづけました。
——やっぱり！！　そんな気がしていたのよ。杏リリイなら、そんなことくらい、ヘッチャラですもんね。そう、あなたは、こんな姿で、わたしに会いにきてくれたんだ！！
蝶は死んでいるのでしょうか？ 張りついたまま身動きもしません。

——さあ、家の中にどうぞ、入って下さい！　そんなところにいたら、蒐集マニアに狙われてしまうでしょう。遠慮はいらないのよ、だって、あなたのお家だもの。
話しているうちに、何だか催眠術にかけられたように、蝶は、確実に彼女だと思われてきました。
わたしは手を彼女の前に伸ばしていきました。掌に乗り移って欲しかったのです。
指先がちょっと翅に触れたと思ったとき、蝶は翅を震わせて飛び立ちました。ああ、生きていたのです！！
突然、目の中が光でいっぱいになって、目をつむったのかもしれません。目を開けたとき、わたしは蝶を見失っていました。

何処かに飛んでいってしまったのです。でも、今までだって蝶たちは、わたしに挨拶などしないで、何処かに飛んでいったものでした。
わたしは名残惜しい気分で玄関のドアを閉めました。

蝶は飛んで行ってしまったのです。部屋に戻っても、懐かしさや、名残惜しさで、暫くぼんやりしていました。でも、そんなことなんてあるわけ、ないんだから！！
わたしは思い直すと、頭を振り、現実に戻りました。

その時です、胸のあたりが、なんだかごそごそし、くすぐったくって、ブラウスの襟首から、中を覗いてみました。
——ヒューッ！！
わたしのみぞおちのあたりに、突っ込んで、何かがバタバタしてい

ました。
　驚いて裾を持ち上げると、勢いよく飛び出した蝶が、羽ばたきながら、まるで、わたしを導くように、リビングルームにむかい、窓際のレースのカーテンに、ゆったりと翅を休めました。

　翅は昼の陽光をうけて、美しいエメラルドグリーンです。さっきまで、ベージュ色だったのに？　翅は微妙なグリーンの濃淡を見せ、幾重にも重なり、信じられない透明感で羽ばたいていました。
　昼の光と爽やかな風が、翅の間をすりぬけていくのを、わたしは見ました。
　――やっぱり、杏リリイだったのね、嬉しい！！　そう、こんなにも儚いものになって、わたしに会いに来てくれたのね？　あなたは、生まれ変わったの？　それとも変身したの？

　わたしは仰天し、有頂天になっていました。杏リリイが帰ってきたのです。それも、こんな形で。どうしてか、涙がこみ上げてきました。
　蝶はそれがわかったように、形のよい髭を上下させ、畳んでいた翅を扇のように開いたり閉じたりして、なにか、意思表示をしているようでした。

　そのささやき？
　――そう、嬉しいわ、帰ってきてくれて！！　でも、こんなこと聞いたら悪いのかも知れないけど、あなたは、あの世から来たの？だとしたら、来るの大変だったでしょう？
　蝶は無言でした。蝶には声がないのです。
　そのかわりなのか、エメラルドグリーンの美しい翅を、懸命に閉じたり、開いたりしていました。

　こんなにも美しいものを、わたしは知りません。サファイア色の大きな瞳が、わたしの呼吸に合わせて、膨らんだり縮んだりしていました。
　――そう、あなたも嬉しい？　よかった！！

――カーテンでは、落ち着けないわね？　アゲハ蝶は赤い花が好きだと聞いたことがあるけど、あなたも、そうなのかしら？　蝶はかすかに羽ばたきました。

わたしがベランダで、赤いバラの花と、赤いガーベラの選択に迷い、漸く、とげのないガーベラを選んでリビングに戻ると、蝶の姿は、もう、何処にもありませんでした。
忽然と？　消えてしまったのです！！

リビングの窓は締め切ってありました。

遠い匂い！！（２００８．７．２４）

夏のある日、玄関ドアを開けると、なんだか黒いものが視界の隅に、ひっかかりました。何だろうと見上げると、廊下の上を通っている道管の上に、何か黒いものが見えます。
覗いてみると、翅のようなものが見えました。下から見上げているので、全容は見えませんが、せみではないかと思いました。
身をひそめているようでした。何を警戒しているのでしょう？
――どうしたの？　怖がらせないように小さな声で話しかけてみました。
すると姿が少し見えてくるのですが、また隠れてしまいます。
せみは、まるで杏リリイのように、人見知りをしているようでした。何かを、誰かを、待っているのかな、と思ったりもしました。
それにしても、その位置は、わたしからは見えますが、通行人からは絶対に見えない場所です。

部屋に戻っても、気になって、またドアを開けて覗いてみました。

何だか翅も黒くそそげたって膨れているように見え、遠くから旅

を重ねて来たのではないかと？　ふと、思いました。
　もしかしたら、もう何日もこうして、何かを待っていたのではないかと？
　７月末、この陽気なせみの季節に、このせみは短い命いっぱい鳴きあうこともせず、どうして、かくれんぼをしているのだろうと不思議でした。

　もしかしたら、わたしに会いにきてくれたのでは？ 突然、言葉が脳天で、はじけました！！
「コンコン」とドアを叩いてみました。 せみは驚いて飛び立つと、わたしの頭上をかすめ、玄関の横、寝室の窓と柵の間に入り込んで、ばたばたしています。
　わたしは慌てて救い出そうと、柵の下から手を突っ込んでいきました。なかなかとどきません。

　わたしの手が翅に触れたと思ったとき、せみは柵の上に逃れ、廊下を低空で滑走したあと、弧を描いて戻り、わたしに顔を見せると、あっという間に、真っ青な夏空のなかに消えていきました。

　これが、はじめての、せみとの出会いでした。翅も胴体も青黒いせみです。

　なんだか、遠い匂いがしました。

はじめての客（２００８．８．１２）

　いよいよ、８月、お盆の季節が、やってきました。
　深夜、せみの声がしたような気がして、玄関ドアを開けると、表札の横に、そのせみは真っ直ぐに取りついていました。
　なんだか顔見知りのような気がしました。とっさに、ドアを大き

く開け、
——どうぞ！！　と声をかけてみました。
せみは、それがわかったように、身を翻して家の中に飛び込んでいき、廊下を素通りして、リビングの照明の周りを回っていました。

やがて、せみは杏リリイの遺影のそば、ハイビスカスの木に落ち着きました。
大型で、翅が透き通り、黒褐色の胴体が透けて見えていました。
クマぜみです。
深夜とはいえ、この夏の旺盛な活力のなか、訪問された方は、またも、せみに抓まれた気分で、暑熱に浮かされたように宙に浮いていました。
——杏リリイなの？　わたしが尋ねると、
——チャチャ、チャ。と答えは返ってきました。せみ語なのでわかりませんでしたが、わたしは、「やっと、分かってくれたの」と勝手に訳していました。

ああ、今度こそ、杏リリイが帰ってきてくれたのです！！
「心が自由に、身体と外界を行き来出来るのであれば、肉体は死んでも、心は残って、天空を駆け昇る。わたしたちに死はない！！」と、彼女は作品のなかで、書いていました。

わたしは、はっと現実に戻り、生きているとき約束した、ネットを通して彼女の作品を公開するための準備や、電子書籍の出版について、経過を説明したり、意見を求めたりしていました。
せみは時々、チャチャと、鳴き声をいれながら聞いているようでした。
報告がすむと、わたしは、ほっとして、「ふるさと」や、「四葉のクローバ」や、「雪の降る街」を歌いました。杏リリイがよく歌っていた、懐かしい歌です。
そして、午前２時頃、何時も、そうしていたように、照明を消して眠りにつきました。

ベッドに入っても、昂揚しているのか、なかなか寝つけませんでしたが、朝方、うとうとしたのでしょう。
起きると、赤い太陽が、水平線を覆った雲間から顔を出したところでした。せみは同じ位置にいました。

わたしが、そっと、ドレミの歌を口ずさむと、せみは、それを合図と勘違いしたのでしょうか、朝焼けの清澄な空に向かって、リビングの窓から元気よく飛び立って行きました。

行き先を確かめたいと目を凝らしました。高く昇っていくのは分かりましたが、確かめようにも、忽ち見えなくなってしまいました。

杏リリイが媒体を、蝶からせみに転換したのは、せみは歌うからでは、声が出るからではないかと、言葉があるからではないかと、わたしは思いました。
でも、１、２週間しか生きられないせみを何故選んだのでしょう？
それにしても、これらの事実を、ただの偶然と捉えるのには、余りにも多くの疑問が残ります。

最上階の我が家に、彼女の生きている間、一度も、せみが訪れたことはありませんでしたし、わたしは子供の頃から、今まで、せみに手を触れたこともありませんでした。
まして、このような人懐っこいせみに出会ったこともなかったのですから‥‥。

クマぜみの歌（２００８．８．１７）

その日、リビングの窓には、８月の紺碧の空が広がっていました。空の底には、真っ白な夏雲が背を伸ばし、子供の頃見た懐かしい夏休みの空です。

ふと見ると、左側外壁に、せみが一匹止まっていました。柵の15センチほど上です。羽の透き通った大型のせみで、翅の下から黒褐色の胴体が覗いていました。クマぜみではないかと思いました。

このせみは考え深げに、ベージュ色の外壁を足場に、黙って留まっていました。

何処を見ているのでしょう？　視線を延ばしても、ベランダ側の柱にぶつかってしまいます。せみは視野が広いのでしょうか？

そうだとしたら、リビングの中が丸見えです。

わたしはカメラのシャッターを押し続けました。逃げる気配はありません。せみは何だか悠然とそれを見ています。

――こんにちは、いらっしゃい！！

わたしは、身体を鉄柵にあずけて、正面からせみと対峙していました。

無言でした。メスなのでしょうか？

――クマぜみは、美しい声で鳴くのでしょう、あなたも、歌えるの？

わたしは言って見ました。

逡巡したあと、せみは決心したように鳴きました。

――ジズズジジ　１度目はそんな風に聞こえました。

――ジズ―　ジジィジィ　２度目はこんな風に聞こえました。

――ああ、悪い、悪い、ごめんなさいね。でも、今度来るときは歌を歌えるせみに乗りかえてよ！！　お話がしたいもの！！

わたしは我侭の本性をあらわにして、せみに向かって難題を持ちかけていました。杏リリイならわかるはずです。

わたしは、罪滅ぼしに、「見上げてごらん空の星を」と、心をこめて歌いました。

せみに気づいてから、２時間はたっていました。せみはもとの位置のままです。出たり入ったり、一人芝居をしているのは、わたしの方で、せみは黙って、考え深げにそれを見ていました。

分かっています。動くものは思考しないのだということを！！

時計を見ました、もう３時間は過ぎていました。疲れないのでしょうか？　永久にここに、コンクリートに根を張って、居座る気なのかと思ったとき、せみは元気に飛び立ちました！！

あのせみは何を見ていたのでしょう？　わたしは、部屋中を見回しました。
杏リリイの遺影の周りだけが、角切りの黄色い光を浴びて、一際、華やいでいました。

午後４時頃です。ベランダから突然、せみの鳴き声がしてきました。驚いて駆けつけると、柵の裏側に止まって、アブラぜみが１匹、元気よく鳴いていました。なんだか得意そうに、声をかぎりに歌っています。アブラぜみの鳴き声がこんなに美しいものだとは、はじめて意識しました。

歌うせみに載って、杏リリイが帰って来たのです？
――まあ、願いをきいてくれたの？
話しかけるとせみは、歌うのを止めました。目があったような気がしました。
――どんな、ことをして‥‥。

わたしが、ベランダの柵から身を乗り出して、せみに向かって話し続けるのを、不審に思ったのでしょうか？
斜向かいの新築ホテルから、若い男が数人、首を揃えて、見つめていました。もしかしたら、気のふれた女が、マンションの最上階から、飛び降りるシーンを期待して集まって来たのかも知れません。

いち早く、危険を察知したのか、せみが突然飛び立ちました。
ホテルとは、かなり離れているのですから、せみの存在まで、彼らに見えていたわけはありません、となると‥‥。

――早まるんじゃないぞ！！　わたしに向かって、ホテルから男

の声がかかりました。
　わたしが驚いて、乗り出していた上体を起こすと、物見高い男たちが、安心したように散っていきました。

　あとには、膨れあがった嘲笑が、何時までも生き残っていました。

擬　　態（２００８．８．２５）

　２００８年、不思議な、不思議な夏も終わろうとしていました。
　そんな或る日、ベランダの隅にかけておいた洗濯物のＴシャツに、親しげな風情で、せみが１匹止まっていました。

　そのせみは、なんだか古色蒼然とした蓑みたいな翅をしていました。
　わたしは、何時ものように、せみをハイビスカスの木に止まらせようと思いました。でも、余りにも大きな黒い目に圧倒され、ひょいと、手を引っこめてしまいました。
　――ああ、いけない！！
　勢いよく取り落としたためか、せみはポーチュラカの、赤、ピンク、オレンジ、とりどりの可憐な花に埋もれて、姿が見えません。

　――ああ、ごめん、ごめんなさい！！
　わたしは大慌てで、かがみこみ、葉を掻き分け、根元部分を覗き込みました。いくら、向きを変えて覗き込んでも、何処にも、せみらしい姿は見えません。何処に行ってしまったのでしょう？
　途方にくれ、改めてポーチュラカの花を見つめ直しました。

　――ああ、動いてるー！！　ポーチュラカの花が動いていました。
　よく見ると、とりどりの色が動いていました。
　何かが花や葉の色を盗み、斜め縞のモール状になって、ポーチュ

ラカを蔽い、中央に陣取っていました。

　それがせみとは、わたしには理解出来ませんでした。
　本当に、これが世に言う擬態なのでしょうか？　何か、縦横に面積を広げ、上から見る限り、どう見てもポーチュラカにしか見えません。褐色で毛羽立っていた肢の先まで、若緑色で関節もなく、すんなりと伸びていました。
　――見事なものね、そうして、何から身を護っているの？
　せみがこんなに擬態がうまかったなんて、まるで、劇画か、漫画の世界の出来事のようです。
　味方なのか、敵なのかさえ分かりません。このせみは誰なのでしょう？ 余りの変身の見事さに恐怖し、刺激しない方がいいと判断したわたしは、せみから逃れるように、そのまま、ベッドに入りました。

　朝起きると、せみは青黒い姿に戻り、リビングの天井に張りついていました。
　窓を大きく開けても、飛んでいく気配もありません。
　そこで、椅子の上に乗り、背の高いハイビスカスの木をせみの近くまで持ち上げてみました。飛び移ってくれることを願ったのです。

　ああ、ついに、せみが動き出しました。
　天井にせみをおいて、わたしの視界がぐるぐる回転し、足元も、大きくゆれ動いていました。部屋が、世界中が揺れていました。
　もう駄目です！！
　ハイビスカスの木が、ふわぁっと、わたしの手を放れていきます。激しい音がして、植木鉢が落ち、わたしは床を這っていました。

　見上げたとき、せみの姿は、もう、天井にはありませんでした。落下音に驚いて、リビングの窓から飛んでいったのでしょうか？

　せみに、こんな特技？ があるとは、見たことも聞いたこともありませんでした。まるで、夢の世界です！！

ツクツクボウシ（２００９．８．２８）

☆我が家に残った１番目のせみ

　２００９年８月２８日午前３時頃、わたしが何か気配を感じて、玄関ドアを開けると、小さなせみが、開けたドアから入り、わたしの頭上をかすめて、リビングのミニシクラメンの上で翅を休めました。
　この小さなせみは、何だか先を急いでいるようでした。
　話しかけると目を何倍にもして、金色にボーっと輝かせ、前肢をしきりに動かして意志を、何かを伝えようとしているようでした。

　せみが動く度に、光線の具合で、カイガラ状の、雲母状の四角が、透明な翅の全面で、キラキラ光りました。
　せみの真剣さが、ただならない気配で、わたしを包み込んでいましたから、わたしは、緊張し、息を止めていました。

　気づかずにいたのですが、外、中空では、深夜だというのに、せみの鳴き声が、延々と響き渡っていました。荘大な儀式が始まったような‥‥。そんな気がしました。
　わたしが動顛して、ただ、ただ、見つめている間に、この小さなせみの肢の動きがだんだん鈍くなり、目も光りを失い、荘厳な響きのなかで、遂に動かなくなってしまいました。

　ご臨終でした！！

　このせみは遺言として、わたしに、何を伝えようとしていたのでしょう？　ナゾナゾのように、わたしは今でも、そのことを考え続けています。

今、杏リリイの遺影の前、楕円形の宝石箱に、小さなせみが１匹、収まっています。体長３センチ、巾、１．５センチ、翅の長さ、４センチ。アブラぜみと比べると２分の１位の本当に小さなせみです。
事典で調べると、ツクツクボウシとありました。
翅は透明で、翅にはレース飾りのような、赤い線が入った縁取りがあります。ことに背の部分には美しい鮮明な赤い線が入っていました。

日毎に褪色したのか、今では褐色という方が正しいのかもしれません。このせみは、死んだからとはいえ、我が家に居残った１番目のせみです。
毎年、不思議な夏に訪問してくれたせみたちは、この段階では、全部飛び立っていき、このせみのほかには、不思議な、不思議な夏を証明してくれるものは、わたしの脳細胞に刻まれた記憶のほか、何も残されてはいなかったのです。

お盆の客！！（２０１０．８．１３）

今年もまた、不思議な、不思議な夏が過ぎていきます。２０１０年お盆、８月１３日深夜、玄関からせみが訪れ、一泊して１４日６時半、リビングの窓から元気に飛び立っていきました。

同じことが、３年続いています。多少、日にちに違いはありますが、といっても、２００８年は、１２－１３日、２００９年は、９－１０日、２０１０年は、１３－１４日。

時は８月お盆、鳴き声を聞いたような気がして、ドアを開けると玄関の表札の横、せみが真っ直ぐに取りついていました。
せみは、開けたドアから入り、照明のまわりを飛び回った後、リビングのハイビスカスの木に止まって、わたしの話や歌を静かに聞

いていました。
　その後、眠り、早朝、リビングの窓から元気に飛び立っていきました。
　わたしは、それは、杏リリイではないかと思っています。
　彼女が２００６年１１月亡くなってから４年。２００７年は蝶でした。その後何故か、せみが訪れるようになったのです。
　杏リリイは、その頃、生きていて、７、８年の間、土のなかにいた事実はないのですから、彼女がせみとして生れたことにはなりません。
　そこで、儚いせみに、心を寄せているのではないかと、考えてみました。昨年深夜、鳴き続けたのはオスでしたが、後はメスらしく「ジジィ」といった、短い鳴き声しかたてませんでした。気にしているからでしょうか、鳴き声を聞いたような気がして、ドアを開けたのです。
　せみに取りつくにしても、苦労しているのではないかなどと、心配したりもしました。

　死後の世界がどうなっているのか、わたしにはわかりませんが、８月は、生きているものが、死者に心を寄せる季節です。

舞い降りたせみ！！（２０１０．９．１）

　今年も、例年のように、８月１３日から１４日のせみの訪問をピークに、不思議な、不思議な夏が過ぎようとしていました。せみの鳴き声も少なくなり、名残り惜しい夏を追って、深夜、ドアを押して外に出て見ても、表札の脇にも、無人の通路にも、もはや、せみの姿はなく、ただ、ただ、風が吹き渡っていました。
　今までが夢だったのではと、考え込む日がつづきました。それなのに、月末になって、又もせみが戻ってきたのです。

８月２８日．２９日．３０日と、玄関からせみの訪問をうけました。連日です。でも、みんな一泊すると、早朝、飛び立っていきました。

異常に暑い夏で、夜になっても温度計は３６度を超えていました。この暑さのなか、短いせみの時間を捉えて、杏リリイは死後の世界を命がけで？　伝えてくれているのではないかとも、もしかしたら、作品の続きを身をもって、書き続けているのではないかとも、思って見たりしました。
いずれにしても、杏リリイなら、それくらいのことをしても、何の不思議もない気がしました。

翌日、８月３１日、せみは現れませんでした。何度出て見ても、今度こそ、通路にも表札の横にも、もはや、何ものの姿も見えません。
ほっとした思いもあって、安心して眠りにつきました。

そんな夜中、枕元にせみがひらひらと舞い降りたのです。せみは決してせみのしない筈の舞い降り方で、ひらひらと、わたしの枕元に舞い降りたのです。それは、ぼんやりしたものではなく、せみの胴の白い紋や、羽の重なりや、茶色の脈まで、はっきりと見えていました。
――あら、こんなところにいたの？
はっとして身を起こしました。

その時、眩暈に襲われ、自からの異常に気づきました。身体中が火のように熱いのです。熱中症だ！！　大急ぎで切っておいたエアコン のスイッチをいれ、水を飲み、自分で出来る限りの対処をしました。
扇風機が熱くなった空気を、むなしくかき回していたのです。
水道の水もお湯のようでした。
体温も、血圧もあがっていました。落ち着いてから、探しましたが何処にも舞い降りた筈のせみの姿はありません。

命がけの行為とも知らず、エアコンの熱でベランダの花が全滅しそうで、エアコンを切っていたのです。

せみに命を救われたのでは？
杏リリイは、この短いせみの時間を捉えて、わたしを見守っていてくれたのでしょうか？
それとも、どうしても、伝えたいことがあるのでしょうか？
ただの偶然とは、とても言えない、暗さや、おどろおどろしさの全く感じられない、おかしくも、懐かしい不思議な時間でした。

こんな風に、不思議な夏を反芻しながら、カレンダーはめくられ確実にまた新しい夏がめぐって来るのでしょうか？

何故せみは深夜に訪れて来るのか？ 何処から来るのか？
そんなところに、不思議の糸口が隠されているのかもしれません。

火　　葬（２０１０．１１．４）

２０１０年１１月４日、ベランダで１匹のせみの火葬をしました。
前日、３日の文化の日は、４人の来客があるので、朝から多忙をきわめていました。
２歳の子供が主役で、みんなで手をつないでダンスをしたり、会食をしたりで、それは、子供の未来を予感させる楽しい時間でした。

美しい客たちは、来たからには何か役に立つことをしたいと思ったのでしょう。
――リビングの照明が曲がっているから直してあげる！！と言い出したのです。
リビングの照明は、一対の円盤型のもので、天井から吊り下がっ

ていました。一方が水平ではない、偏っていると言うのです。
　気にはしていたのですが、大掃除の時にと、放置してきたのでした。
　調整するために、椅子の上にあがり、天井から照明をはずしてくれていた子供のママが、わたしの頭上で、悲鳴をあげました。
　――せみだ！！
　照明のなかにせみが入っていると言うのです。
　わたしは、はっとしました。せみなら８月、行方不明になったせみが１匹いたのですから‥‥。
　玄関ドアから入って来たまま、どんなに探しても行方の分からなくなったせみがいたのです。どんなに探したかしれません。

　せみが照明の中に入るなんて！！
　何故照明のなかで羽ばたいてくれなかったのでしょう。
　何故わたしは、気づかなかったのでしょう？
　悔やまれてなりません。その事実さえ架空のこととして棚上げしてしまっていたのですから‥‥。

　せみは長い間、電気の熱にさらされ、透き通るようなベージュ色になって、半分は消えかかっていました。
　それでも今年のせみは、みんなアブラぜみでしたから、しっかりとした翅に茶色の脈をみせ、同色の紋様を確実に残していました。

　――この家には網戸がないのかしら？　不思議そうな声がしました。
　――虫も、高いところには、やって来ないから。とわたしは小さな声で答えました。

　これで大騒ぎした不思議も、ぴったりと、ジグゾーパズルのように収まってしまいます。
　深夜、わたしの枕元にひらひらと舞い降りたせみの話も、せみの夢を見続けた話も、きれいさっぱり、現実の話として、はまりこんでしまいました。

わたしは多分、眠りながら、せみの最後の羽ばたきを見ていたのです。または、感じていたのです。まさか、照明のなかにせみが入っているなどと、夢にも思ってはいませんでしたから、見ていても見えず、見えても夢のなかだと錯覚していたのでしょう。
だから、せみは意識下で、ひらひらと舞い降りたのだと‥‥。

そうだとしても、なお分からないことがあります。
何故、３年も、こんなにも多くのせみに、突然、出会うことになったのか？
近所の人にそれとなく聞いても、せみの訪問を受けた形跡はないようです。

飛び立つことを拒否！！（２０１１．８．１４）

今年も、不思議な、不思議な夏が、忘れずにやってきました。
しかも、このような展開になろうとは、思いもよらないことでした。
わたしは、今でも途方にくれています！！

話さないうちから、「それはない！」「それだけはない！！」という、ブーイングが聞こえてくるようです。
でも、これは、嘘も誇張もない、真実です。せみたちはこのようにして訪れ、このようにして我が家に残りました。

☆我が家に残った、２番目のせみ
アブラぜみ（２０１１．８．１２）

２０１１年、８月１２日深夜、玄関ドアの前、通路の中央を大きなアブラぜみがそろそろと歩いて来ました。何だか大きくて立派で

、風格みたいなものさえ漂わせています。
　でも疲労しているのでしょうか、歩くのもやっとらしく、わたしを見上げると、目の前で動かなくなってしまいました。

　話しかけても、声一つたてません。果たして我が家の客なのか？
　ドアの中央ですから、向きは違っていても、やはり、客だと考えるのが自然なようです！
　１、２週間しか生きられない短命なせみのこと、今にも死ぬのではないかと心配しました。踏まれたら可哀想なので、掌にのせて、部屋に運び、何時ものようにハイビスカスの木に止まらせました。

　枝にとりついても、居心地が悪いのか、気分が悪いのか、しきりに身体を振っています。そこでわたしは、赤いマキシムの空箱を持ち出し、柔らかい白いリボンの上にそっと置いてやりました。
　優しいリボンの肌触りが気に入ったのでしょうか？　せみは安心したように眠りにつきました。

　このせみは杏リリイではないようでした。でも、誰か、親しい人のような気がしました。
　どうしてか、降って湧いたように、父に違いないと思いました。
　せみをみて、父だと断定するのも不思議なものです。病床の父の顔がダブリました。

　石の門を入ると、我が家の２間間口の玄関隅に、城北刊行社の金色のプレートが、架かっていました。その頃には珍しい横文字で、陽光をうけて光るので、幼いわたしには、それが何だかわかりませんでした。
　父の商売は、勉強する人。そう思っていました。これが、今、思い出す、幼い頃の、静かな我が家の佇まいです。
　父は何でも知っていましたから、わたしには辞書がいりませんでした。このせみが、あの父なのでしょうか？

　せみは箱の上で、死んだように動かなくなりました。

眠っているのか、死んでいるのか区別することが、どんなに難しいことか、わたしにも、わかるような気がしました。

☆我が家に残った３番目のせみ
　　アブラぜみ（２０１１．８．１３）

８月１３日午後１１時頃、せみの鳴き声をきいたような気がして、また、玄関ドアを開けると、可愛いせみが、ひっくりかえっていました。アブラぜみでした。
このせみは１２日のせみより小柄ですが、「ジィジィジィ」とよく鳴き、話をよく聞き、「雪の降る街」を歌うと、「チャチャチャ」とリズムをとります。

わたしは間違いなくこのせみは、杏リリイだと確信しました。何時ものように、ハイビスカスの木に止まらせ、生前、そうしたように、思い出の歌を次々歌いながら眠りにつきました。

深夜、せみが鳴くので目を覚ますと、羽を大きく広げ「ジージージー」と何だか怒り続けています。ただ事ではない感じで、わたしは動顛し、ただ、ただ、
――ごめんなさい！　を繰り返しましたが、おさまりそうもありません。
途方にくれました。

怒ったことなど、なかった杏リリイから、なんだか敵意さえ感じ取り、わたしも泣き出していました。
啜り上げたとき、わたしの顎があがったのでしょうか、涙で濡れた目をエアコンが占領しました。
――ああっ！　わたしは慌ててエアコンのスイッチを切りました。暫くするとせみは静かになりました。

エアコンの冷風がもろに、せみを直撃していたのです。窓を開けると、暑く膨張した空気が入れ替わりました。

せみは嬉しそうに、今度は、照明の周りを飛び回りはじめ、わたしは、ほっと胸を撫で下ろしました。

ところが、次の瞬間。せみの羽ばたきが影絵のように、照明のなかで、大きくなりました。どうして、照明の中に入り込んだのでしょう？　暴れ回っているようです。
これでは死んでしまいます！！

咄嗟にテーブルの上に上がり、覆いをひねるようにして体重をかけていきました。その時、大きく足を踏み外してしまい、わたしはせみと一緒に床に落ちました。

もの静かだった杏リリイが、こんなにも活動的なことに、わたしは面食らっていました。まるで、ジャジャぜみです！！

でも、もしかしたら、杏リリイに取りつかれた生身のせみが、飛んで行きたくなったのかも知れないと、思いあたりました。
掌の上にせみを載せ、リビングの窓から中空に向かって腕を伸ばしていきました。
――さあ、飛んで行っていいのですよ！！
掌を思う存分ひろげて、そっと、上下させました。

どう思ったのでしょう？　次の瞬間、せみは肢を引っ込め、飛ぶことを拒否するように、体を丸めてしまったのです。

サインを読み違えているのかもしれません。何度か繰り返してみました。
せみはしっかりと、残っていました。それは、飛ぶのが嫌だと、ここに残りたいと言っているようでした。

そこで、わたしは、１２日のせみの隣に銀色の楕円形のマキシムの空き箱をおき、赤いリボンの上に憩わせてあげました。

背を撫でてやると、穏やかになって、活動しつづけで疲労したのでしょう！！　そのまま眠ったように静かになりました。

☆我が家に残った４番目のせみ
　アブラぜみ（２０１１．８．１４）

その後も、この年は、１４、１５日にも、玄関からせみが訪れました。
４番目のアブラぜみは、美しいせみで、殆ど音もたてず、前からいたように、静かにそこにいました。父ぜみよりは少しだけ、小型でした。
――お母さんなの？　わたしは言ってみました。無言でした。
――ごめんなさいね、親不孝ばかりしていて‥‥。怒っているんでしょう？
無言でした。
――わたしどうかしていたの！！　あの頃、人に裏切られたとばかり思ってしまっていたから‥‥。まだ二十代だったけど‥‥。お母さんに、八つ当たりをしていたんでしょう！！
せみの体が左右に大きく揺れたような気がしました。

――ずーと、謝りたいと思ってきたの。よかったわ。お会いすることができて！！
せみが黙って窓際に位置を移しました。

父母がなくなった頃、わたしは、好きだった人に裏切られたと思い、絶望していて、生きていることがやっとで、親の病気にも、無感覚でいたのでした。
その為、親孝行らしいことを何一つ出来ませんでした。

わたしは、長い間の重荷を降ろしたような気がして、せみを掌に載せて、リビングの窓から、腕をゆっくりと伸ばしていき、押さえていた指を、そっと放しました。

――来てくださって、ありがとう！！　言ったつもりでも、声はでません。
わたしは、しっかりと、目を閉じていました。母はこんなところにいたくはない筈です。

目を開けたとき、せみは１３日のせみと同じように、手肢を縮めてまだ掌のなかにいました。
涙がとまりませんでした。

☆我が家に残った５番目のせみ
アブラぜみ（２０１１．８．１５）

このせみは本当に不思議なせみでした。
玄関ドアを開けると、待ちくたびれていたのでしょうか？　わたしにぶつかるように入って来ました。

一泊しての早朝、突然、下羽を中央に押し立て、上羽を横に広げ、小鳥ほどに大きくなって、怯えていました。せみがこんなに大きくなるなんて、誰だって信じられないはずです。
上空を旅客機でも飛んだのでしょうか？
海から汽笛でも聞こえたのでしょうか？

何だか戦闘態勢に入ったという風な感じで、うなりだしたのです。「ブーブー」という音がつづきました。

――何処にも、こわいものなんか、いないのよ！　ひどいことをする人なんて、ここには、誰もいないのだから！！　と、わたしは何とか、安心させたいと必死で言い続けました。

――もしかしたら、お兄ちゃんなの？　わたしは、言っていました。
少しだけ、せみが小さくなったような気がしました。
――怖かったのね！！　たくさん、たくさん、怖い思いをしたの

ね！！
　わたしは、言っていました。
　――ごめんなさいね、そんな、思いをさせてしまって！！
　どんなに、怖い思いをしたのでしょう！！　せみはうなるのを止め少し羽を収めて、小さくなりました。

　我が家のたった一人の男の子である兄は、学業半ばで海軍予備学生になり、南の島で玉砕したのです。海軍中尉の遺骨の箱には、写真が１枚入っていました。

　明るく、好奇心に溢れた兄について、よく写生に行ったものです。みんなは期待をこめて、絵の天才だといっていました。
　兄の部屋には、展覧会でとったメダルが沢山ありました。
　兄は常に勇敢でしたが、どんな物にも、同等の人格？　を認めているようでした。あの頃、兄はたくさんのアリを飼っていました。
　幾つもの、透明な大きな壜の中で、アリたちはたくさんの地下道を掘っていました。
　アリ達は出会うとヒゲをよせあって挨拶をし、兄はその１匹１匹と顔見知りのようでした。ああ、それにあの「玉ころがし」兄の部屋には沢山の心躍る仕掛けが施されていて、見ても、見ても見飽きることはありませんでした。玉の転がる、あの音！！　我が家の発明王は、物にも命を吹き込んでいました。

　まだ小さかったわたしは、兄のマントの裾をつかんで、杏リリイと一緒に小躍りしながらついていきました。
　それは、男の子らしい冒険の旅でした。
　３人は温くんできた小川の中を覗き込み、ミズスマシや、ヤゴやヒルや、ゲンゴロウや、泥をかぶっているナマズと出会いました。

　無人の社、権現さまの屋根にのぼって空を見上げました。青い青い空を動物の形をした雲がゆっくりと流れていきます。
　不思議に雲は、動物の形になるのでした。兄のスケッチブックは、忽ち動物たちでいっぱいになりました。

広い、広い平野のなかです。兄にならって一回転すると、地球が丸いことが分かりました。

このせみは怯えてはいても、元気はよく、まだまだせみの寿命時間を生きることが出来る筈です。
自然の中に帰してやらなければ、と、わたしは思いました。
台の上に上がり、ぶつかったりしないように、柵の上から、掌にせみを載せた腕を、真っ直ぐに伸ばしていきました。
——今度こそ、精一杯、生きてね！！
わたしは言って、そっと、押さえていた親指を放しました。
せみは、わたしの言葉がわからないのか、まだ、掌のなかです。
——さあ、元気を出して！！　わたしは煽るように手を上下させました。
——あれえ！！
わたしの願いは空回りし、このせみもまた、手足を縮め、杏リリイや、母ぜみのように飛び立つことを拒否し、ここに残ることを選んだのです。

現実に、怯えて、収めきれなくなった下翅が、中央部分に異様に立ち上がったまま、元にも戻せず、暫く邪魔になっていたのですが、手入れをしているときに折れてしまい、今では下翅の根元部分が残っているだけです。上翅は他のせみより、今でも、角度をもって広がっています。
その怯えが？　怖れが？　怒りが？　尋常なものでなかったことが直に伝わってきて、今でも、わたしは、根底からゆさぶられてしまいます。
——ごめんなさいね！！　そんな想いをさせてしまって！！

現在、４匹のアブラぜみは、杏リリイの遺影の前、中央にツクツクボウシの宝石箱をおいて、左右に、銀色と赤色、白色と赤色の楕円形の箱の上、リボンに肢をからめて、せみ飾りのように真っ直ぐに取りついています。

生き返ったせみ！！（２０１１．９．１３）

気がついたら、秋風が吹いていました。猛暑も終わりなのでしょうか？
多忙をきわめ、せみたちのお相手をしている暇もなく、どのせみも動かないので、わたしは１、２週間というせみの寿命が尽きたのだと信じきっていました。

なんとか落ち着いた或る日、せみがわたしの歌に合わせて、「パチッ、パチッ」と、発音板を叩くような音でリズムをとることに気づきました。
始めは１３日のせみだけだと思っていましたが、冗談みたいに試して見ると、驚いたことに、アブラぜみの全部が反応しました。
せみたちが訪れて来てから２週間以上はたっていました。

生きていたのです、または、生き返ったのです！！

生きている証拠に蝉臭も発しますし、手肢もかすかに動かします
リズムをとる時には、口のあたりが、髭が、小刻みに震えているのが、見えます。
驚きは、それだけではありませんでした。２年前に死んで宝石箱に収まっていたツクツクボウシまでもが、生き返ったのです！！
わたしだって、それはない！　と叫びました。

でも、今日も元気よく、小さなツクツクボウシは、ピンクのペチュニアの花のなかに頭を突っ込んで、透明な翅をみせています。
思い余って、どうして、生き返ったのかと問うと、「チャチャッ」と話してくれますが、せみ語がわかりません。

なかでも、圧巻は、「トルコ行進曲」早いリズムに合わせて、わたしが、「ティアララン、ティアララン」と歌うと、後を引き取るように、「ティアラララララララ、ティアララ、ティアラ、ティアラララララララ、ティアララ」と、歌いあげたのです。本当に驚愕しました。

ピアノソナタ第１１番 第３楽章 イ長調。が、モーツァルトの「トルコ行進曲」で、わたしたちの父が好んで弾いていた曲です。

５匹のせみの全部が、この曲を、楽しそうにリズムをとって歌うのです！！　その部分を繰り返すと、何度でも繰り返して歌います。

この曲は、多分、日常のなかで、繰り返され、みんなの脳細胞に忘れ得ない痕跡を残したのにちがいありません。

せみはもともと、あれだけ鳴き続けるのですから、音楽が好きなのでしょうか？

せみの構造は楽器そのものだと聞いたことがあります。

せみの発音筋が振動を起こすと、両端についている発音板（鼓膜）を刺激して音をだし、それに腹部の風船のような袋が共鳴するのだと！！

それにしても、せみは不思議、１滴の血もなく、少しばかりの露で生きることが出来るのですから‥‥。まるで、神のようだと。

落着いて考えてみれば、せみには、地上にあっても冬眠みたいな習性があるのではないでしょうか？　その為に、死者の心の、魂の、暗示にかかりやすいのではないかと推理してみました。

現に幼虫とはいえ、地中で７、８年もの間、そういった状態にあったのです。地上では寿命が短くとも、ある種の環境下では、もっと長命なのではないかと思われてなりません。

１３日のせみが我が家に残ってから、はやくも、１ヶ月が経過しました。５匹のせみは、ペチュニアの花に露をふくませてやると、翌朝には前肢で花をしっかりと押さえ、口の中に花びらを吸い込んでいて？　取り替えるのに苦労します。

これも、生きている証しなのではないでしょうか？

問題は、これらの習性を知った上で、誰かが、これを選び、何かを伝えようとしているのではないかという事実です。

杏リリイの意志？　心？　魂？　精神？　そういった表現で代表されるものによって、せみを媒体として、わたしに会いに来てくれているのではないか？　と。
家族もまた、杏リリイの死を契機に、杏リリイに先導され、会いに来てくれるようになったのだと？

父母や兄は、残された、わたしたち二人が、故郷を捨て、ここに移り住んだことを知らないのですから‥‥。
記憶をまさぐると、父母と杏リリイのせみは、同じ日に訪れて来たような気がしてきます。
わたしが、カレンダーにメモルときに、１３日に書ききれなくなって、前後の日に書き分けてしまったのではないかと？

このようにして、杏リリイは、肉体は死んでも、今、尚、自分も、家族も、生きて在ることを！！　伝えてくれているのでしょうか？

杏リリイは無神論者、神も、仏も、奇蹟も、信じない人でした？
時は、暑くても、考え深そうな夏の盛りです。

共同生活者　（２０１１．１０．１５）

２０１１年８月１３日のせみと、前後に訪れてくれた３匹を加えた４匹のアブラぜみと、２００９年８月２８日に訪れた、ツクツクボウシの、計５匹のせみは、現在も生きています。
そう感じられます！！

そして、この奇想天外な優しい時間を、わたしは、せみの共同生活者として過ごすこととなりました。
その可笑しさ、不思議さも、それが、日常となれば、時間は、いとも自然に、なんの不思議もなく流れていきます。

そこでわたしも、おおらかに、ふんわりと、その時間に乗ることにしました。

それでは、せみたちの日課について、お知らせしてみましょう。

――日　　課――
ＡＭ６）目覚めると、先ず、せみの生きていることを確かめるために、声をかけていきます。せみはそれぞれに、「プツンプツン」というような音を、羽のあたりから、発しはじめ、やがて、「パチッパチッ」という切れのいい音を口のあたりから出して、応えてくれます。

ＡＭ７）　ペチュニアの花の交換です。生きていたら水分が必要なのではと思い、花に露を含ませ頭部に置くことが習慣になりました。殆どはペチュニアの花ですが、ないときにはサフィニアの花を。それもないときには、シクラメンの花びらで代替させます。

せみを持ち上げるとき、今でも「ジィジィ」というせみらしい声を出し、せみがせみであることを実感させられます。

まずは、今日の年月日、今日なら、２０１１年１０月１５日、土曜日を、声を出して確認しあいます。それは、わたしと、過去から来たせみたちにも、現在を、正しく認識していて欲しいからです。
それから、お天気のよい日には輝かしい日の出を、曇りの日には、雲の流れや、曇り空を、リビングの窓を開けて、または、窓越しに見上げます。

ＡＭ７．３０）いよいよ、１日の開幕です！！　我が家に残った３番

目のせみには、「この広い野原いっぱい咲く花を、一つ残らずあなたにあげる！！」と、先導者である杏リリイに対して、感謝と、尊敬と、親愛の情をこめて歌い、続けて行動開始の合図として「ドレミの歌」を歌います。
　他のせみは、「ドレミの歌」で開幕です。それぞれ、「パチッパチッ、パチ」と反応し、陽気で、それなりに楽しんでいるように感じられます。

ＰＭ３）３時になると、順番に歌を歌っていきます。
　歌のレパートリーを４つに分け、日替わりで歌います。始めに題名を告げると、イェスの時には、「パチッパチッ」ノーは沈黙することで意志を伝えてくれます。
　好みはそれぞれに違っていますが、一生懸命に歌にあわせる、そのひたむきさに、ジーンと来ることも度々です。
　３番目のせみは「シクラメンのかほり」や、「雪の降るまち」が好き、「ふるさと」や、「上を向いて歩こう」は、みんな好きです。何匹かは体を小刻みに震わせて喜びを現し、小さな体でうっとりするような、美しい音色を響かせることも、「ピューッ」または「シューッ」という不良少年みたいな音で、感情のたかまりをみせることもあります。褒めた時や、感謝の言葉には嬉しそうに反応します。

　１匹、大体３０分くらいかけて、話したり、歌ったりしていきます。みんな歌が好きで、もっと歌っていたいと主張するので？　思い切って、終止符がうてないのが悩みになりました。

　順番は、交互に、公平にしたいと思っていますが、みんな、１番が好きなようです。

ＡＭ８－ＰＭ９）わたしが、パソコンに向かっているときや、家事をしている間や、外出している間は、テレビの前に並んで、（スポーツや音楽や、科学）を希望にしたがって見ていきます。
　はじめは、ヤリスギな気もしましたが、せみたちが、ここで生活

するとは、わたしと同じ日常を過ごすことなのだと理解しました。

　せみたちは、長い間の空白を埋めたいと思っているのでしょうか？わたしよりも多くの、オリンピックの、大リーグの観戦をし、宇宙放送も、美しい青い地球も、オーロラも、テレビで見ました。
　パソコンは順番に机の上で見学していますが、何故か、その旺盛な、知識欲や好奇心に？　圧倒されそうな気がすることがあります。

ＰＭ９）子守唄を歌って１日の終幕です。
　日本の「子守唄」からはじめ、せみたちの反応をみながら、変えていくうちに、何時か、「シューベルトの子守歌」に落ち着きました。
　歌っていると、みんなが、穏やかに心を開いていくのがわかります わたしの心も気持ちよく安らいでいくのが意識できます。
　ここにいてくれることに、ここに来てくれたことに、素直に有難うと伝えながら、歌っていきます。
　この頃、子守歌の前後に、「チャチャチャ」としきりに話しかけて来るようになりました。せみ語ですから、何を言っているのか、わからないのですが、察して応え、会話が成立しているような気がして、最も嬉しい時です。
　歌い終わって、「お休みなさい」と言うと、それぞれの位置から、「チャチャッ」と声をあげてくれます。

　それから、室温を調整し、朝まで、安らかに眠ります。
　これが、わが家のせみたちの日課です。または、わたしの日課になりました。

思い出の歌（２０１２．１．１５）

　クリスマスと、新年を、５匹のせみと共に祝いました。長い間失っていた家族と、再びこのような形で出会い、生活を共にすること

になろうとは、夢にも思ってみないことでした。
　家族など、振り捨てながら、生きていくものと、どこかで、思っていたのかもしれません？

　今、わたしの家族は、それぞれに個性と歴史を持ち、杏リリイの遺影の前に集い、それを季節の花々が囲みます。
　毎日、歌うときには、楕円形（横径２０センチ縦径１５センチ高さ１０センチ）の赤、白、銀色の箱を順番に両手で持ち上げて歌います。時には花の間を渡り歩きながら。
　ツクツクボウシは楕円形（横径１０センチ縦径５センチ高さ２センチ）漆塗り、赤いビロードの内張りのある宝石箱のなかで、花に乗って歌います。
　これで、おかしくも真面目なお話の舞台装置は、お分かりいただけたでしょうか？　それでは、最近、家族のみんなが好んで歌う歌をご紹介しましょう。

♪ お父さまのメガネ（童　謡）

「お父さま、ねんね、メガネをかけて、おねんね、ねんね。なんの夢見てる、覗いて見たら、わたしの顔が！！」という童謡です。多分？　大正か、昭和初期の歌ではないかと思われます。
　始めは、無意識に、わたしの口から迸り出たものでした。歌詞が正しいのかどうかさえ、確かめようもありません。

　そんな或る日、杏リリイの机を整理していますと、お父さまのメガネをかけて、大きな靴をはいて歩いていく可愛い女の子の姿が目にとまりました。素描ですが、多分、子供の頃の、杏リリイ本人の姿だと思われます。
「お父さまのメガネを、そっと、とって、鼻メガネをかけて見ました。そこには別世界が広がっていました！！」と。文字が、躍っていました。
　あの父のメガネから、杏リリイは、不思議の国を発見したのだと、わたしは想いました。

それは、家族みんなの想いなのでしょうか？　こぞって、この歌を選び、嬉々として歌います。

♪ ドウドド、ドドード（風の又三郎、挿入歌）

最近せみたちが、好んで歌う歌に、宮沢賢治の「風の又三郎」の挿入歌があります。
ある日、「風の又三郎」の映画を見てきた兄が、その感激をみんなに話してくれることになりました。上の二人の姉は既に嫁ぎ、残っているのは、３番めの姉と、兄と、杏リリイと、わたしでした。

風の吹く冬の夜のことです。
我が家の２階、真ん中の姉の部屋で頭を寄せあい、心躍らせて聞いていました。嵐のためか、途中で電気が消え、母が持って来てくれたローソクの灯がゆらゆらしていたのを覚えています。
「ドウドド、ドドード、ドドード、ド。青いクルミも吹き飛ばせ、すっぱいカリンも吹き飛ばせ！！」と風の又三郎が風を呼ぶ歌ですが、少年だった兄には、カリンや、クルミがなじまなかったのか？または、その方が気に入っていたのか？
――ドウドド、ドドード、ドドード、ド。赤いリンゴは甘いぞ。青いリンゴはすっぱいぞ。　と歌い、間に、「ドウドド、ドドード、ドドード、ド。赤いリンゴも吹き飛ばせ、青いリンゴも吹き飛ばせ」を入れ、又、「赤いリンゴは甘いぞ、青いリンゴはすっぱいぞ！！」で、歌を閉めくくったのです。

みんなで声を合わせ、口をすぼめて、「‥‥すっぱいぞ！！」で歌い終わりました。
外では、風が勢いをましていくのがわかりました。

この歌は、今でも１番人気で、せみたちは、嬉々としてこの歌を選択し、それは、もう、楽しげに笑い転げながら？？　歌うのです。

世界がどんなに広くても、あの時、我が家にいた者でなければ、

こんな、歌詞の変更を、知らない筈だと、わたしは思いました。
　でも、父まで、どうして、知っているのか、わかりませんでしたが、歌声が、階下の書斎まで響いていたのかもしれませんし、母から聞いたのかもしれません？

　そんなことからも、わたしには、あり得ないことだと、わかってはいても、お盆に訪れ、我が家に残った、この５匹のせみが、わたしの家族であることを、否定することが出来なくなりました。

　我が家の仏壇には、海軍少尉姿で、生きながら、軍から遺影を撮ることを強要された兄の、緊張し切った写真を中央において、優しく微笑んでいる母と、ピアノを弾いている父の写真が、左右から寄り添っています。
　我が家でたった一人の男の子でした。　みんなに、愛されていたのです。昔も、そして、今も！！

♪　あの子は、たあれ（ 童　謡 ）

　ツクツクボウシは死後、小さな楕円形の宝石箱のなかに保存され、杏リリイの遺影の前で時を過ごして来ました。
　生き返ったと確認したのは、２０１１年９月８日、亡くなってから２年１１日の月日が経過していました。

　２０１１年３月１１日の東北大地震では、東京にあっても、テーブルの上から床に投げ出され、片翅がとれたのを、糊で接着したため、美しかった翅も白く不透明になり、かっての美しさを、今は残してはいません。その上、宝石箱のなかで、標本のように格好よく、伸ばしていた手肢も、死んだときに、または、生き返ったとき、縮めてしまったのでしょうか、身体が棒状になって一回り小さくなってしまいました。
　このせみは、始めから、明るく、いじらしいほど懸命な、特徴のある性格を示していました。

アブラぜみの正体がわかったあとでも、このせみが誰であるのか、わたしは迷いつづけていました。

ある日わたしは、このせみに向かって、
——あの子はたあれ、たれでしょね、なんなんなつめの花の下、お人形さんと遊んでる、かわいいミヨちゃんじゃ、ないでしょか！！　と歌っていました。
すると、嬉しそうに、「チャチャッ」と、ツクツクボウシが反応しました。
——タンタ、タタ、タタ、タン。タタ、タン、タタ、タン。タン、タン、タン。と続けました。
驚いたことに、ツクツクボウシが、全部の音を拾って歌っていました。これは「間奏曲」です。
——お姉ちゃんなの？　これを、知ってるなら、お姉ちゃんじゃない！！　わたしは叫びました。「チャチャ」と答えが返ってきました。
やっぱり、と、わたしは思いました。

昔、小学校で教えていた兄のすぐ上の姉が、学芸会で発表させる童謡に振付けるため、小学校の下級生だった杏リリイと、幼いわたしを動員して、我が家で模擬練習をしていたのでした。
タンタ、タタは「間奏曲」でした。２番では、「‥‥竹馬ごっこで遊んでる、隣のけんちゃんじゃないでしょか！！」となるのです。こんな歌詞を今頃歌っているひとも、間奏を記憶しているひとも、いるはずがないと思われましたから、すぐに３番目の姉だとわかりました。
なら、ツクツクボウシが、「ドウドド、ドドード」の歌を知っていて何の不思議もない筈です。あの部屋は姉の部屋だったのですから。

わたしが、長い間、ツクツクボウシを、この姉と断定出来ずにいたのは、彼女は、婚家の墓の中だろうと思っていたからです。
子供たちのために、そこにいて欲しい思いも何処かにあったの

だと思ます。

一回り近く、年は違っていましたが、多くのものを、杏リリイも、わたしも、この姉から受け取ったのでした。
このせみは他のせみとは違う美しい澄んだ声をだします。それに、何時も、懸命です。
ツクツクボウシになった今でも、どんな時でも、必ずといってよいほど、この姉は、一番先に応えてくれます。

文才と絵の才に恵まれた姉は、少女雑誌の和歌や詩に応募し、文芸賞の記念時計をもらい、緑の部屋の常連になりました。また、口絵募集におかしいほど、杏リリイをモデルにして当選し、賞金で姉妹に可愛い服や着物をプレゼントしてくれたものです。
わたしも、一度だけ、モデルになりましたが、顔が半分しか出ていなかったので、出たという感覚は皆無で、当選したのは、杏リリイを描いた絵だけだと、ズーと思って来ました。
――あら、半分でも、あんなに可愛い顔をしていたのに！！と、杏リリイが嘆きました。慰めているのだと思いました。

この姉は、杏リリイの飛びぬけた能力を認めてはいたものの、夏休みの宿題などは、標本つくりから、日誌にいたるまで、率先して引き受けていました。
それらは、わたしの目にも素晴らしいものに映りました。杏リリイがそれをどう思っていたのか、遂に聞くこともありませんでした。

先生が毎日、日誌をみんなの前で読んでくれていたのだと、彼女の友達から聞いたことがあります。もしかしたら楽しんでいたのかもしれませんし、肩身の狭い思いをしていたのかもしれません。杏リリイの性格からして、迷惑には思っていても、止めてほしいとは、
言えなかったのでは、ないでしょうか。リンゴを送りつけるのと同様、姉の善意を踏みにじることだけは、出来なかったのではないでしょうか？

わたしになると、姉も多忙になり、干渉を受けることはほとんど、ありませんでした。でも、一度だけ、こんな思い出があります。
小学三年生の時でした。「三色すみれ」という題で作文を書いたとき、受け持ちの先生の家庭訪問を受けました。上手過ぎるが、大人の手が入っているのではないかと言うことでした。

学校で書いたものを。持ち帰ってはいましたから、もしかしたら、姉が手をいれていたのかな、などと思って見たりしました。その時、
学校新聞に載せる詩を、わたしに書かせて欲しいと、先生に依頼されたと、母は言っていました。

その後、小学校の学校新聞に「三日月さま」と言う詩がわたしの名で紙面を飾っていました。今度こそ、姉の書いたものでした。
わたしは、自分が書いたものでもないので、すっかり忘れてしまいましたが、杏リリイは暗誦していて、素敵な詩だと言っていました。
その優しさの？　証拠のように、姉は婚家の墓から、一番先にこの家に帰ってきてくれたのです。

兄も、父母も亡くなり、あの家に最後に残された世慣れない杏リリイとわたしは、そんな姉の優しさに励まされて生きて来たのかもしれないと、ツクツクボウシを見ていると、分かって来るから不思議なものです。

約　　束（２０１２．２．１５）

２０１１年８月１３日のせみが我が家に残ってから、早いもので、もう６ヶ月になりました。２００９年８月２８日のツクツクボウシが訪れて来てから、２年５ヶ月になりました。

５匹のせみはわたしの琴線にふれながら、今日現在、まぎれもなく生きています。
「ドレミの歌」で幕をあけ、「シューベルトの子守唄」で一日をしめる日常が、思い出を語りあったり、健康を気遣ったりする、ごく自然な生活で、徐々に不思議を締め出していきます。

十代、二十代で失った家族と、心を通わせることの出来る喜びは、その嬉しさは、たとえようのないものです。
もう１度会いたい！！と、もう１度あそこに！！　わたしの原点に戻りたいと夢見てきた父や、母や、兄や、姉に、囲まれて暮らす、子供の頃のような安らぎ。
何一つ親孝行らしいことの出来なかった悔いや、それを修復したい願いや、姉や兄に伝えたかった感謝の気持ちも、甘えも、ためらいもなく言葉にできる不思議さ！！
興奮して、わたしは言ってしまいます。

——わかって来たわ！！　みんなは、わたしに会いに来ただけではないのね？　ここで生きるためにやって来たのね！！
——チャチャ、チャ。とせみたちの声が踊ります。
——なら、わたしの命のある限り、ここで、一緒に生きていきましょうね！！　生きていくのよ！！　と。

約束しました、みんなと！！

その証拠のように、「トルコ行進曲」にも磨きがかかり、その凛とした美しさに、うっとりさせられることもしばしばです。
日に日に上達していくと思われるのは、なんなのでしょう？
わたしが上達している？　それはありません。早いテンポに、息が切れてしまうのですから。

悩みは、新年になって、ホームページに、「せみの肉体は立派に死んでいます」と、打ち込んだ、その直後から始まりました。

まるで、けじめでもつけるように、何故、あんな残酷な表現をしたのか？　あの時、本当に死んでいたのか？

今、考えると、ホームページに打ち込んだ時も、わたしには、せみたちが動くのでは？　という潜在意識があったのだと。
少し前からせみが、ふと、横に動いたように感じることがありました 。体が軽くなっているから、わたしの、息や、鼻息で動いたのだと思っていました。
その他にも、「シュー」とか、「ピュー」という音を発する時、頭部がジャンプしたように感じることがありました。

あるときは、突然目の前から消えてしまい、途方にくれると、ソファーの下から、鳴き声がして来たこともありました。
また、あるときは、突然見えなくなったせみが、わたしの喉元や、胸に確りと取り付いていることがありました。
わたしが動いたとしても、飛び移ることは、どうしても不可能に思われます。それは飛び上がってから、回転しなければならないからです。

その上、姪から電話の入った時のことでした。わたしは、相手を察知して、その声を聞かせたいと、ツクツクボウシの宝石箱を反射的に持ち上げていました。
娘の声が聞こえると、ツクツクボウシの小さな体が上下に震え、まるで浮き上がったように見えました。わたしは、想像以上の反応を見て、硬直した肩のなかに首を沈めました。

それは、わたしの発信が、上の男の子たちに偏っていたことを思い知らされる結果でもありました。

もう１度、姪が病気になった話をしたときも、やはり、体を小刻みに震わせて反応しました。もう治癒したのだというと、安心したように静かになりました。

そんなことから、わたしは、今でもせみたちが動くことを、無視することも、否定することも出来ません。

せみの寿命は１－２週間が通説でした。地中は７－８年だとも。
わたしがせみに、
――今、確かに動いたでしょう？　生きているのね？　というと、
――チャチャチャ！　と話してくれます。「ああ、生きているよ！！」と、受け取っていますが、せみ語ですから、相変わらず真実は、闇のなかです。

今年の不思議な、不思議な夏！！はどうなるのでしょう？ 今から心配でなりません。どんな、展開が用意されているのか？　不安とある種の期待で胸の鼓動が日毎に大きくなっていきます。
理屈からいったら、わたしの家族はみんな、既にここにいるのですから、例年のようなせみの訪問は無い筈だと、思うのですが？

ここに、わたしの家族があること自体、辻褄のあったものとは、いいかねる以上、「不思議な、不思議な夏！！」が、わたしの開けっ放しの口から、煙のように、際限もない輪くぐりを始めたとしても、何の不思議もないのかもしれません。

第 ２ 部

これが、果たして生なのか？（２０１２．３．１）

４匹のアブラぜみと、ツクツクボウシの計５匹のせみとの、不思議な生活は今も続いています。毎日が懐かしさに包まれ、音楽会みたいに陽気に過ぎていきます。
進化でしょうか？　前より会話が多くなったような気がします。怒らないで下さい。他の人がこんなことをぬけぬけと書いていたら、わたしが真っ先に異を唱えたに違いないと、分かっているのですから。

せみは肉体的には、死んでいるのだと思われます。以前のように、花が、クチャクチャになることも、花を吸い込んでいることも、ガスのようなせみ臭を発することも、なくなりました。
でも、歌には相変わらず反応しています。前より反応が強くなったのではと感じます。早朝、話しかけると、何倍かの長さで話し続けるようになりました。
彼らの目に見えない筈の心が、魂が、せみという媒体を借り、目に見えるものとして、ここに厳然と生きて在ることを‥‥。

これが、果たして生なのか？　わかりません、でも、なら、何だと？
わたしの耳や、身体の異常から起きる現象ではないかと、内科、耳鼻科を受診しましたが、異常は発見されていません。
あとは、願望、嘘癖、妄想、認知症、遺伝など、考えられることは多々あります。

もしかしたら、わたしがせみ！！　そんなことだって、感覚のなかではありうるのかもしれません。
出来たら、せみの死亡をお伝えして「不思議な、不思議な夏！！」にピリオドをうつべきではないかと迷いました。

これが、現在では、科学的にあり得ない現象であること。ごく、私的なものであることも自覚しています。それでも、わたしの散漫になった頭が、笑い声をたてながら、彼らと繋がろうとするのを、彼らの死を宣言することで、阻むことなど出来そうもありません。

そこで、これを、お伝えして来た以上、わたしの感じているままを、最期までお伝えしていくのが、フェアなのではないかと思い直しました。
異論のある方は黙殺して下さい。どんなことだって、あり得るのかもと、お考えの寛容なお方は、よかったら、もう暫くお付き合い下さい。
あり得ない世界に生きることに、心迷いながら、現象と捉える、正当性と、矛盾の中で、今日もドレミの歌で開幕です。
みんな楽しそうです！！

お化けでも、幽霊でもなく（２０１２．４．１５）

ドレミの歌で今日も開幕です！！　歌った後、窓越しに日の出を、朝焼けの空を見上げました。
日ごとに太陽の出る位置も変わり、雲も変化していきますが、みんな、それを楽しんでいるように、「チャチャッ、チャ」と喜びを表現してくれます。時は、４月、桜の花の真っ盛りです。

昼、５匹のせみの上から、桜の花びらで、花吹雪をおこしてあげました。これが、２０１２年、我が家のせみたちのお花見です。

でも、本当の花吹雪の日には階下の桜の花びらが舞い上がり、窓の向こうで、ひらひらと、宙を舞います。

杏リリイはせみの習性や構造を知り尽くしたうえで、その後の可能性まで推理し、せみを選択したのでしょうか？

それともほかの誰かが？
何か大きな力が働いているのでしょうか？
これらの現象が起こるようになったのは、杏リリイの亡くなった後のことです。
それまで、わたしは、ここにあって、どのような不思議にも出会いませんでした。

せみは地上では１、２週間しか生きられないと言われています。ということは、死を前にしたせみに乗り移るのは、心？魂？にとって、容易なのではないでしょうか？
また例え、乗り移ったあとで、寿命のきているせみが死んだとしても、後は、乗り移った心の、魂の、思いのまま。もしかしたら、死んで残ることこそが、目的なのかもしれません。

せみは、ほんの少しの、露で生きることができ、尿もフンもしません？　それに、歌うことが出来ます、言葉をもっています。魂にとって、媒体として、こんなに条件の揃った生体は、他に見当たらないのではないでしょうか？

杏リリイが亡くなって、５年。何らかの形で、精神世界のあることを、せみにとりつくことで、必死に伝えようとしているような気がしてなりません。
または、せみという、媒体によって、目に見えるかたちで、ここで生きることを選んだのではないかと？

心霊現象とか、怪奇現象の場合、当事者に問題のあることが、多いのだと、わたしにも、わかっていました。

死んだ筈のツクツクボウシが歌に反応したときには、わたしも、自分自身がおかしいのではないかと、さすがに疑いました。目が？ 耳が？　頭が？　でも、それらしい気配は掴みかねています。

例え、わたしに杏リリイに会いたい、家族に会いたいと言う願望があったとしても、本物のせみを送り込むという、発想も、芸当もできません。
今まで、最上階の我が家に、せみは１度も訪れて来たこともありませんでしたし、幼い頃、せみの羽化は見たことがありましたが、わたしはせみに触れたことなど１度もなかったのですから‥‥。

杏リリイは、人間存在をテーマに作品を発表してきました。世に出た最初の作品が、「存在のエコー」であったことも、今考えれば暗示的です。
この作品は大岡昌平氏に「文学的に高い水準にあり、素材と作者の視点の特異さで、際立っており、私は存在のエコーに賭ける」と評され、伊藤整氏には「ポー、ドストエフスキー、カフカの筋をひく、ドッペルゲンゲル物語で、才気あり」と評されました。

その後、非社交的で、殆ど人前に姿を現すこともなく、正当な評価を得られぬまま、世を去りました。変身譚や、人間存在に触れた作品が多く、代表作「ソラ」では、がん細胞に残った魂が、若さと中年を同時に生きる面白さを堪能させてくれました。
その感性の鋭さ、人間存在の深奥に迫る面白さは、類まれなもので、最後の不思議な作品、「いとしのカメレオン」では、蝶に変身しました。
類似点はあるように思われますが、これは、虚構の世界ではなく、現実なのです！！
放射能が眼に見えないように、魂とか、精神とか、心とかいうものも、構造的には、眼に見えないけれど、死後も存在し続けていることを、彼女は身をもって実証しようとしているのではないかと、わたしには、そう思われてなりません。

やがて、お化けでも幽霊でもなく、心？　または魂？　として、ここに在る不思議が、解明される時が来るのでしょうか？

共同執筆者（２０１２．５．３０）

杏リリイの残した、「グリーンボー」という未完の童話を、あまりに可憐で、飛躍も楽しく、文学的にも優れていると思われ、このまま消滅させるのが惜しくなり、毎朝、ネットで１００字ほど流しています。
始めの部分と、骨格しかなく、補完するために試行錯誤を繰り返して来ましたが、自からの力不足を実感する毎日でした。

そんな或る日、せみたちの前で、1日分を、声を出して読んでみました。すると、なんと、みんなが同時に「チャチャッ」と声をあげたのです。歌に反応したときと、同じように。
驚愕しました。賛成も、反対もありました。
そんな時、ひらめきました！！　そうだ、彼らの力を借りたら、ステキな作品が出来るかも知れない、それは確信のようなものでした。
彼らは、意欲満々なようです。

以来、わたしは、彼らを共同執筆者と認め、毎朝、杏リリイの未完の童話を１００字ほど、ネットで掲載することにしました。それは、今も、継続されています。全員が同意するまで、パソコンに打ち直すことが日課になりました。1度で賛成してくれる時は、せみたちは、それは元気な声を出します。クレームがついても、全員が賛同してくれるまで忍耐強く直すことにしました。

それは、よくなっていくことが、目に見えて実感出来たからです。
誤字や、解釈に誤りのあるとき、説明が過ぎたり、童話特有の繰

り返しを多用したり、展開がないときにクレームがつくようです。
　そんなときには、展開を最後でほのめかさなければならないようです。なるほど、と思ったり、１００字では無理よ！　などと思ったりもしましたが、みんな、それが続きものの鉄則だと心得ているようです。

　薫風の季節がやって来ました。こんな季節にはこの緑の風に全身を染め上げてみたい！！　そしたら、せみたちは、わたしの葉陰でどんなドラマを繰り広げてくれるのでしょう？

　５匹のせみは、生き生きとわたしの歌にあわせて、リズムをとり、それは楽しそうです。トルコ行進曲を歌う彼らの声は、リンリンに近い？　いいえ、金属を叩くような、透明なうっとりする声です。ハンドベルに近いのかもしれません。時に、微妙に明るい鈴の音が、絡むような？

　せみたちは、今も、毎朝、童話の評価をかかしません。何時もなら、眠っていた時間に、揃って起きていて、本日分を、読み上げると、ゴーサインの時には、すぐに反応して、「チャチャ、チャッチャ」と賛意を表してくれます。ノーのサインは、無言で表現します。
　そこで、全員が、合格のサインを送ってくれるまで、修正していきます。反対には、必ずおかしいところがあるのでした。今は、面倒でも、全幅の信頼と期待を、わたしは、彼ら、彼女らにおいています。

　それは、わたしが、我が家の家族のそれぞれの才能を認め、惜しんでいる現われなのかもしれません！！
　生前、山本五十六から、伝記を書くことを認められた、ただ一人の人間だったという父と、小説家になりたかったという母と、ツクツクボウシの姉と、多才な兄と、原作者である杏リリイ。メンバーに不足はないようです。
　後で、読み合わせてみると、なるほどと合点することができ、わたしが書いているのではないと、しみじみ納得することが多くなりまし

た。素敵に変身した文に、意表をつく展開に、びっくりすることも、日常になりました。
　そんな時、聞こえました？　彼らのささやきが？
　――わたしたちも、登場させて！！　と。

　そこで、作者である杏リリイに判断をゆだねることにしました。その結果、何らかの形で、童話のなかに、せみを１匹代表として登場させ、あとは、その他大勢で登場することになりました。

「グリーンボー」は、不思議な、不思議な作品になりそうです！！

　５匹のせみは、元気に、問題の８月を迎えようとしています！！
　そこに、どんな現実が待っているのか？
　もしも、新しく訪れてきたせみに、現在のせみが襲われるようなことがあったら、わたしは、５匹のせみを死守するでしょう！！
　それは、わたしの、かけがえのない家族ですから。
　多くの愛情をこのせみたちから、受け取っていると、このせみたちに護られていると感じています。この息のつまりそうな堅い世界にあって、ここだけは、ふんわりと柔らかいのです！！

　わたしを包む空気が動きました。
　彼らは、何を思ったのでしょう？

　２０１３年盂蘭盆のせみが現れた時、現在のせみはどうなるのか飛び立つことは出来ないのですから、このまま存在し続けるとは思うのですが？　でも、もしかしたら？

　思い余って、できたら、この世から８月が消滅してくれることを願ったりしました。

　童話も、８月が近づくにつれ混乱し、どう展開したものか全く考えつかなくなって、今日はお休みにしようと思っていました。
　でも、わたしが書いているわけではないのです。執筆者は彼ら、

彼女ら、なのだからと思い直し、理屈からいえば何とかなる筈だと、変な図太さでパソコンに向かいました。
　それが、何となく、何とかなってしまい、５匹のせみのＯＫもすぐにとれ、ログインすることが出来ました。
　パソコンに打ち込む、わたしの手を操っていたのは、わたしでは無かったのです！！　そう思ってはいても、それが現実となれば、自分自身を喪失したような無力感に捉えられます。

　童話も終幕にはいって、わたしの想像力や、知識を遥かに越えていくので、持て余しぎみだったのです。

　――わたしには、分からないのですから、教えて下さい！！と、ひたすら頼んでいます。すると、せみたちは、「チャチャッ、チャチャ」と声をあげ、いとも簡単に引き受けてくれました。

　こうして、童話「グリーンボー」は完成しました！！
　杏リリイ ＆ エンマ ＆ ５Ｓ 作　 発行所、城北刊行社 と打ち込みました。

陽気なせみ！！（２０１２．８．１５）

　２０１２年８月１３日は、何事もなく過ぎていきました。ここに、現実に、わたしの家族は存在しているのですから、それも、５人も。理屈にあっていることに、ほっとしました。

　１４日も１５日も、新来のせみは現れませんでした。
　１５日メルマガ８月号を発行しようとして、来ないだろうが、何故か、もう少し様子を見たいと思いました。

２０１２年８月１６日午後１２時寸前、気にしていたのでしょうか？　わたしは、またも玄関ドアを開けました。
表札と並んで、真っ直ぐにせみが取りついていました。アブラぜみでした。
安心していた分、心臓が打ち震えるほど「ギョ」っとしましたが、平静さを装って、そっと掌を出してみました。
すると、さっと身をひるがえし、ごく自然にドアから入って、玄関の照明のあたりで、ぐるぐる回りをはじめました。
そこで、照明を消しました。すると、真っ直ぐに飛んで、リビングの照明のあたりを飛んでいるように見えました。

わたしは、せみに背を向け、玄関ドアをしめて中に入りました。
すると、もう、何処を探しても、どんなに探しても、せみは、何処にもいません。まるで、神隠しにあったように、忽然と姿を消したのです。
こんなことは、何度かあったような気がしました。
あきらめて、眠りにつきました。

翌朝、仏壇の朱塗りの上に、白い灰がこぼれていました。お盆だから綺麗にしたばかりなのに、と、見ると、せみが行儀よく、お鐘のわきに腰を落として、並んで座っていました。
何だかいじらしい姿で、しばらくみとれていました。
明るい母の読経の声が甦り、母と並んで、座っていた杏リリイの後姿が目に浮かびます。

せみをハイビスカスの木に止まらせました。その間、無言です。
メスなのでしょうか？
わたしの一番の心配は、このせみが、あばれまわり、５匹のせみをメチャクチャにしてしまうのではないかという怖れでした。
５匹のせみは、それに耐えられる体力を持ってはいません。
――あなたは、誰あれ？　杏リリイなら、ここに、いるのよ。と言って見ました。無言でした。

――お父さんも、お母さんも、お兄さんも、お姉さんも、みんな元気で、ここにいるのよ。と言って見ました。無言でした。

そこで、何時ものように、ペチュニアの花を交換し、ドレミの歌で１日を、始めることにしました。
その間、わたしなりに考えたらしく、素早く、新来のせみのために、マキシムの銀色の空き箱を持ち出し、赤いリボンの真ん中にペチュニアの花を一輪置いて、前列に並べました。

今考えれば、むごいことをしたと、心が痛みます。
何時ものように、順番に、ドレミの歌を歌って行くつもりでした。ところが、歌っても、せみが反応しません！！

その代わり？　新来のせみが元気よく歌いだしたのです！！
それは、せみの発する声ではありませんでした。どちらかと言ったら、小鳥の声に近いものです。
「チャチャ、チュチュ、チュチュン」といった、感じで、陽気に、それは楽しそうに歌うのです。さっきまで、無言でしたのに？
それを、無視して、次のせみに向かって、わたしが歌うと、まるで、奪うように、新来のせみが歌いました。
大きな力強い声で、５匹のせみの声とは、全く異質のものです。
このせみは、いわゆるせみとして、現在、正真正銘、生きているのだと、思い知らされました。

わたしが呆然としていると、歌を、自分で、繰り返し歌いました。せみは自分の意志で何時も、歌い続けているのですから、それは極、自然なことのようでした。
そこで、わたしは、次々に、このせみに向かって、杏リリイとの思い出の歌をうたいつづけてみました。みんな、知っていました。

――あなたは、杏リリイね！！　わたしは断定しました。
――チャチャッ　と、答えが返ってきました。「やっと、わかってくれたの」と。

新来のせみは、歌っていないときも、「チャッチャッ」といった声を出し続けていました。なんだか、楽しそうでした！！
わたしは、洗脳でもされたように、気づくと、杏リリイの残した作品に関連の作業について、説明し続けていました。

ふと、現実に戻りました。
慌てて、５匹のせみに話しかけました。必死でした！！

１３日のせみも、他のせみも反応が全くありません。
もう、そこにはいないようでした？

涙がでました。
途方にくれました！！
――あなたは、何をしたの？　みんな、ここで、あんなに楽しそうに歌っていたのに。わたしだって、どんなに幸せだったか知れないのに！！
新来のせみは、無言でした。

その日は、病院予約の日で、どうしても、出掛けなければなりません。なんだかおかしな具合でしたが、留守を新来のせみに頼んで出かけることにしました。
「チャ、チャッ」と陽気に引き受けてくれました。

病院から帰宅すると、リビングから、「チャッ、チャッ」という元気のよい声が聞こえて来ました。でも、ハイビスカスの木にせみの姿はありません。よく見ると、窓際のカーテンの下でした。

――飛んで行きたいのなら、行ってもいいのよ。でも、途中で落っこちそうなら、ここにいて！！　とわたしは言っていました。
「チャ、チャッ」と合点してくれたような気がしました。

せみを掌に乗せ、リビングの窓から、柵の間を通して、腕を外ま

で伸ばしました。何故か、せみはじっとこちらを見つめたまま、飛んで行く気配はありません。手肢ものばしたままです。
　そこで、暫く、杏リリイに相談したいと思っていた、たまりにたまっている用件について、わたしは話し続けました。

「チャチャッ」と声をはさみながら、新来のせみは元気一杯でした。
　飛んでは行きませんでしたが、せみは短命なのです、このせみも生きられるだけ、生きようとするに違いないと、わたしは思いました。

——あなたに、飛ぶ力があるのなら、飛んで行く前に、みんなに、命を返して欲しいの！！　わたしは、必死で頼みました。

——それが出来ないのなら、あなたが、ここに、残って！！　と。
——チャチャッ　と、元気な声が返って来ました。

その後でした！！　何が気に触ったのか、猛然と、新来のせみが怒り出したのです。
——ジジィジジィジジィー　と、言う、所謂、せみの声になって。
その大きな声は、間断なく続きました。
街じゅうに響き渡るのではないかと、心配でした。
その後は、ブーイングの嵐です。本当に、
——ブブーブーブーブー　という声が続きました。

わたしは、今迄これほどの怒りを、聞いたことも、これほどの怒りに出会ったこともないと、思いました。
責めたてられている気がして、声一つ出せず、立ち竦んでいました。
泣きやんだと思った瞬間、ハイビスカスの木に、逆さ吊りになっていたせみの目が黄色にとがり、さっと、それは器用に、狭い柵の間をすりぬけ、紺碧の夏空に向かって飛び立って行きました。

わたしに、さよならも言わずに！！

後には、魂を抜かれた５匹のせみと、わたしが残りました。
どんなに声を掛けても、歌っても、５匹のせみたちから、もう、なんの反応も返っては来ませんでした。
身体も軽くなって、ふわふわ位置を替え、５匹のせみたちは、確実に死んでいました。

殺人者はあの陽気なせみです！！

５匹のせみたちは、何の反応もみせません。トルコ行進曲を歌う、あの澄んだ音色を聞くことは、もう、２度とないのでしょうか？
ジングルベルを歌う陽気さは何処に？

ふるさと、を歌ってみました。
どんなに、貴重なものを、失ったのか、分かって来ました。

これが、２０１２年、８月、「不思議な、不思議な夏！！」の顛末です。

蘇ったせみ！！（２０１２．１２．１５）

あれは、もしかしたら、杏リリイの、心の、魂の冒険だったのでしょうか？
考えてみると、あの恐ろしいせみの鳴き声は、杏リリイの心に取りつかれた、生身のせみの、残り少ない一生を取り戻そうとする、最期の戦いだったのではないでしょうか？
７、８年もの間、暗い土の中にあって、夢見て来た地上での、たった、２週間ほどのせみの時間を、こんな形で奪われてしまったことに気づいた瞬間の、せみの無念さが分かるような気がします。
新来のせみは、元気いっぱいでしたから。

生きているものにとりつくのは、心にとっても、大変なことなのだと、改めて認識し直しています。
一歩間違えれば、あのような修羅場？ が待っているのですから。
そうまでして、目に見えるものとして、言葉を、声を発するものとして、杏リリイはわたしに会いに来てくれたのです！！

といっても、なお、不思議なのは、心は自由自在に、同時に何箇所にも、又は分散して存在することが可能なのでしょうか？
心は何処か遠くにあって、分身？を、思いのままに、出没させているのでしょうか？

５匹のせみは、陽気なせみの飛び立ったあと、無反応になっていましたが、１週間くらいしたころから、「ジィ、ジィ」という、小さな、小さな声をだすようになりました。
弱々しいけれど、徐々にその声は大きくなっていきました。

せみは又も蘇ったのです！！
こうして、我が家の家族も、心を、命を繋ぎとめ、以前の生活を取戻しつつあります。

只今、２０１２年．１２月．１５日．午後９時、家族との日課を終えたところです。
みんな、元気に、陽気に、一日を歌い収めました。
家族構成は、父母と、姉と、兄と、杏リリイと、わたしの６人になります。
それにしても、あの陽気なせみは、
「飛んで行くのなら、みんなに命を返してからにして！！　それが出来ないのなら、あなたが、ここに残って！！」とわたしが懇願したとき、「チャチャッ」と嬉しそうに答えたのでした。ああ、残ってくれるのだなと、瞬間、ほっとしたのを‥‥。こんな、陽気なせみが、残ってくれたら、それは、楽しいだろうなと言う思いが、わたしの脳裏をよぎったのを、今でも覚えています。

せみが豹変したのは、その後でした。
杏リリイは、あのせみの命がけの怒りを、無事にくぐり抜けることが出来たのでしょうか？
生きているものにとりつくのには、それなりの、リスクがあるのではないかと思われてなりません。
寿命の来ていたせみと、寿命の尽きたせみに、心が、とりついたとき、５匹のせみは、ここに残ることが出来たのだと、今では、納得しています。
そのあたりに、心が、せみを選択する意味があるのでしょうか？
このせみたちは、２度甦ったことになります。又も生き返ったのです！！

せみは歌だけではなく、話にも反応するようになりました。
こんなにも、愛するものたちが、愛してくれるものたちが、我が家に立ち返ったのです！！

「感無量」という、不思議な言葉は、こんな時に使うものなのでしょうか？
せみたちに何の反応もなかった日々の心細さが、泣きながら必死に語りかけ続けた、歌いかけ続けた１週間あまりの日々が、昨日のことのように甦って来ます。

もしかしたら、このせみたちは、わたしに対するお迎え現象なのかもしれないと、思い直してみました。
だとしたら、なんと豪勢な、お迎えなのでしょう！！

最近、お迎え現象が真剣に取り上げられていると報道されました。半数近い人々が、肉親の、愛する人たちの、お迎えによって、幸福そうに死を迎えたと伝え、これからの終末医療に取り入れようとしているとのことでした。
命というもの、肉体を離れても、なお、存在しつづける心について、魂について、もっと、科学的に解明されるべきだと思われてな

りません。
　真面目に考えてみれば、わたしたちを代表しているのは、足でも、心臓でも、頭でもなかった筈です。肉体ではなかった！！

　哀しみ、喜び、悩み、戦ってきたのは、心でした。
　心なのでした！！

　その為に、命を絶った人も数えきれません。命を支配してきたのは、心だったのです！！

　やがて、ヒッグス粒子や、重力波の発見のように、心の構造が解明される時が来るのでしょうか？

　わたしは、それによってしか、説明できない世界に生きながら、お化けや、妄想や、虚構の世界ではなく、目にも見えず、重量のないと思われている心にも、質量が、又はエネルギーがあるのではないか？　異次元が存在しているのではないか？　と思われてなりません。

　そこには、わたしたちの信じてきた世界よりも、もっと、もっと重層で、多様で、奔放な、未来が開けるのでしょうか？

アメリカ帰りの、小さな客　（２０１３．５．１５）

　ゴールデンウィークに３人の来客がありました。
　わたしは、せみの 声を確認してもらいたくて、トルコ行進曲を口ずさんでみました。
　――ティアララン、ティアラランと始めました、何時もなら、その 後を、「ティアラララララララ、ティアララ、ティアラ、ティアラララララララ、ティアララ‥‥」と続けてくれるのですが、せみの

声が聞こえません。
　それでも警戒を解いてくれたらと、箱ごと、両手にもって、何回か繰り返してみました。

　横目で見ると、客の当惑した顔が目に入りました。
　４歳の子供だけが興味津々で、
　——どんな声出すの？　と聞きます。
　——パチッパチッと言うか？　チャチャッというか？

　その時でした。せみが反応したのは‥‥。
　——ほら、歌ってる！！　ネ！！　わたしは、箱を子供の耳元に持っていきました。
　——あ、ほんとだ！！　男の子はいいました。
　みんな、ほっとしたように笑いました。

　みんながどう思ったかなど、分かりすぎるほど、わかります。立場を変えれば、わたしも同じ反応をしただろうと思いますから。
　客もそう思ったのでしょう。何事もなかったように、時間は流れていきました。それは、彼らの教養と、思いやりなのだと理解しても、今、ここに展開されている、あり得ない世界に招待できなかった無念さは、何時までも残りました。

　この小さな男の子に果たして、聞こえたのか、どうかは、わかりません？
　彼は、父親のいるアメリカで１ヶ月の保育園留学？　を果たして帰って来たところです。
　——英語わかったの？　と心配すると、
　——分からないときは、「ウウ、ウウ、ウウーン」て、言ってると、みんな過ぎていったよ。で、ぼく大きな声でいったんだ。
「センキュ—ーっ」て！！
　そう、サンキュウって言えたのかと喜ぶと、
　——誰もいないところで！！　とオチまでつけてくれました。

４歳の子供は、あどけない顔で、目をきらきらさせながら、せみに触れてもいいかと、聞きました。
――こわれるから駄目よ。とわたしは答えました。

上手に歌えた時や、話が通じた時など、せみたちの背を、そっと撫でてあげるのが習慣になっていました。
小さな客に、触れさせなかったことを、今では、後悔しています。

ここにせみのあることが、どんな形で、この４歳児に生き残るか？それは希望のようにも感じられます。

帰るとき、３人は、せみではなく、仏壇に手を合わせて帰っていきました。
こうなることは、予想していたことではありました。このせみたちが、外来者に心を開かないのでは、という怖れは前から感じていたのですから‥‥。
せみたちは、外来者に対すると、いち早く、自分のなかに逃げ込むようです。
今、考えれば、陽気なせみからも、そうして、せみたちは身を護ったのではないでしょうか？
その証拠に、短時日で、せみたちの反応は、徐々に戻りました。
それは、陽気なせみに殺されたわけではなく、引き籠ったせいではなかったかと、思われてなりません。

あとは、現実的には、なんとかして、この声を残したい！！
気分によって異なる彼らの声を、宝石を思わせるような硬質な澄んだ音を、興奮したときに発する、「ヒューッ」又は「シューッ」と言う高音を‥‥。
録音しようとしたら、このせみたちは、またも、危険を感じとって、いち早く、閉じこもってしまうのでしょうか？

それとも、これは、ごく、限られた、個人的体験として、そっと、閉じられるべきものなのでしょうか？

これは、微妙な科学的現象なのでしょうか？
微妙な精神世界の出来事なのでしょうか？

城北刊行社　（２０１３．６．１５）

今日の太陽は、一つ目のように雲の中を泳いでいきました。明るい青のなかを通って、赤い線に向かって。渦巻いている過去の中心に突き刺さる一筋の赤。

――みんなが、みんなであることは自由でしょうか？
――わたしが、わたしであることは自由でしょうか？
父ぜみに問いかけてみました。間をおいて、「チャチャッ」と力強い答えが返ってきました。
みんなの「チャチャ」が、続きました。

わたしの父は、地方新聞の論説欄で、その頃の教育体制を批判し、個性こそ、個の自由こそ、大切にすべきだと主張して、論陣を張り、視学の反感をかい、左遷に左遷を行使され、遂に壮絶な戦いの末、職を辞さざるをえなかったのだと聞きました。我が家では、暗黙のうちに禁句になっていたのでしょうか？
わたしがそれを知ったのは、戦後のことでした。
時代背景があったとはいえ、何故そこまで、というわたしの疑問に、嫉妬をうけたのではないかと、聞いたことがあると、１番上の姉が答えてくれました。
地方新聞とはいえ、その頃、地方にあっては、中央紙を凌ぐ部数が出ていたのだといいます。父は、論文の公募から、現職のまま、論説やコラムを担当していたのだときききました。

退職後、「象徴の哲学」を著し、生涯教育をとなえた土田杏村に同調し、哲学書や伝記などを著作していました。城北刊行社のブレートはその名残りだったのです。

――残念だったでしょうね？　悔しかったでしょうね？　わたしは言っていました。
――あんなに才能に溢れていたのに！！　あんなに、博識で、演説がうまかったのに！！　と。

わたしは、一度だけ、父の挨拶を聞いたことがあります。
それは、兄の市葬の日でした。戦死者、海軍中尉の遺族として、何十人もの遺族を代表して謝辞に立った時のことでした。

父は、これからを生きるべき、わが子を失った悲しみに溢れ、時には、切々と、時には滔々と話し、最後に、「起たんが為に倒れ、勝たんが為に敗れ、醒めんが為に眠りたりき」と、結びました。

それは、ブラウニングの言葉だと後で知りました。父の言葉は、戦時体制下の広い会場を叩いていました。
昭和１９年、６月、敗戦は、すぐそこまで、迫っていました。

――もう、わたしたちを縛るものなんてない、思い切り自由に、生きましょうね！！　みんなで！！
「ヒューッ」という声が舞い上がりました。不良集団みたいに？
もう、いい格好しいはいらないのです。飢えも死も、暗黒の時代も、迫害も、無視も、乗り越えて来たのですから。
ほんの少し、時代を先取りしていたために、報いられなかった、わたしの家族が、過去を共有し、ここで生きようとしていました。

衝　　撃（２０１３．８．１５）

何故か時間が逆行をはじめていました。
――あの時のことを、お母さんは覚えているの。お兄さんの戦死の内報の入った、時のことを？　母は無言でした。

母は昏々と眠りつづけていました。それは兄の戦死の内報の入った一週間後のことです。駆けつけた客の接待を気丈にこなしていた母が突如倒れ、そのまま、眠り続けていました。往診してくれた医師が、漸くつけた病名は、「嗜眠性脳炎？」でした。
兄の戦死の衝動で混乱していた、わたしたちは母の衝撃の深さに、もっと早く気づくべきだったのに、勝手に、自分の悲しみのなかに閉じこもり、母の哀しみに気づこうともしなかったのです。

最愛の息子を失った悲しみがどれほどのものなのか、しかも、それが、戦争で！！
高熱が続き、家事など何一つしたこともなかった杏リリイが、学校の帰りに製氷所によって、氷を買って帰る日が続きました。
兄の戦死の公報が届いたとき、母は生死の一線をさまよっていたのです。
勿論、市葬にも参加できませんでした。
何とか治癒しても、後遺症で、口も、足も、思うようには動きませんでした。
そんな体で、我侭で気の利かない、まだ女学生だった杏リリイとわたしを抱えて、彼女はあの戦後の混乱を、食料難を、一人で克服して行ったのです。タンスのなかも、貴重品もからっぽになっていました。
気がついて見ると、母は、驚いたことに、あんなに重かった障害まで克服してしまっていました。克服しているようにみえました。
物置から、古いシンガーミシンを出して、洋裁を。厚くて長い年季もののへら台を出して、和裁を。町の娘たちを集めて教えていました。

――大変だったわね？　総てを背負い込んで。わたしたちが生きて来れたのも、お母さんのお陰なんだから！！
――チャチャッチャ。と、母は始めて声を出しました。
目のあたりが、うるうるし、左右に揺れ動くのが見えました。もしかしたら、わたしの目のせいだったのでしょうか？

――でも、あれ、本当に嗜眠性脳炎だったのかしら？　ショックからきた、脳出血か、心筋梗塞みたいなものだったのでは？　杏リリイが持論を持ち出したのか、「チャチャチャチャ」が続いていました。
なら、あの高熱はなんだったのでしょう？　肺炎でも併発していたのでしょうか？

――お母さんはここで、幸福かしら？　わたしは、母ぜみの、確かに動いている大きな目を、顔を振りながら、何時までも見つめていました。

せみは音楽家！！（２０１３．６．３０）

せみが言葉を、または、リズムを理解し、それを楽しむなどとは、わたしにとっても、考えてもみなかったことでした。

でも、このせみたちは、せみではない？　人間なのです。まぎれもない、わたしの家族、その心、魂たちです！！ そう思われます？

♪トルコ行進曲（モーツァルト．ピアノソナタ）

凛とした音に絡む鈴を振るような音の美しさは、掛け値なしに魅惑的なものです。せみは生来の音楽家！！

トルコ行進曲を、上手に歌ったときは、せみたちも嬉しそうで、何か、達成感みたいなものを感じているのではないかと思ったりします。
何か、この曲は、せみたちにとって特別なものなのでしょうか？
何か、この曲を歌うには、エネルギーとか、決心のようなものがいるのでしょうか？

時には真っ先に歌いたがり、時には歌うことを逡巡します。
歌わないときには皆が、歌わないような？
歌うときには競って歌うような？

誰かに命令されているなどと言うことは、ないのでしょうか？
そこで、わたしは、どんなに感嘆しているかを、素直に伝えることにしました！！
それはせみが、言葉を、リズムを理解し、それを、楽しんでいる世界に、わたしが、共に生きているのには、何らかの意味があるに違いないと信じられるからです。
父がよく弾いていたトルコ行進曲が、今、こんな形で家族の求心力になっていることに驚かされます。わたしたちの新品の脳細胞に、父がこの曲を弾くたびに、楽譜が書き込まれていったのでしょうか？

こんなことがあるまで、こんなかたちでせみと出会うまで、わたしは、誓って、トルコ行進曲を思い出したことも、口ずさんだことも、ありませんでした？　ですから、口ずさんではいても、これが果たしてトルコ行進曲かどうか、わたしには確信がもてません。
突然、記憶のなかから流れ出た、溢れ出たもので、誰のまねでも、誰の提案でもなく、その証明のように、鼻歌だったのですから。

このように、わたしでさえ、とても信じられない現象を、他の人に理解してもらう作業は、容易なことではなさそうです。
その証明のように、わたし以外のものに、せみが反応しないことが、反応していないことが分かってきました。
せみたちは、デリケートで？　用心深く？　肉親であっても、な

かなか、心を開いてはくれません？　いいえ、自分たちを信じてくれないものに、心を開く気はないのではないでしょうか？
　そんな時には、忽ち死んだように、冬眠状態になって、自己を護るようです。
　それが、わからなかった時には、何故、心通わせている親族や友人たちが、この事実を、分ってくれないのかと、不思議にも、恨めしくも思ったものでした。

　ここに、彼を、彼女らを愛してやまない、家族が現存しているのです！！　多分、周囲が、わたしたちの方が、先入観念とか、常識にとらわれない自由さを取戻した時には、せみたちも、心を開いてくれるに違いないと思われてなりません。

　クマぜみの北限が地球の温暖化の影響で上昇し、あの鈴を振るような、「シャワ、シャワ、シャワ」という音が入る、深遠な鳴き声を耳にするようになって、何年たったのでしょう。杏リリイはあの声に魅せられていました。
　亡くなる年の夏、殆ど外出しなくなっていた彼女が、近くの並木通りで、クマぜみの合唱を聴いたとわたしが話すと、一人で出て行き、二時間ほど帰って来ませんでした。その間、石組みに腰をおろしてせみの声を聴いていたのだと言っていました。
　あの、聴いているものを根底から揺さぶってしまいそうな、クマぜみの合唱を、彼女が、どう捉えたのか、残念ながら聞くことはありませんでした。

　あの時間が、病状の変化を前にした杏リリイに、どんな影響をもたらしていたのか？

♪　村祭り！！（小学唱歌）

　はっきりと彼らの反応がわかるのは、「村祭り」です。テンポがい

いので、気に入っているのでしょうか？　レパートリーの少ないわたしが、種切れになって、遂に口ずさんだ歌に、せみたちは嬉々として反応しました。「ドンドンヒャララ、ドン、ヒャララ」の繰り返しで、ばっちり音を合わせ、嬉々として歌います？

村祭りが、それぞれの思い出につながっていくのでしょうか？　そして家族の？　ふるさとの思い出に？
巻き込まれたように、わたしの歌声も弾んでいきます。

♪ ジングルベル！！（クリスマスソング）

もう一つ、追加された曲があります。それは、ジングルベルです。「リンリンリーン、リンリンリーン、リンリン、リンリン、リーン‥‥」と歌ってみました。この歌は不思議に、シャンパンでも飲んで、クリスマスの喧騒のなかに投げ込まれたように、歌います。

みんな自由でいい、ハチャメチャであって欲しい、それこそが、わたしたち家族の誇る自由の幅なのですから！！

せみが歌うとはいっても、本物のせみのように、「ジ―ジ―」と大きな声で鳴き続けるわけではありません。耳をすますと曲にそって、「パチッパチッ」とリズムを刻むことがわかってきます。
「トルコ行進曲」や、「村祭り」や、「ジングルベル」など、リズミカルな曲には、それは元気よく、部分的ではあっても、鮮明に、全部の音をとって本当に歌うのがわかります。その部分を繰り返すと、機嫌のよいときには、何度でも、繰り返して歌ってくれます。
何テンポか、遅れることも、早すぎることもありますが、
何度か繰り返すうちに、それは美しい音色を響かせて応えてくれます。

我が家では戦前から、クリスマスイブは、何がなくとも、欠かせない行事で、すべてが手作りでした。ツリーも、プレゼントも。
あとは、本や、雑誌などで、末っ子のわたしに至っては、手作り

の人形や、お菓子と、兄や姉たちの雑誌の付録などでごまかされていたようです。

　それでも、幸福の色が、懐かしい、懐かしい家族に、ふるさとに繋がっていきます。

ハスキーボイス（２０１３．７．１５）

　老いでしょうか！！
　もう、せみたちにペチュニアの花や水滴は必要ないのかもしれません！！　変化が、確実にせみたちに現れて来ていることを、否定する ことは出来なくなりました。せみの翅も補強しなければならないようです。
　多分確実に、わたし自身の上にも！！

　２００８年からの８月のカレンダーはせみ印でいっぱいです。せみのルートには、深夜玄関から訪れるせみと、白昼、リビングや、ベランダ側から現れるものとがあります。どのせみたちも、わたしと、何らかのつながりがあるのでしょうか？
　ともしたら、忘れ得ぬ恋人とか、恩師とか、友人なども訪れてくれていたのでしょうか？
　それとも、杏リリイが、つぎつぎせみに呪文をかけ、その効果を楽しんでいたのでしょうか？

　一転して、このせみたちに、なんの反応も戻らない日が来るのではないかという、心配や恐怖みたいなものが、朝の時間を緊張させます。
　そんな日には、せみの発する「チャチャッ」という音が、何とも澄んだ美しい音色に聞こえ、まるで宝石のようだと思ったりします。
　この声が、どのようにして出される音なのか？　構造的には分か

りません。口のあたりから出ていることだけは、わかるのですが、手入れをしているとき、せみの身体を裏返して見ても、その口の所在さえ、わたしにはわかりません！！
　この間まで、確かに口に花を吸い込んでいたのに？　確かに口と思われるあたりから、今も、音は生まれているのに？　髭が小刻みに震えていたのに？　何処にもそれらしい口の筋目も、髭も見当たりません。そこには、口吻が仮面のように続いていましたから。
　当惑し、混乱し、自分自身が信じられない。

　今でも、リズミカルな曲には、部分的ではあっても、全部の音をとって本当に歌います。その部分を繰り返すと、機嫌のよいときには、何度でも、繰り返して歌ってくれます。ワンテンポ遅れることも、ツウテンポ遅れることも、ワンテンポ早すぎることも、多少音程の狂う
　こともありますが、何度か繰り返すうちに、それは高音の美しい音色を響かせます。
　そんなとき、わたしは、感激のあまり、せみの背中をそっと撫でながら、「ステキ、ステキ！！」と繰り返します。せみは感極まったように、昆虫らしい、「ジュジュッ、ジュジュ、ジュジュ」というようなハスキ―ボイスで応えてくれます。
　口のあたりで、三角に収束するような、独特な三つ口の昆虫たちの出す声だと？　そう思って来ました。

　それは、今でも、彼らと始めて会話がなりたったような、はじめて、彼らの深みに、内面に触れたような、引き込まれたような 気のする、不思議な瞬間です。

　その口が必死に探しても、探しても、わたしには見えません！！
　見えないのです。せみは死ぬと、その所在さえわからぬほどに口を閉ざしてしまうのでしょうか？　それとも、せみは生来、口吻だけでことたりていたのでしょうか？　美しかった髭も今は抜け落ちて、その痕跡さえ見せていません。
　やはり、何もかも、わたしの思い込み、妄想にすぎなっかたので

しょうか？

ほかにも、わたしでさえ思い込みではないかと、疑われることが続いていました。
部屋の照明を消し、「シューベルトの子守唄」を歌っているときのことです。隣の部屋からの光で浮き上がったのでしょうか？
見ると、楕円形の箱の表面に、まるで落書きでもしたように、無数の何かが浮き上がったのです！！
それは、記号のようなものだとわかりました。
びっくりして、他の箱も確かめて見ると、綺麗だった箱の表面に、無数の記号が見えます。なんとか部分的でもよいから記憶したいと、あせりました。何だか動きつづけていて、流れ続けていて、凹面鏡のようにくぼんでいき、何一つ記憶することが出来ません。

思い余って、「わたしの分かるように書いてよ！！」と、子供の頃のような駄々をこね、後日見ると、驚いたことに、記号は、「カナ文字」に変わっていました。
言葉としては捉えることができませんでしたが、「ネ」と「ト」の２文字だけは、何とか記憶に残りました。それが何を意味するのか、今も、わかってはいません。
何か伝えようとしていることだけは理解出来ましたが、ちらちらして、焦点が定まらず、言葉として捉えることが、どうしても出来ませんでした。
この不思議な現象を、伝えようとしているのではと、希望的観測を打ち上げてみても、わたしは、泣きたくなるくらい無力で、どうしたらよいのかが分かりません。

そんな時、微かに感じられる空気のおののき！！
わたしのあせりなど無視し、まるで、わたしを小馬鹿にしたように普段見る箱は、綺麗に、すましかえって、傷一つ見せていません。
ツクツクボウシの宝石箱も、例外ではありませんでした。側面いっぱいに書き込まれた、カナも記号も、もはや何処にも見当たりません。もしかしたら「ネット」でしょうか？

ツクツクボウシを乗せている、ペチュニアの花は、翌朝、すっかり乾燥して小さくなり、花の柄を持ち上げると、ツクツクボウシが、まるでスプーンにでも乗ったように、新しい花に手を触れずに交換できます。
乾燥したその花が美しく、押し花にして保存することにしました。「ツクツクボウシの花」と名づけました。

重要な客　（２０１３．８．１０）

１３日より先、１０日に我が家にとって、重要な来客がありました。海外に出かけるので早めのお参りにと、１０日に客はやってきました。

今年要職を引退した彼は、ようやく、わたしのせみの話に向き合う時間が出来たのでしょう。科学者として、これを放置することは出来なかった筈です。

家族と一緒の時ではなく、一人の時に、なんとか決着をつけたいと思っていたのではないかと思われます？

長い時間を、心理的に近くで過ごしてきた、わたしたちは、話が弾み、楽しく懐かしい、ひと時を過ごしました。
ことが、その問題に触れるまでは？
わたしが「ツクツクボウシの花」の押し花を見せたところで、核心に触れることとなりました。

彼の言うには、
――自分では意識していないが、言葉を発した後、口の中では、さまざまな音が生まれる、それが何らかの作用で、耳から改めて入

り、それを、せみが発した音だと誤認しているのではないか？その証拠に、すべては、あなたが話しかけたり、歌ったりした後に、それに反応するように、せみの声は、歌は、聞こえてきている。
——？
——違うのか？　せみが先に話した、歌ったと言うのなら、それを、信じてもいい！！　はたして、そう、いうことがあったか？
せみなど、うちでは、授業中でも教室に入ってくるよ。廊下などには、せみの死骸が、毎年、うず高くなっている。毎年来たからって、偶然に過ぎない！！　１度死んだせみが、歌ったり話したりする、そんなことは、あり得ない事なんだ！！　科学者として、僕は容認できない！！　と。

わたしが反論しようとすると、
—— そういうことを言う人は、決まって、科学では、まだ割り切れないことが残っている。それが判明するまでは、暴論とか、異端として排除されるのだと言う。 それは、その人たちの常套語だ。

以上が、彼の結論でした。
なお、わたしのそばに位置をかえ、

——何も話していない時でも、ほら、音が聞こえる！！　それが自然なことなんだよ！！　と陽気な笑い声をあげました。

わたしは良く考えて見るからと言って話を中断しました。

彼の結論は正論だと思われます。わたしの錯覚ではないかと、思い込みに過ぎないのではないかと？　彼は言っているのです。
そう言われればそうかもしれない不安が、信念に近かったわたしの認識を襲いはじめます。
——わたしには、入れ歯なんて１本もないのよ。そんな音であってたまりますか？　言ってみたものの、無言でいる時も、意識するてたまりますか！！
言ってみたものの、耳を澄ますと、わたしの歯はなんだか、動き

続けているようでした。

　従って、わたしも、謙虚にそれを、検証して見ることにしました。今年の１１月で、杏リリイが亡くなってから７年になります。この機に、これは果たして、現象か？　妄想か？　決着をつけるべきではないかと思い直したのです。

　冷静を保っているつもりでも、わたしにむしゃぶりついているのは、恐怖でしょうか？

　不安と期待が首を並べて走っていました。

現象か？　妄想か？（２０１３．８．１１）

――検　証――

（１）４匹のアブラぜみと１匹のツクツクボウシは、確実に存在している。（その証拠に、誰の目にも、見え、誰の手で触れることもできる。よって、その存在を否定することは、誰にも出来ない！！）

（２）この現象は、 杏リリイの亡くなった翌年から出現するようになり、７年間続いている。その数は数十匹以上にのぼり、種類も多種にわたる。

　これは事実として、記録に残されている。

（ここは、東京都２３区内。杏リリイの生存中は、最上階の我が家に、せみは一度も訪れて来た事も、見かけることもなかった。

　初めの年は蝶だったが、翌年からせみになり、以後７年、この現象は続いている。近所の家にそのような現象は現れていない）

　地球温暖化で、生態系が変化して来ている、そんなことは、自然

の許容範囲だと、彼は言った。そうだろうか？

（３）ツクツクボウシと、アブラぜみの１匹は、死んでここに残り、アブラぜみの３匹は、わたしの掌の上で、飛び立つことを拒否して、ここに残った。それは事実である。その証拠に、現在ここに存在している。

（殆どのせみは、深夜訪れ、鉢植えの木に止まって眠り、翌朝元気よく飛び立っていった。寿命の尽きたせみと（死んだせみ）　寿命が来ているせみ（死にかかっていたせみ）が残ったと考えるのが妥当だと思われる）

（４）　客観的に見れば、せみは死んでいる。
乾燥して軽くなり、飛ぶことも、動くこともできない。手肢も折れ翅も破損している。もはや、せみ臭を発することもない。せみはせみとして死んでいる。

（ここまでは事実として、認めていただけるのではないでしょうか？
問題はこれからになります）

（５）　本当に、せみは生きているのか？　本当に歌をうたうのか？
人間の言葉を理解するのか？
わたしは、この死んだと思われるせみが現在、音を発すること、歌を歌っていることは事実と捉えている。その音は鮮明で、他の日常の音や声とは全く異質なもので、混同することはあり得ない。

その声が、歌が、聞こえる以上、せみは生きていると解釈すべきではないだろうか？　と、わたしは思っている。

せみがあなたより先に話したことがあるのか？　せみがあなたより先に歌ったことはあるか？　これが、彼の話の核心だった。

このせみたちは、生きている間に、自分たちの意志で、我が家

を訪れて来たもので、せみの方から、冷房の冷たさを、怯えを、伝達して来たことも、手肢を縮め、ここに残りたいと意思表示をしたことも、陽気なせみのように、ここに残りたくないと意思表示して飛び立って行ったこともある。その経過から、せみは生きている間、わたしより先に意思表示をした。答えは〇だ。

せみが死亡したと思われてからは、どの場合も、わたしが話しかけ、わたしが歌って、せみたちが反応したもので、死んでいるせみたちが先に話しかけ、せみたちが先に歌って、わたしが反応したということは、ない。答えは×だ。

わたしは、せみとの交流を、こちらからの一方的なアプローチだとは思ってはいない。

もとは、せみの意志、せみを送り込んできた、何者かの意志ではないかと？

（発端は、わたしが歌っているときに偶然、死んだ筈のせみが、わたしの歌に反応して音を発したことから始まった。「パチッパチッ」という音で歌に反応し、リズムをとることが分かった。

また、これも偶然、わたしが童話の一節を読み上げたとき、せみたちがそれぞれの位置から声を上げたことから、人間の言葉を理解し、それぞれに意見を持っているのではないかと判断した。

以後の関係は反応に反応するという、円環状になっていて、卵と、鶏のどちらが先かの関係に似ている）

（６）　このせみの正体は何か？　死んでも、なお、生き続けるこのせみは何者なのか？

このせみたちを、偶然我が家を訪れた、短命なせみの死骸と捉えれば、それで終わりになる。

せみを死者の心の、魂の、媒体と考えれば、このせみたちは、わたしの家族だと理解でき、歌っても、話しても何の不思議もないことになる。それは、肉体は死んでも、心は、尚、生きて在ることの証明と捉えるのが、わたしにとっては、より自然に思われ

てくる。

（せみを介して、その核心に迫ろうとする場合、歌ったり、話しかけたりすることが、ルール違反だとは思えないし、せみにとりつく心が、魂が、そんなに積極的に話すものとは、とても思えない？

指摘されてみれば、発生する音と、耳との関係については、考えたことがなかったわけではない。わたしの左耳が、わたしの歌声を、増幅するようだと思ったことも、せみの声に対して、左耳が妙に敏感だと意識したこともある。しかし、現在のところ、わたしの耳に異常は発見されていない。左脳に何らかの機能があるのだろうか？

口腔については、入歯もないし、噛み合せの異常もない。唾液などの「ピチャピチャ」する音とは全く異なった音である）

（７）せみが意思表示すると、科学的に証明できるか？

それは、想像を遥かに超えてはいるが、せみが生きていた間は、現象としての裏打ちがあった。

（例えば、兄ぜみの場合、せみは深夜、突然羽を広げ、ブーブーと唸りだし、怯えていた。今でも、縦横に、上下に、羽を広げた痕跡は残されている。わたしの妄想だけで、そこまでは想像できないし、せみを現実に操作する能力もない。それは、現象として立派に裏打ちされているのだ！！

また、３匹のせみが飛び立つことを拒否し、手肢を縮めて、わたしの掌に残ったことは、現実のことで、その証拠として、杏リリイも、母も、兄も、せみの姿で、ここに存在し続けている。また陽気なせみの場合、ここに残りたくないと鳴き続けることによって、意思表示をして飛び立っていった。また、せみが冷房の冷たさを訴え鳴き続けたこともあった。それらは現象にほかならない）

（８）　せみとの共同生活は、現実のものか？　願望からくる、妄想ではないか？

この途方もないと、私にさえ思える、５匹のせみとの共同生活が、時には、私の妄想ではないのかと、虚構ではないのかと、思い直して見ることもある。そんなことは、ただの思い込みにすぎないと、

何度も自分をこけにして笑っても見た。

わたしのある種の人生に対する最後の期待が、または恨みが、わたしの内部で不思議な擬音をつくり出すのではないかと、思ったりもした。でも、長い年月、わたしと無縁だったせみが、わたしの愛する家族を載せて我が家を訪れ、わたしに対している事実を、この生活が現実のものとして、ここで繰り広げられている事実を、わたしは否定することは出来ない。

朝せみは始めの頃のような、翅のあたりや周囲で「プツンプツン」という音を出す前段階なしに、「チャ、チャ」と直ぐに反応するようになった。その音は空洞の箱の中で鮮明になる。

また、「ブーン」というような電磁波みたいな？　響きが、箱を持っている、わたしの掌に伝わって来ることがある。これは、せみの感情のたかまりを示しているように思われ、同時にせみが、「シュー」または、「ヒュー」というような音を発することがある。その響きは、電磁気よりはずっと柔らかいものだ。

その音は、声は、人間の口内や声帯で生まれるような音、または日常の雑音とは、全然異質なもので、錯覚するとか、間違うなどということは考えられない。

所謂、せみの出す音とは全く違っていて、どうしても、わたしには表現できない音なので、鋭さを消し、親しみを込めた音をとることにした。それが「チャチャッ」だ。

せみたちは、もっと多様な音をもっているのに、わたしには、何一つ表現できない。

せみたちは歌う。歌うという表現が合っているかどうかは、わからないが、わたしには歌っていると認識するほか受け止めよう

がない。
　鮮明に歌っていると確認できるのは、繰り返しの多い、テンポの早い曲で、特定の音節を繰り返すと、何度でも繰り返して歌ってくれる。
　その歌い方は歌う度に異なり、声は、澄んだ美しいもので、わたしは感動のあまり、泣きたくなったり、笑ったりする。決して大きな音ではないが、機械的な音ではなく、個性的で、消滅するような音ではない。
　このせみたちは、わたしの歌声に合わせて、時には、楽しげに、時には、夢中で歌うのだ。その日によって出来不出来はあるが、その音声は充分に魅惑的なもので、これらは、わたしの日常になった！！）

（９）　せみが、しかも既に死んでいるせみが、果たして人間の言葉を理解することが出来るのか？　せみに感情表現ができるか？

　わたしの対しているのは、せみではなく、人間の何か？ 心のようなものだ！！　だとしたら、せみが人間の言葉を理解していて何の不思議もないことがわかってくる。 せみは仮の姿と考えれば、全ての矛盾は解消してしまう。そのほかに、この現象を許容する手だてはない。
（わたしが歌いながら、昨日の出来事や、今日の予定を話すと、会話でもするように、せみの方から、「チャチャッ」と話しかけて来る。わたしは、親不孝した分、兄姉に迷惑をかけた分、出来るだけ優しく接するように心がけている。それは、修復すことのできる、こんな機会がわたしに与えられた幸運を認識しているからだが、はつとすると、感謝はものかわ、助けを求めたり、教えを乞うたり、 甘えたりしている自分に出会うことになる）

（１０）　不思議なこと！！　現在の科学では、あり得ないと思われている現象に、わたしは、ここで、出会い、包み込まれている。

杏リリイの生きている間、ここにあって、わたしは、いかなる不思議に出会ったこともなかった。それなのに、彼女の亡き後、不思議な現象が次々に出現するようになり、現在もその渦中にある。
それは、肉体は死んでも、心は生き続けていることを？　この心の存在をこそ解明すべきだと？　せみたちは、主張しているように思われてならない！！

この一連の現象に科学的根拠があるのか、ないのか？　結論はでてはいない！！

註）この検証は、わたし自身が行ったもので、わたしに異常があるかないかは、正確には解っていない。

彼の訪問のあと、わたしが揺れ動いたのは事実でした。もしかしたら、わたしが、虚構の世界をでっち上げているのではないかという危惧を持ったからです。そのために、謙虚に、検証をしてみることにしました。

以上がその結果です。堂々巡りをしたようにも、確信にせまったようにも思われます。

検証だなどと、心もとない未来が、淋しそうに体をすくめたような気がしました。

千客万来！！（２０１３．８．１３）

８月１３日早朝、玄関ドアを開けると、ミディファレノの入っ

た贈物の箱の上に、せみが１匹乗っかっていました。せみが訪れるのは例年のことなので、予想してはいても、やはり、驚愕してしまいます。
アブラぜみでした。

このせみは無言でしたが、なんともいえない懐かしさを漂わせますので、「上を向いて歩こう」と「ふるさと」を歌ってみました。何だか嬉しそうでした。
そのうちにせみは肢をしきりにあげ、まるで、手を振っているように見えます。
さよならの時間だと知らせているのかと推理し、窓をいっぱいに開け放ちました。
――来て下さって有難う。また来て下さいね！！　と、わたしが感慨をこめて声を掛けると、せみは肢を振ってから、まだ青くなりきらない、真夏の空に向かって元気よく飛び立って行きました。

物音に驚いた薊の綿毛が、後を追うように舞い上がりました。

こうして、わたしの、際限もない呼気のなかで、穏やかな優しい時間が流れて行きます。
昨年、陽気なせみの去った後、動転するほど心配した我が家のせみたちの声も、今年は、失われてはいませんでした。

８月１８日夜１０時頃、せみの鳴き声がして外に出て見ました。せみが玄関ドア前、廊下の防風スクリーンの張り出しの上で鳴いていました。
美しい、心に沁み通る声でした。せみは何時からこんな鳴き方をするようになったのでしょう。これが、２０１３年の夏、２番目のせみの客でした。
何時ものようにハイビスカスの木に止まらせました。真正面から見ると、誰かに似ているような気がしました。翅はなんだか古色蒼然とした、パッチワークみたいな、不思議な紋様と色合いを

もって毛羽立っていました。
　インターホンに、わたしが出なかったためか、メモをつけて置いていかれた贈り物の、ピンクのミディファレノも加わり、今年のお盆の花々は、白の胡蝶蘭や、色とりどりの百合や、ハイビスカスの花で一際華やいでいます。
　せみは、萎んだばかりのハイビスカスの花によじ登り、部屋を見下ろして、時々鳴きました。
　わたしもそれに乗って、歓迎の意味をこめ、杏リリイの好きな「アベマリア」を歌ってみました。
　あわせるように、せみは「チャッチャッ」とリズムをとります。
　このせみは生きているのですから、去年のせみがそうだったように、ごく自然のことのようでした。

　しばらくすると、照明の回りを勢いよく飛び回りはじめました。
　——中に落ち込んだら、わたしは無力で、助けてあげられないのだから‥‥。と断って照明を消しました。火葬にしたせみのことが胸にささっていましたから‥‥。
　飛んでいきたくなった時のために、窓は大きく開けて、眠りにつきました。
　それでも、気になっていたのでしょう、時々照明をつけて、せみの位置を確認していたのですが、目覚めたとき、せみは、もう、何処にもいませんでした。

　ほっとしたものの、ひどいことをしたような後悔が残りました。

　今日もしみじみと、「トルコ行進曲」を歌うツクツクボウシの声を聞きました。それは、鈴を振るような、夢のような美しい音で、リズムもあり、偶然や人工的につくれる単純な音とは、到底思えませんでした。
　機械ではない証拠に、何時も同じではなく、出来不出来もあり、よく出来た時には満足そうに反応します。

　アブラぜみも、ツクツクボウシとは違ったスケールで歌います。

その音は「リンリン」というような表現できない声で、ツクツクボウシの魅力的または可憐さに対してオーバーに言えば、美しさ、大らかさがあるような気がします。
　せみの声は、わたしには、かなり大きな声だと思われるのですが、残念ながら、警戒するのか、わたし以外の人に確認してもらったことはありません。
　４歳の子供が聞こえたとは言っても、あまりにも幼い！！それを信じて欲しいなどと言う気はありません。
　でも、もしかしたら、魂が、心が、この子供を信じたのかもしれないと‥‥。でなくて、せみが反応する筈がないのですから。

　この現象を信じていない人からは、他の人で反応しないとなれば、即座に、そのいかがわしさを指摘されるだろうとは、予想がつきます。わたしでさえ、彼の指摘を受けたあと、わたしは一体何をしているのだろうと？　混乱し、疑い始めたことがありました。そんな時、すぐさま、せみたちが警戒するのを、引き籠ろうとするのを感じました。

　この声を録音したくても、どういう種類の音なのかが、わかりません。ボイスレコーダーに何も入っていなかったでは、すまされない恐怖が口を開けていますから。

　もしかしたら、こんな音がわたしに聞こえるのは、わたしが死んでいるからではないかと考えて見ました。生きているつもりでも、もう死んでいたのではないかと？

　そんな酷いことを！！
　そう思うことは、時を得ているのでしょうか？
　でも、わたしは生きています！！　そう思われます。
　わたしが生きているという以上、もう死んでいる、前から死んでいたのだとは言えないのではないでしょうか？

　本人は自分に対して嘘をつかないのでは？　しかも、それが、

生死にかかわる一大事であってみれば？

霞のように、時間が流れていました。
今年は、８月中旬になっても、まだまだ、我が家の客人はつづきました。

せみと散歩！！（２０１３．８．２０）

８月２０日　午前５時２０分、早朝散歩に出掛けようと、ドアを開けると、ドア前、せみがひっくり返っていました。アブラぜみでした。
部屋に入り、ハイビスカスの木に止まらせ様子を見ることにしました。散歩の時間でもあり、あせっていたのかも知れません。わたしは「ドレミの歌」をうたい、早々に、掌に止まらせて外に突き出してみました。
するとせみは、あっけないほど素直に飛びたっていきました。
今年の夏、３番目の客でした。
これ以上人口？　の増えるのも困りものですので、ほっと胸を撫で下ろしました。わたしの家族はもう、揃って、ここにいるのですから。
散歩を続行するため、外にでると、今度は表札の脇にせみが１匹止まっていました。
もう、戻るのは嫌なので、このせみを散歩に連れて行くことにしました！！　何時でも飛び立つことが出来るように、掌に載せて歩きました。

並木通りを通っても、まだ、せみの鳴き声は聞こえて来ません。
せみも睡眠中です。どうして、我が家を訪れるせみたちは夜行派なのでしょう？

――ほーら！　わたしが手を差し出すと、顔見知りになった、腰の曲がったお婆さんが、眼をしきりにこすりました。

掌を広げているのに、指で押さえてもいないのに、せみは飛び立つこともせず、散歩を楽しんでいるようでした。
高層のビルや、公園や、商店街を周遊する一万歩の旅です。
帰ってくると、中庭の桜の幹に、そっと止まらせました。

――楽しかったかしら？　そう、よかった。なら又来て下さいね。

これが別れでした。心が残りましたが、その方がせみにとっても良いのだからと、割り切ることにしたのです。
この夏４番目の客は、アブラぜみでした。

８月２１日　買い物に出掛けるとき、昨日のせみを確かめてみると、１５センチほど位置が横にずれた桜の葉の中に隠れていました。誰なのでしょう？

――チャンスを待っているのよ。最期まで？
またも、遺棄したような罪悪感が残りました。

☆我が家に残った６番目のセミ！！
　アブラゼミ（２０１３．８．２２）

８月２２日ベランダのあたりで、しきりにせみの鳴き声がしていました。なにか、訴えているような、そんな気がしました。でも、パソコンから離れられず、見に行くことも出来ません。その内に鳴き声もしなくなり、確かめることもなく時間が経過し、わたしはそのことを、完全に忘却しました。

８月２３日　早朝、ベランダの花に水をやっていると、エアコン外機の上に置いた、水受けの白い皿の上にせみが１匹乗っていました。

死んでいました！！
昨日鳴いていたせみに違いないと思いました。罪悪感に悩まされ、火葬にすることも、ゴミとして遺棄することも出来ません。

臨終に当たって何を訴えていたのでしょうか？
このせみが、我が家の６番目のせみとして、残ることになりました。
思い当たるのは、１番上の姉かも知れないという思いでした？
せみは汚れていました。長い旅をして来たようです。綺麗に拭きとってあげました。あの婚家の、聳え立つような、大きなお墓が性にあわなかったのでしょうか？
始めは遠慮がちでしたが、生来行動的だった姉は、今では、すっかり元気をとりもどし、父母や兄弟姉妹といることを、思う存分楽しんでいるように見えます。

姉たちはどうして、揃いも揃って婚家の墓を捨て、此処に来ることを決断したのでしょう？

３歳くらいだったわたしは、この姉にとんでもない、通信簿をもらったものです。神童、杏リリイの通信簿は、対称的にそれは、
それは、素晴らしいものでした。彼女が間違うなどということは、金輪際なかったのです。５、６分もすれば答案は提出されていました。

試験問題はかなりの難題で、二人とも同じものだったのですから、不公平です。わたしの通信簿を姉が読み上げる度に、やんや、やんやの喝采で、皆がお腹を抱えて笑い崩れました！！

わたしには何だかちっとも分かりませんでしたが、小さいながら、 誇りを傷つけられたことだけは分かっていました。分かっていたのだと思います。
その証拠に、姉がお嫁に行く日、小躍りして喜んだ記憶があります。

母がそれを見て、「苛められていたの？」と絶句したのが忘れられません。肉体的な苛めでもなく、他に何があったわけでもないのです。通信簿だけ。小さな子供にだって、許せないことがあったようです。

８月２４日玄関ドアの上、照明のずーと上の壁に、ツクツクボウシが取りついていました。１日経過しても、動きません。ドアを開けたままで待ってみました。わたしが話しかけても入って来る気配もありません。
やむなく長い棒で壁をそっと叩いてみました。飛び立ったせみは、戯れるように、わたしの身体の周りを翅で触れながら回ってから、外へと飛び立って行きました。
我が家のツクツクボウシと類似した透き通る翅を広げ、優雅に飛び立っていきました。わたしは、しばらく、余韻を楽しむように立ち尽くしていました。
一体、誰だったのでしょう？
これで、今年の不思議な、不思議な夏は終わったのでしょうか。

せみに出会うのは我が家の玄関からと、窓側からの二通りあるのですが、玄関から訪れるせみを何故かわたしは、正式な訪問客だと思っているふしがあって、窓側から訪れてくれたせみは忘れがちです。
今年も、６番目のせみのほかにも、７月２５日に窓側から、せみの訪問をうけたことを思い出しました。昨年レースのカーテンに突っ込んで、くるくる舞いをしていたせみとよく似た、クマゼみで、美しい沸き立つような鳴き声を堪能させてくれました。

せみを、信じると、素敵な素敵な歌声が聞こえてきます。 疑うとせみは、だんまりをきめこんだり、とちったりします。
せみの歌声はご機嫌のままに、毎日毎日変化します。まるで、わたしのように！！

最後の家族　（２０１３．１０．１５）

今年は、８月２４日のツクツクボウシを最後に、先客万来の不思議な不思議な夏も、終わったように見えました。
せみは６匹になりましたが、持ち合わせのお揃いのマキシムの箱もあり、それなりに、平和は保たれていました。
１番上の姉も、徐々になれていきました。始めは知らなかった、風の又三郎の歌にも反応できるようになりました。

戦後、農地解放になり、地主だった土地を没収され、働くことをしない、何とか貴族の夫を支え、残された農地で、農婦として気丈に働く苦難の道を歩いたのです。子供が成長し、ほっとしたのもつかの間、今度は嫁との壮絶な戦いが待っていました。

こんな姉が、昔、童謡の天才少女として、地方紙を賑わせたことがあったのだと、杏リリイが書き残していました。救われるような気がします。
わたしの通信簿も、ともしたら、その才能が発揮されたものだったのかもしれません。
みんなの喜びようといったら、半端ではありませんでしたから。その分、３歳のわたしが、どんなに傷ついていたかなんて、誰も、気づいてはいなかったのです。

でも、もしかしたら、わたしのトンチンカンな解答が、笑いをとっていたのかもしれないと、今頃になって思うこともあります。

☆我が家に残った７番目のせみ！！
アブラぜみ（２０１３．１０．８）

１０月８日は晴天でした。レースのカーテンの洗濯をすることにしました。洗濯機は使わず、少しづつ手洗いすることにして、

まず、リビングのカーテンを二枚、洗剤をいれた、ぬるま湯に暫く漬けておきました。洗い、何度か、水洗いをして、ゆっくりと絞りました。
　その時です。「カチン」という音がしました。
　何か落ちたようです。

　――あれっ、なあに？　覗いてみました。
　それは、またも、せみ！！
　アブラぜみでした。血液が急降下して行くのがわかりました。頭が真っ白になりました。

　――誰なの？　誰なのでしょう？
　関係のないせみなのでは？　洗剤に洗われ、薄色になったせみは、羽が反り返ってはいますが、一応整ったせみの形は保っていました。

　洗濯機に入れなかったことで、強く絞る体力がなかったことで、どんなに胸を撫で下ろしたことでしょう。
　それが、我が家の、７番目のせみです。

　わたしには、このせみを火葬する勇気も、土葬にする勇気もありませんでした。どうすることも出来なくて、家族として残すことになりました。

　よくよく考えた末、兄の下に男の子が生まれ、２ヶ月で死んだと聞いたことがあったのを思い出したのです。
　それにしても、どうして、次々こんなことになるのか、わたしには全くわかりません。

　これでは、まるで、来客の素性を、後付けするようなものです。
　わたしは、片目を閉じ、唇に指を押し当て、わたしの中の不満分子を宥めました。

そんな時、電話してきた姪が、この兄の最後の様子を母親から聞いたことがあると言い出したのです。
――その年、白浜の家は、男の子が二人になって、毎日、お祭りみたいだったと、母は言っていたわ。そんな時、２ヶ月になったばかりの男の子が、風邪をひいて主治医の往診をうけたんですって。お祖母ちゃんは不在で、みんな、息をつめて見守っていたのだそうよ。医師の手当のおかげで、血色ももどり、もう大丈夫だと先生が太鼓判を押して帰っていかれた。それで、みんな大喜びしたらしいの。可愛いらしい赤ちゃんだったらしいもの。でもね、主治医の先生の帰られた後、タンが喉に絡んで、亡くなってしまったのよ！！
――まあ！　わたしは絶句しました。
――お祖母ちゃんは、その子が死んだのは、お手伝いに任せていた自分の責任だと言って、それを機に先生を辞めてしまったんだそうよ。その頃、子守とお手伝いが二人いたことで、安心しきって、病気の子供を残して、出勤した自分が悪いんだって、お祖母ちゃんは泣いたらしい！！
その薄幸な男の子は、本家の大きなお墓のわきの、小さなお地蔵様に葬られていたのだそうよ！！

それなら、可哀想な兄は、長い間カーテンにしがみついてでも、家族のそばに、いたかったのかもしれません？
わたしは、兄を悼んで、ピンクのリボンを結んだゴデバのチョコレートの空き箱を用意しました。
少々派手すぎる、ピンクの箱の上で、このせみは日毎に元気になっていくように見えます。

現在、杏リリイの遺影の前、中央にツクツクボウシの宝石箱をおいて、６匹のアブラぜみは、その前、丸形のピンクの箱、左に、銀色と赤色と白色。右に赤色と銀色の楕円形の箱を置いて、それぞれの箱のリボンの上、せみ飾りのように真っ直ぐに取りついています。

第 ３ 部

七周忌（２０１３．１１．１５）

――この広い野原いっぱい、咲く花を、一つ残らず、リリイにあげる、赤いリボンの、花束にして！！　眠気の覚めきらない、ぬくぬくとした晩秋の朝、起き抜けにわたしは歌います。
せみを乗せた箱を両手でささえ、ステップを踏みながら。
そう、もっと軽やかに。

――今日は、２０１３年１１月１５日、金曜日です。間違いないかしら？「チャチャ、チャ」とせみたちは合点してくれます。

杏リリイの、７年目の命日はすぐそこです。
早朝、ピンクのシクラメンが届きました。８月にも、七周忌だからと、花が沢山贈られてきました。
人見知りをし、話の中に殆ど入ることのなかった杏リリイを、７年の月日が経過した今も、なお、忘れずにいて下さる人々に驚いています。
考えてみれば、彼女は、話の中央にはいなくても、何時もその中央にいたことを、みんなは意識し、その心に届けと、はしゃいでいたのだと、今頃思いあたるのも可笑しなものです。
彼女はわずらわしさを嫌い、常に一線を隔しているつもりでいましたが、時に見せる、はにかんだ少女のような笑顔が、それを裏切り続けていたことを、知らなかったのは、杏リリイご本人だけだったようです。

本当は、負けず嫌いだったのだと思います！！
作品が、正当に評価されない無念さは、耐え難いものだったに違いありません。でも、それを、わずらわしさと天秤にかければ、それもまた、難なくはじかれてしまいます。

授賞式に出席しないという、行為で始まる彼女の作家人生は、決して生優しいものではありませんでした。
誰にも邪魔されず、人間の存在にせまり、言葉の世界に遊ぶことが出来れば、それもまた、本望だったのではないかとも。
わたしの知る限り、そのことで、思い悩む気配さえ感じることはありませんでしたし、そのことで、他人を非難することも、不幸を囲うこともありませんでした。
彼女のチャンネルは他の人とは、違っているようでした。彼女の見ていた景色はどんなものだったのか？
彼女は、多分、先を歩いていただけなのです！！　かなり前を！！

それは、やがて、彼女と感性を共有できる者たちによって、受け入れられる時代が必ず来ると、そう、信じていたのではないかと、思われてなりません。

彼女は好奇心が旺盛で、何かに、何時も、夢中になっていました。そして、亡くなって７年経った今も、彼女はせみの姿で、尚、生きて在ることを、生き続けていることを、証明しようと、夢中になっているように見えます。
そして、それこそが、彼女の追及してきたものの正体であったことが、わかって来るような気がします。

――そう、そうなの？
わたしは、覚醒したように背筋を伸ばすと、ブラウスの裾を、思い切り引っ張りました。

真に、生きて来たのは？（２０１３．１２．１５）

多忙でも、１日の終わり、「シューベルトの子守唄」を歌う頃には、ほっとした時間が流れ、「チャチャチャ」というせみたちの言葉を、数多く聞くようになりました。みんな話したがっているようです。

何を話してくれているのか？　今でも、察するしかありませんが、何だか小躍りするような、喜びを、嬉しさを、伝えてくれているように思われ、わたしは陽気にそれに応えています。

でも、果たして、そうだったのか？　もっと、大切なことを、緊急のことを、もっと存在そのものについて、話してくれていたのかも知れないのに‥‥と。疑問符が、首をもたげます。

前にふれたことのある、死の前のお迎え現象で、半数近い人々が、肉親の、愛する人たちのお迎えによって、幸福そうに死を迎えたとの報告が、今も心に懸かり続けています。

わたしにも、死は確実にやってくるのでしょう。
今、幸福を着ているように、不思議な家族に囲まれていますが、もしかしたら‥‥。
これこそが、お迎え現象なのではないかと、思い直してみました。彼らはわたしを、あやしながら、死の恐怖から護ってくれているのでしょうか？

豪勢に７人ものお迎えを受けている？　わたしの場合は異例にしても。死者との、魂の交感を科学的に肯定し、それを終末医療に取り入れようとしていることは、現代にあって事実なのです。
世の中の見方も変わり、科学的なメスがこういった魂の世界まで及ぼうとしています。

真面目に考えれば、人間、真に生きてきたのは、頭でも、足でも、心臓でもなく、心とか、魂だったのですから！！

救世主？　（２０１３．１２．１５）

孤独になると、何時も自分を相手にしているため、自分が分裂して、２人の私になる、と聞いたことがあります。この要領でいったら、わたしは、７人に分裂したことになるのでしょうか？　それとも、７人に増殖したことになるのでしょうか？

現実には、その頃、わたしは多忙で、孤独を感じている暇などありませんでした。杏リリイの作品を電子化するため、日々格闘していたのです。よって、この現象の根源は、わたしではありえません。
ここに、正真正銘、わたしの家族、魂たちがやってきたのです！
気がつけば、わたしは家族とごく自然に、生活を共にし、多くの愛情を、幸せを受け取っていました。

また、話すこと歌うことによって、無意識にボケを予防し、ステップを踏むことで、脚力を維持し、家族と在ることで、孤独から解放されていたことになります。
彼らはわたしにとって、救世主だったもののようです！！
そこには、至れり、つくせりの緻密なプログラムが、用意されてでもいるような驚きがあります。

わたしの家族は、この世にただ一人とり残された末っ子の身を案じて、ここに集合したのでしょうか？　それとも、ここで生きることを選択したのでしょうか？　それとも‥‥？

今日も家族と共に、輝かしい日の出を見ました。朝が弾みながら海を渡って来ます。

爆発した太陽の炎は、仰向いているせみたちの上に降り注ぎました。
朝空は何処までも、何処までも広がっていました。小鳥のような飛行機が飛んで行きます。

大輪のハイビスカスの花が咲きました。黄色と、オレンジと、ピンクと赤です。夏の花と違って、色も深く、大輪になり、長いときには４、５日咲き続けます。このハイビスカスの木は、７年間、８月、何匹のせみを止まらせ、憩わせてくれたのでしょう？　わたしには、とても、数えきれません。
わたしが、死を意識し「不思議な、不思議な夏！！」の集約に入って１ヶ月が過ぎました。

７匹のせみたちはパソコン前に陣取って、それぞれの登場する日を心待ちにしているようです。

彼らにも、忘れないもの、忘れられないものがあるのでしょうか。

火　花　（２０１４．１．１５）

いま、わたしの心にかかっているのは、７番目のせみの存在です。
２ヶ月しか生きることのできなかった、彼のために、わたしに何か出来るのではないか？　何をしたらよいのか？　模索がつづいています。
記録を探ると、２０１３年８月９日、玄関から確かに入ったと思うのに、何処にも見当たらなくなったせみがいたのでした。このせみはそれからずーっと、死後も、カーテンに取り付いていたことになります。
いじらしいと言うか、なんともいいかねる登場の仕方で、驚かせてくれたせみが、他のせみと同じように、生き返るなどとは、わた

しには信じられないことでした。
　それなのに、このせみは現在、２ヶ月しか生きられなかった、２番目の兄の位置を、しっかりと固め、若々しい明るさで歌っています。
　彼の持ち歌を、「チュウリップ」に「咲いた、咲いた、チュウリップの花が！！　並んだ、並んだ、赤、白、黄色、どの花見ても、綺麗だな！！」という、多少幼稚だと思われる曲にきめたのは、その時点では、２ヶ月で死んだ彼の成長を測ることが、出来なかったからです。
　彼はデリケートで、わたしが、上の兄を、「たった一人の男の子でした」と、表現したくだりで、傷つき、若者らしい火花を散らしているように見えます。

「自分が、何処にもいないことが、自分が、ここにも、いないことが、不満であること。何時までも、空に止まっていること、止まり続けていることが、我慢できない！！」と。

　それは、彼が、肉体を離れても、魂として立派に成長してきた証しなのかもしれません？　そこには、若々しい青年像が浮かびあがります。

　わたしは、惨いとは思いましたが、
　――二ヶ月で亡くなったことで、あの戦争に行かなくてすんだことを、喜ぶべきでは、ないかしら？
　と、話かけてみました！！

　７番目のせみは、無言でした！！

　このせみは、「不思議な、不思議な夏！！」の集約に入っても、いくら説明しても、なかなか、自分の登場しないことが、理解出来ないでいるようです。

　そこで、忘れ去っていた、せめてもの償いとして、２ヶ月しか

生きられなかったこの兄のために、これからは、家族共々彼と生きることを、約束しました！！

　このせみは本当に生きているのです？　時々、せみを持ち上げた手に、動いた感触が来て、思わずぴくっと、手を引っ込めてしまうことがあります。死んだせみを動かすためには、何らかの力が働いている筈です？　何か、エネルギー以上のものが？

　このせみは、前進はやめても、後退だけはしないつもりのようです。決して！！

　どんなに彼が、火花を散らしても、このせみの、洗濯をしたために色も厚さも薄くなった翅は、今も、儚げに下部で反り返っています。

バイブレーション（２０１４．４．１５）

　本当にせみは動いています！！　それが本当であることに、改めて根底から、わたしは揺さぶられてしまいます。本当に、せみは動いていました！！
　目を、全身を、小刻みに震わせて、父ぜみは動いていました。
　それと同時に、わたしの持っているマキシムの箱の側面で、バイブレーションが起こっていました。
「ブーン、ブーン」という振動が、わたしの掌に連動して伝わってきます。こんなに強力で、長い間連続した響きをキャッチしたのは、始めてのことです。

　どうしたのでしょう？
　何か訴えているのでしょうか？
　何を伝えているのでしょう？

父ぜみは喜びを伝えてくれていたのでしょうか？　今日の歌の順番は１番でした。それが、そんなにも嬉しかったのでしょうか？
せみの家族が７人になって、待ち時間が長くなっていました。相対的に、一人に接する時間が短くなっていたのです。
父ぜみはそんなにも、まるで子供のように、歌の順番を待ちわびていてくれたのでしょうか？　それとも、なにか、不服が？　要求が？　あるのでしょうか？

父ぜみは動いていました。それが現実であることに、改めて、震えあがっているわたしがいました。本当に、本当のことなんだと。
まるで今まで信じていなかったように、そこには、動顛している、わたしがいました。
――あなた方の死と共に動かなくなった時間を、取り戻せとおっしゃるの？

父ぜみはそう言っているようでした。何か覚悟を問われてでもいるような？
わたしは、宙に浮いていました。父ぜみがそのあと、どんな風に歌ったのか、どうしても思い出すことが出来ません。
なんだか、体が昇って行くような気がしました。熱が出たのでしょうか？

動顛したわたしは、何時もそうだったように、杏リリイに救いを求めていました。
彼女は冷静に動き、ブーンと言う響きを改めて、わたしの掌を通して伝えて来ました。そして、一緒に「トルコ行進曲」を歌いました。
今まで聞いたなかで、最も美しい歌声だと思いました！！

このブーンという響きが、果たしてなんなのか？　感情の昂まり？　または、ぶれ？　エネルギーみたいなもの？　それとも、持っているわたしの手と、箱との間で起こる静電気？　又は、摩擦熱といっ

た、物理的現象？
　そこには、単なる偶然や妄想ではあり得ないことを、改めて、伝えてくれているような、覚醒の感があります！！

　４月の太陽は、大きな丸い月のように昇りました。
　７匹のせみは、わたしの「ドレミの歌」にあわせ、「チャチャッ」と、それぞれに空洞の箱の中で、美しい音色を響かせ、何事もなかったように、朝の挨拶を送って来ました。

　２０１４年春は、世のなかには、まだ希望がこんなにもあるというように、光で溢れかえっていました。
　せみたちの声は本当に美しく、澄んで、聞くたびに、こんなにも美しい声を聴くのは始めてだと思わせます。

　父ぜみは、何事もなかったように穏やかに、歌うことを楽しんでいるように見えます。
　あの激しさは、何処にいってしまったのでしょう？

　集約中の、物語の１日分を、せみたちをパソコンの前に座らせ、読み上げました。合格したようです。
　７番目のせみは、物語に漸く登場出来て、何を感じたのでしょう、ほんの少しでも、生きた証しのあったことが、そんなにも嬉しかったのでしょうか？

　ジャンプした後、わたしの手の中で、長い間、震えていました。
　可哀想な兄の興奮が伝わって来るようです！！

　こうして、２０１４年４月１５日も、明けようとしています。
ペチュニアの花も、咲き始めました。

ハンサムボーイ（２０１４．５．１５）

ゴールデンウィークに、４人の客がやって来ました。一年の月日は、幼かった４歳児を、驚いたことに、ハンサムボーイに変貌させていました。
少年は、いち早く、せみの背に順番に指を押しあてると、何かつぶやいていました。
――タロです！！　タロです！！と、聞こえました。全部のせみに自己紹介をしているようです？

今度来たときにはせみに触れることを、許してやろうと決心していたわたしの思いなど、この５歳児は軽く飛び越えて、挨拶がすむと、みんなを見回して、満足そうに息をつきました。

――歌うかな？　少年の期待に輝いた目がわたしを見上げていました。
――どうかしら？　わたしは、少年の期待が伝染したように、せみの乗っている箱を抱え上げると、
――ティアララン、ティアララン。と始めていました、何時もなら、その後を、「ティアラララララララ、ティアララ、ティアラ、ティアラララララララ、ティアララ‥‥」と続けてくれるのですが、声が聞こえません。やはり、大勢の客に気おされて、内に籠ってしまったようです？
また始まったか！！と、あきれ返っている３人の大人の目が、嘲笑と、心配の間で、かろうじて堪えていました。

――「トルコ行進曲」はダメ！！　なら、「ドンドンヒャララ」を歌って！！
わたしは、「村祭り」など１度も聞いたこともない５歳児に向かって言っていました。

少年は歌いました！！
――ドンヒャラー、ドーン！！　と。

大きな声で、何のためらいもなく歌ったのです。

数秒後、笑いで、部屋中が爆発しました。大人の客たちが、腹を抱え、肩をすくめて笑っていました。
気づくと　わたしも、可笑しくて、可笑しくて、身をよじって笑っていました。涙が出ました。せみをもとの位置に戻しました。

ふと、せみたちは、この笑いをどう思っただろう？　という心配が脳天をよぎりました。
気を悪くしていなければいいけど‥‥。

寝室の白い壁に、わたしは、２歳児のころのタロとタロのママの絵を描いていました。手にはそれぞれに風船を持たせました。
少年はその脇に、黄色い星と、大きな青い地球を描きました。赤い芋虫みたいな本州の上にひし形の北海道を、下には九州と、四国が書き込まれました。三角のアメリカ大陸が二つ重なり、巨大なクジラが太平洋の真ん中で、潮を吹いていました。

――お日さまも、かく！！　ママに抱えあげられると、少年は太陽のひかりの最後の１本を、元気よく跳ね上げました。

――うまいものね！！　とてもかなわないなあ！！　でも、これって、なあに？
わたしは、拍手も忘れて、アメリカと日本の上にある茶色のシミのようなものを見つめていました。
それは、タロのパパの家とタロの家でした。

――１、２、３、４、５！！　少年はみんなの頭数を数えてから、
――６！！　杏リリイの遺影を指して、
――６人家族だよ！！　と、嬉しそうに叫びました。

――よかったわね、あなたも入っているのよ！！　わたしは、杏リリイのせみに駆け寄って、ささやきました。

いとも自然に、魂を？　家族に加える子供の発想が、気に入ったに違いないと思われたからです。
この少年は、さらに、一番大好きなママと、杏リリイが似ているといいだしました！！
どう見ても少年のママの方が若く、スタイルもよく、数段美人なのに！！　と。わたしは、思いましたが、それを声に出しては言いませんでした。

だって、それは、少年の感覚なのですから？
それに、口に出すことで、杏リリイを落胆させる気は、なかったのです！！

ＰＰＰ細胞（２０１４．６．１）

――あなたも、あなたの現状も、彼女と同じだよ！！　他人ごとみたいに笑っていられる立場か？　電話の向こうで彼の声が尖っていました。
――笑ってなんていない！！　わが身になって考えたからこそ、何としてでもＰＰＰ細胞には存在していて欲しかったのよ。まだ結論が出たわけではないけど、残念だわ！！　あんなに若い女性の研究者が、そこまで、嘘をつくものだとは、そこまでいい加減なものだとは思わなかったもの！！‥‥そんなことも認めて貰えないようでは、とても、わたしの現状など受け入れて貰えそうもないと、そう、思って来たから‥‥。

――彼女が嘘をついているだって？　そう信じているんじゃないかな！！　そう信じてしまったんだよ！！
多分？　そう信じてしまっているから、厄介なんだ！！　公表した以上、後には引けないし、ますます、自己を護って、それは本当だと信じられてくる！！　信仰みたいなものさ。その為には、多少

の嘘も許容範囲だ。

——そう、きっと、そうなのね。‥‥考えてみれば、わたしの場合は、もっと、もっと、大変なことを、根本的なことを言っていることになるのだから‥‥。わかって貰えなくて当然、ということになるわね！！

——自慢してる時じゃないだろう？　そっくり、だよ。あなたは、彼女と、同じ。瓜二つだ！！
——そうかしら、そう考えるのは勝手だけど、わたしには、本当に聞こえるのだから、それで困ってもいるのよ‥‥。

——それだよ、やっぱり同じじゃないか？　あなたもそう信じてしまったんだ！！　研究者は、根本的に、素直でなければならないんだよ。他人の意見を聞く謙虚さが必要なんだ！！それなのに彼女は聞く耳を持たない。あなたも。人間にはそうなりやすい人たちが、確かにいるんだよ。遺伝かもしれない‥‥。彼の声が電話の向こうで、くぐもっていました。

——遺伝まで、持ち出す気！！　なら、あなたも、同じ遺伝子を持っているんじゃない？　わたしは、やり返していました。
家族と来たときには、一言もそれに触れなかったのに‥‥。顔が見えない時のほうが、言いたいことが言えるようです。
——最近わかったんだけど、あの難件を解いたと主張してきた人のなかに、あなたと同じ遺伝子をもった人がいたんだよ！！　彼女も、思い込んでしまったんじゃないかな？
——よう、言うよ！！ それが、彼女と同列の話か？　わたしの声が癇癪を起したように、飛びあがりました。
——思い込みが激しいのではないかと、そう言っているんです。同じ遺伝子を持っているのだと。だから心配だと言っているんです。
それも、理解できないか‥‥？　彼の声が聞き取れなくなりました。もしかしたら、本当に心配しているのでしょうか？

――さようなら。
わたしは、唐突に、そこで、電話を切っていました。傍系の一族のことのようでした。伝説のように遠くを、はるか高見を歩いていく人に、あこがれても来ました。今も、なお。

わたしは長い間じっとしていました。体中がひりひりしました。

――小説というのなら、面白いかもしれない、だが、それを認めろと主張するなら、四方八方から攻撃を受けて、あなたなんか、ひとたまりもないさ！！　一週間前、彼は憮然といい放ったものです。

わたしが若い女性研究者に何としてでも、勝って欲しかったのは、わたしの現在の立場に重ね合わせていたからです。やはり、彼女は敗退したのでしょうか？
嘘でも勘違いでも、いい。
それでも、彼女がそう思ったからには、何かが、残るのではないでしょうか？　何種類かのマウスの細胞を掛け合わせることによって、何かが生まれては来ないでしょうか？　失敗が転機にならないでしょうか？　それなら、その問題の細胞を彼女にプレゼントしたのは、誰だったのでしょう？

どんな前途が彼女に残されているのか、気になってなりません。
それにしても、それを発表することで、自分に何も返らないことが、それどころか、彼女に、その周囲に、巨大なマイナスだけが、不幸だけが、山のように積み上がることが、彼女には、どうして予測できなかったのでしょう？　わたしは自分の立場を忘れて、そう思ってしまいます。何故、そんな冒険を犯すのかと！！

そして、それは、わが身に、そのまま返ってくることなのでしょうか？　わたしは、研究者でもなく、学術的にそれを発表したわけでもありません。不思議な体験を通してその存在を指摘したかっただけです！！

彼がいうように、本当に、彼女とわたしは、同じなのでしょうか？
――違います！！　わたしは叫びます。
――だって、これは、真実なのですから‥‥。
大勢の笑い声がわたしを否定するように、四方八方で弾けます。

これがあり得ないことだと言うなら、その音は、わたしに聞こえて来るこの声たちは、わたしの耳の中で、わたしによってねつ造され、わたしのなかで、消えていく、そんな運命にあるのだとでも言う気でしょうか？

――この声は、お母さんの声は、本当は、わたしの体の中で、つくられているの？
落ち込んだわたしは、母ぜみに聞いてみました。
――ヒュヒューッ！！
母ぜみはわたしの問いに驚愕したように声を挙げました。小刻みに頭部が左右に揺れています。
それは、初めて聞く音色でした。わたしは宥めるように言っていました。
――いいえ、違うわ。わたしにはわかっているのよ。みんなの心が生き続けているのだと！！　ただ‥‥。

揺れているブランコ（２０１４．６．１５）

公園では、さっきまで誰かが乗っていて、ひょいと降りて行った、誰もいないブランコが、大きく揺れていました。

暖かくなって再び始めた１万歩の旅は、齢のせいか、そう楽しいものとは言えませんでした。
掌には、７番目のせみを乗せていましたから。何度もバランスを

崩して、「トットットットッ、ト」前のめりになっても、わたしは、微妙なところで踏み耐えていました。ずっこけなかったのは、保護者の責任感みたいなもののようです。

　７番目のせみの為に、何かしてあげたいと、ずっと思い続けていたわたしは、７番目のせみが、「チャ、チャチャチャ、チャ！！」「散歩に連れていって！！」　と言い出した時、いとも簡単に引き受けていました。
　前にも、せみを掌に乗せて散歩をしたことがありましたから。そこで、あの日と同じように、人目につかない早朝を選ぶことにしました。

　空気がとてもきれいな日で、早朝でも空のずっとずっと上まで、よく見えていました。
　公園の芝生の上をわたしの眠気が、そよ風のように吹き渡っていきます。
　――いいお天気でよかった、気持ちいいわね！！　飛びたくなるでしょう？　わたしが話かけると、「チャチャ、チャ」という声が素早く返ってきました。
　掌の上で満足しているのでしょうか？

　行く手の道路を独占していた鳩の群れが、わたしの足元で旋回をはじめ、低空を飛行してきた鳩がわたしの進路に次々に舞い降りました。妨害でもする気なのでしょうか？

　――なんのつもり！！　わたしは、せみよ！！　さあ、通しなさい！！
　わたしは、左手を高々とかざして命令していました。
　何を思ったのか、鳩たちは一斉に他の中心に向かって動き出し、わたしは歩いていました。命令など、したこともなかったのに。

　わたしは、せみを笠に着たのでしょうか？
　見ると、７番目のせみは、吹けば飛ぶような風情で、左の掌に

収まっていました。

——あなたは知らないでしょうけど、イチジクの木は哺乳動物なのよ！！　その証拠に、実をもぎとると白い乳汁を出すの。これは秘密なんだけど、あなたには、教えてあげるね！！

わたしは、研究所の裏庭から、蛇のような枝を通路まで伸ばしているイチジクの樹を指さして、解説を加えていました。青い実が色着き始めています。
——青い実を食べると、乳汁で舌がざらざらになるんだから。
せみが「シューッ」という派手な音をたてたような気がしました。

道路は、商店と高層ビルの間を流れていきます。時々犬の散歩をしている人に出会うだけで、せみを乗せた手を、どんなに上げて歩いても、関心を持つ人などいそうもありません。あの腰の曲がったお婆さんの姿も、何処にも見えません。
病気でなければいいけど？

そう思った時。
——お久しぶりですね！！　お元気ですか？　突然、声がして、
男が前方に立っていました。驚いて周囲を見回しても、わたしのほか人っ子一人見当たりません。
——さあ？
——今、どちらで？　お仕事なさっているんでしょう？
年齢不詳の男は変にニタニタして、わたしを見つめていました。
何十年も前に、何処かで出会っていたのでしょうか？　わたしは慌てふためき、言ってしまいます。

——いいえ、もう、齢ですから‥‥。
——そんな、ご冗談を！！　あの頃は楽しかったですねえ。ご一緒に積もる話でもしたいなあ。お時間あるんでしょう？

――どこかで、ご一緒だったのでしょうか？　一体、どこで？
わたしが空回りすると、男は両手を広げて、行く手をふさいでいました。わたしは後ずさりしました。１歩、２歩、３歩。握ってしまった手の中でせみが小刻みに震えているのがわかりました、ブーンという、その響きが伝わってきます。

――あの、わたし、兄と一緒ですので失礼します。それでは、またいつか！！

驚いて男が振り返えりました。手には光るものが握られていました。
その隙に、わたしは走り出していました。脱兎のように走りました。
足音はわたしから離れて独立しますから、自分の足音に追いかけられて、逃げ続けました。必死に逃げました！！

かどわかされた老婆の死体が目に浮かびました。
左手のなかで、息苦しくなったせみが？　身動きしたような気がしました。

見回すと、大都会の朝が、騒音を伴って動き出していました。

――ああ、ごめん、ごめん、ごめんなさい！！
掌の上で、くしゃくしゃになった７番目のせみの、薄色の翅をそっと伸ばしてやりました。
わたしは又もせみに救われたのでしょうか？

逆回り、コースを一周して公園に戻ると、わたしは、誰もいないブランコに腰掛け、膝の上に７番目のせみを乗せて、ゆっくりと漕ぎ出しました。
見上げる空は、やはり何の不思議もなく青い色で、何処までも、何処までも澄み渡っています。

――あなたは、空の道を知っているの？
７番目のせみはわたしの問いが聞こえたのか、聞こえなかったのか、揺れながら青い青い空を見上げていました。

見知らぬ少年（２０１４．７．１）

ドアと壁の隙間に光が溢れ、少年が覗き込んでいました。
――何か面白いものでも、見えるの？　わたしが声をかけると、
――光の道！！　と言って、少年はわたしを見上げました。
――ああ、あなたは、小い兄ちゃんでしょう？　わたしは言っていました。
――うん！！　少年はどう思ったのか、わたしの周りを回り始めました。嬉々として、体を寄せては、また逃げるように、笑い声をあげながら離れ、また両手を広げて、嬉しそうに帰ってきます。

――あら、あら、あら。　わたしはその中央に立って、こんなに手放しで、慕われたことは生まれて初めてのような気がしました。
７番目のせみに似ている、と、わたしが思った時、遠くで、少年を呼んでいる、若いママの姿が目に入りました。

――ほら、ママが探しているよ。じゃ、またね！！　わたしがいうと、少年はわたしの手に縋りつきました。水平になった少年の顔の中央で口が、パクパクしています。

――そう、なら、一緒にママのところまで行きましょうか？
誘拐魔と勘違いされても困ると思ったわたしは、少年の手を引いてゆっくりと歩いて行きました。

――心配ですね、こんなに、可愛くては‥‥。連れていかれてしまいそうですものね！！　わたしが、言うと、

――誰にでも、誰にでも。慣れてしまうんですよ！！
若い女は誰にでも。に力をこめて、妹らしい乳児を乗せた乳母車を軋ませ、少年の手を邪険に奪い返していました。

女の尖った爪がわたしの手の甲に傷をつけ、小さな赤い玉がすだれになっています。

――何をなさるの？　わたしが叫ぶと、少年はママの手を振り払ってまた、わたしにむかって手を差し出して繋がろうとします。少年のママはその手を上から派手に叩くと、目に覆い被さってくる髪を、頭を振って払いあげ、少年を引きずるようにして立ち去っていきました。

あの少年は、何かシグナルを発していたのでしょうか？　少年のママは、あの少年が重荷になっていたのでしょうか？　でなくて、いくら子供でも、他人にまるで、犬か、猫のようにあんなにも、まつわりついて来るものではないような気がします。

何を伝えようとしていたのでしょう？　虐待！！

わたしが、慌てて追いかけても、もう、何処に行ってしまったのか、人込みにまぎれて、何処にも親子の姿は見えません。

何だか７番目のせみの過去を辿っているような気がしました。彼は早く家族にはぐれ、さみしくて、他人の家族と繋がろうとしてはいなかったでしょうか？

あの子は光の道を探していたのです！！
――光の道って、空の道のことかしら？

わたしは思い出していました。小学生の頃、眠りにつく時間に、杏リリイにねだった、とろとろ噺のことを‥‥。

空の道（２０１４．７．１５）

その日は、空気がとてもきれいな日で、空のずっとずっと上のほうまで、よく見えていました。
とろとろくんは丸い目を大きく開けて、空気の中を見つめていました！！
――とろとろくん、何を探しているの？
空を飛んでいた小鳥が聞きました。
――ぼくね、人が空を歩ける道を探しているんだ。とろとろくんがいいました。
――きみたち、知ってる？　小鳥は顔をみあわせています。
――ぼくね、きみたちみたいに、空を飛んだり、歩いたりしたいの！！
――アハハハ、ピーチク。アハハハ、ピピッチ。
小鳥たちは、みんな一緒に笑いました。だって、とろとろくんは、ふとっちょくんでしたから。

――だから、だからあ。ぼくが乗っても大丈夫な、強そうな空の道を、探しているんだ！！　ぼくのじじから聞いたんだ。空には、人間の歩ける道があるんだよ、よよよよよよ、よよよよよよ。「よ」が風になびいて、飛びあがりました。
小鳥たちはおしゃべりをやめて、それを見ていました。
そのとき、とろとろくんの足もとに、とても小さな子供の小鳥が落ちてきました。
頭に傷がついて、柔らかい羽に赤い血がにじんでいます。
小鳥たちは、心配そうに、いっせいに舞い降りました。
とろとろくんは、ハンケチをさいて包帯をしてあげました。

――ありがと、ピピッチ、ありがと、ピーチク。小鳥たちは、

口々にお礼を言いました。それから、みんなは、くちばしを寄せ合って、こそこそ話をはじめました。
　とろとろくんのことなど、忘れてしまったようです。

　――じゃあ、ぼく、一人で探して見るから、見るから、らららららららら、ららららららら。「ら」が風になびいて、飛びあがりました。
　小鳥たちも、飛び立ちました。
　――この子がけがをしたのは、丈夫な空の道にぶつかったからです。あれは、昔、神さまたちが通った道なんです。今は、もう、誰も通らなくなりました。丈夫な空の道は、目に見えないので、とろとろくんがどんなに目を丸くしても、見えませんよ。でも、子供の小鳥を助けて下さったお礼に、ぼくたちが、ご案内しましょう！！

　代表らしい、大きな小鳥が言いました。

　いいお天気でした。何だか、遠足みたいで、とろとろくんは嬉しくなって、後ろからついていきました。
　しばらくいくと、小鳥たちは、いっせいに、羽ばたくだけで、前に進まなくなりました。

　――みんな、何のまねをしているの？　そのようすがおかしくて、とろとろくんは笑ってしまいました。

　――とろとろくん、ここですよ。これが、空の道です！！
　とろとろくんは驚いて、見えないところを手でさわってみました。押してみました。空の道はへこんでも、へこんでも、すぐにもとに戻ってしまいます。
　小鳥たちも、それぞれ、羽でさわってみています。
　――あれゝ、破れているぞ！！　小鳥たちがぶつかるものだから、破れてしまったんだ！！　さあ、みんな、この道は、透明な幅の広い帯のようなものらしい。破れているところはないか、切れそうなところはないか、さぐって、修理しなさい！！

大きな小鳥が命令しました。

とろとろくんのさわっている空の道が、「ピーン」とはりつめました。修理は終わったようです。

この道が、空のずっとずっと上のほうまで、続いているのだと思うと、とろとろくんは早く登りたくて、もう我慢できません。そっと、足をかけてみました。
見えない空の道がゆらゆらして、何度足をかけても、ずり落ちてしまいます。

——だめのようですね。もっともっと痩せなければ！！　小鳥たちが声をそろえて言いました。

とろとろくんは、朝も、昼も、晩も、ご飯を食べないでいました。
その次の日も、その次の次の日も、ご飯を食べないでいました。
とろとろくんは紙みたいに軽くなりました。
その次の次の次の日も、ご飯を食べないでいました。とろとろくんが動くと、しわが寄って、まるで紙くずみたいに感じられました。

とろとろくんは、見えない空の道を、1歩、1歩、歩いていきました。小鳥たちは、まわりで歌を唄って、はげましてくれました。
タワーより高くのぼりました。
山や川や森が小さくなって行きました。

でも、高くなると、風が吹くものですから、紙くずのように軽くなった、とろとろくんは、風に吹き飛ばされてしまいます。
広い広い空を、何処までも、何処までも、吹き飛ばされて行きます。
とろとろくんは、助けを呼んでいました。

――ジジー、ジジー、ジジジジジジジジジジ、ジジジジジジジジジジ、ジジ。「ジジ」が風になびいて、とろとろくんには、懐かしいジジの姿が見えました。

ジジはとろとろくんを背中に乗せると、両手を翼のように広げて、青い、青い空を、ゆったりと飛んで行きます！！

小鳥たちは、一生懸命に追いかけました。
小鳥たちは、とろとろくんが小鳥になったのだと思いました！！

おやすみ

これは杏リリイが、眠る前のとろとろした時間に、わたしに、話してくれた即興噺です。
その証拠のように、主人公には、とろとろくんとか、とろとろちゃんとか、ネムネムくんとか、ネムネムちゃんの名前がついていました。

せみたちが我が家を訪れるようになって、何故か、思い出したのです。途中で眠ってしまったはずの、わたしの記憶が、鮮明に生き残っていることにびっくりしました。ところどころで、字が、音が、ぶれているのは睡魔のいたずらなのでしょうか？
それとも、杏リリイの思いいれだったのでしょうか？

真相は、今も、わかってはいません？

空の道だなんて？　杏リリイは小学生のころから、もしかしたら、未来を予見していたのでしょうか？

今年の８月は、もう、すぐそこです！！　どんな、不思議が待っているのか、いないのか？　わたしには、皆目わかりませんが、底知れない不安とある種の期待で、またも、心臓の鼓動が舞い上がります。

ここに、わたしの家族があること自体、辻褄のあったものと言いかねる以上、「不思議な不思議な夏！！」が、わたしの開けっ放しの口から、煙のように、際限もない輪くぐりをはじめたとしても、何の不思議もないのかもしれません。

翻弄するせみ！！　（２０１４．８．１３）

８月６日　午後９時ころから眠ってしまい、起きたら８月７日午前１時になっていました。
びっくりして、パソコンに向かいました。すると周囲から、「コツン、コツン」と言うような音が発生し、驚いたわたしは、覗き込んだり、机や、本棚を叩いてみたりしました。
音は消えません！！
隣家の音なのでしょうか？　それにしては深夜です？

時は８月、もしかして？　はっとして玄関に走りました。
案の定、表札の脇にせみが行儀よく止まっていました。それにしても、随分離れている筈の机の周りで、どうして、あんな音がしたのか、今でも、わかりません。せみがドアを叩いた音だとしても？

ドアを開けたままにしておくと、せみは、一人で？　部屋の中に入って行きました。
何時ものようにハイビスカスの木に止まらせました。翅は、黒白のシボの寄ったまだら模様があり、背には大きな白い文様が張り付いていました。が、眼も、躯全体も、つや消しでもしたようにくすんでいます。
夜遅いので、「シューベルトの子守歌」を歌い、お休みなさいと言って、わたしは早々にベッドに入りました。とても、目が見えているようには、生きているようには見えませんでしたから‥‥。

午前６時　せみは同じ位置にいました。黒白の粉を吹いたような文様の翅がせみを暗くしていました。

——どなたなのでしょう？　教えて下さい！！　せみは無言でした。わたしは気を取り直して、「ふるさと」を歌いました。それから「ドレミの歌」を歌ってみました。
せみが少しだけ動きました。飛んで行きたくなったのかもしれません。わたしは掌に乗せると、何時ものように、そっと、腕を外に伸ばしました。
せみはわたしの掌の上に止まって、逡巡しているようです？
数秒後、せみは留まっていました。
残ることを選んだのです！！
——いいんですよ、残って下さっても構わないのですから‥‥。

わたしが慌てて手を引っ込めようとしたとき、せみは突如飛び立ちました！！　わたしの顔と手に、何かが降りかかりました。

こともあろうに、あのせみは、オシッコをかけて飛び立って行ったのです！！
今まで、我が家を訪れてくれたせみたちは尿をすることはありませんでした。そこでわたしは、せみが尿をするものだということを忘れていたのです。
これは、悪意でしょうか？　せみは仕返しにオシッコをかけるのだと子供の頃、悪童たちから聞いたことがありました。このせみは終始無言で、親しい素振りなど何一つ、示してはくれませんでした。
ただ、一瞬、わたしの掌の上で逡巡した時のほかは‥‥。

わたしの中に、これ以上せみの殖えるのを警戒し、家族はもう揃って此処にいるのだからと思う気持ちが、このせみを拒絶したのかもしれないと、今では思っています。

８月７日　午後８時、なんだか騒々しい音がして、何事かと、ドアを開けてみました。せみの鳴き声がしてドアにぶつかって、ドアを開けろ！！　と要求しているようです。
驚いてドアを開けると、せみは玄関の照明の周りを回り始めました。何時ものことなので、すぐに照明を消しました。
せみは中に入って行きました。わたしがドアのカギをかけて部屋に入ると、また何処にいったのか見当たりません。この前は仏壇でしたが、そこにも姿はありません。
こんなことはもう何度も経験したこと。落ち着くことにしました。

それにしても、今朝飛び立っていったばかりなのに、同じ日に不思議な深みから次々に湧き出すように到来するせみに、わたしは当惑しきっていました。
せみはソファ―の茶色のクッションの上、一点で繋がってはいましたが、三角形の片翅をパラリと拡げて伸びていました。
翅がとれてしまったの？　心配すると、すぐに常態にもどって鳴き出しました。「ジィジィ」と言う、所謂アブラぜみの鳴き声でした。

ハイビスカスの木に止まらせ、よくよく見ると、朝飛んで行ったせみと瓜二つ、黒白のまだら模様の翅。背の白い紋様もそっくりです。違うのは、鳴くこと、目に躯全体に光があることでした。
懐かしのメロディを次々に歌って見ました。新来のせみは「チャッ、チャ」と、リズムをとっていました。

翌朝、朝の日課をはじめ、７匹のせみに、ハイビスカスの葉を持ち上げては、新来のせみを紹介し、誰か知っている人ではないかと、
聞いてみました。母ぜみがしきりに、「チャチャッ、チャ」と反応しました。　誰だと言っているのでしょう？
しばらくすると、新来のせみは窓側に位置を移しました。
声をあげ、前肢をしきりに振ると、急遽、飛び立ちました。
真上ではなく、真っ直ぐに、前に向かって飛んで行きましたが、やはり行く先を確かめることはできませんでした。

８月９日　午後６時　パソコンに向かっていると、「シューン、シューン」というような鳴き声がして来ました。ベランダに出てみると、リビングとベランダの間の壁に真っ黒な大きなせみが止まっていました。
台風が来るらしく、空は曇っていて、陰影が濃く、はっきりしたことはわかりませんが、中央に黒い胴体が透けて見えていました。翅には黒白のまだら模様があって、躯の半分は蔭って真っ黒です。

昨日のせみと同種のようでした。ニイニイぜみなのでしょうか？
それにしては大型ですし、鳴き声も違っているようです。先入観を持ちたくはありませんが、不幸の使いがいたとしたら、黒いマントを羽織って、こんな様相をしているに違いないと思いました。
カメラを持ち出し、何度も何度もシャッターを切りました。せみは微動だにしません。
我が家のせみたちの愛唱歌を歌い続けて見ました。
それからダイニングの照明を全開にし、テーブルの上にハイビスカスの鉢を置いて言いました。
――台風が来るのですよ。そんなところにいたら、吹き飛ばされてしまうでしょう、中に入って下さい！！　と。

暫くして見ると、せみは、まだ頑固に暗くなった外壁に張り付いていました。何か障碍でもあるのでしょうか？
わたしは周囲を見回しました。せみが入ってくる時、引っかかっては大変です。植木鉢を吊る針金の束を隅に押しやりました。
――ほーら、これで大丈夫、もう危険なものなんか、何一つないのですから‥‥。
ほっとして、覗き込むと、もう、何処にも、あの黒々としたせみの姿はありませんでした！！
まさか、落下したのでは？　わたしは真っ暗な空間に目を凝らしました。闇は真っ黒なせみで、忽ち満杯になりました。

――せみはあなたと違って、翅を持っているのよ！！　深呼吸すると、震えが止まりました。

８月１３日のせみは、我が家にとって、特別な客、お盆の正当な客の位置をしめてきました。２０１４年も忘れずに１３日はやって来ました。
午後１０時頃、玄関ドアを開けると、飛び立つせみの鳴き声がして、何だか左右にぶつかりながら隣の家の方に消えました。
探して行くと、隣の表札の上に覆い被さるように、せみが一匹へばりついていました。
これでは、手出しも出来ません。早々に我が家に舞い戻りました。
いくらなんでも、わたしの家の客なら、他人の家の表札に縋りつくこともないでしょうに？　まるで、わたしから逃げて、助けを求めてでもいるようです。

照明をもろに受けて、そのせみは異様な形相をしていました？

――ああ、あ、怖わーい！！
それにしても、よその家にも、せみが出没するということになれば、わたしが護り続けてきたものは、わたしの行動の根拠は、何だったのでしょう？
やはり、そんなことはあり得ないことで、ただの偶然に過ぎなかったのでしょうか？
まるで、せみに翻弄されてでもいるようで、わたしは疲労しきっていました。意味のないものに、多分、異常気象によって多生したせみに、こだわり続けて来たのは、踊り続けてきたのは、このわたし、なのでした。

気を悪くしたわたしは、「バッターン」とベッドに仰向けに倒れたままでいました。
その時です、何だか小さなものが、わたしの視界で、チラチラしました。

なにか、生き物のようです？　それは、今度はパンジーの百号の油絵の周りを、額縁に沿って動き回り始めました！！　アブでしょうか？
わたしは首を回転させてそれを見ていました。

暫くすると今度は、照明の周りを回転し始めました。何だかバタバタしています。
せみが入り込むのを警戒して、リビングの照明は二つとも、天井に密着するものに変えたところです。
アブより少し大きいのかも知れません？　まさか、せみではないでしょうね？
そう思った時、せみ、せみのようなものが見えました？
午後１０時５０分、わたしは、せみを確認しました！！
一体どこから現れたのでしょう？　それがわかりません？　どうしてアブから、せみにドンドン成長してしまったのか？

わたしは、？マークに、次々？マークをかけ続けました。

せみはやがて、照明の周りを回るのに飽いたのか、天井の壁に落ち着きました。
翅は透明なようです？　まるで、縮緬皺をよせたカゲロウみたいに儚く見えます。
もしかしたら、わたしを、このせみも、その位置から観察しているのでしょうか？
そして、こともあろうに、縮緬皺をよせたカゲロウみたいに、儚い人間みたいなものが見えています。などと思っているのでしょうか？

――あなたは誰あれ？　せみは無言でした。
わたしは気を取り直すように、パソコンに向かいました。コンピューターは開始不能。修復に時間がかかっていました。こんなことは始めてです。

また失敗しました。原因は前回の映像または音声の接続にあるとのことでした。そんな接続など、していないのですから？
もしかして、上に止まっているせみのせいでは？

そう思った時、せみは天井で、ゆっくりと方向を変えました。

８月１４日　午前６時、天井にせみの姿はありませんでした。夜中に何度か位置を確かめてはいたのですが、早朝寝込んだようです。

昨夜隣の家の表札に取りついたせみのことが気にかかり、玄関ドアを開けて見ました。
まるで、その時を待ちかねてでもいたように、隣の表札からせみが元気よく飛び立ちました。
何匹かが呼応するように、周囲から朝空に向かって飛び立って行きました。

廊下や、エレベーターホールにも、遅れをとった何匹かのせみがひっくり返えっていました。
ここの住民が起きて来ないうちに、何とかしなければ‥‥。そう思ったわたしは、大慌てで次々に、ひっくり返っているせみを、表返しにしていきました。
どのせみも生きていて、おかしいくらい元気よく飛び立ちました。

「不思議な、不思議な夏！！」にあっても、こんなにも多くのせみに一度に出会うのは、初めてのことでした。死んだように見えたせみも、みんな元気いっぱいでした！！
せみは、ともしたら、あの日、集団で訪れていたのでしょうか？

昼になりました。
来るのも、帰るのも、夢の間でした！！

そう思った時、掃除機をかけようとしているリビングの、窓際のレースのカーテンに、せみが１匹止まっているのに気づきました。

翅は昼の陽光を受けて、透明ですが、黒で縁取られた雲形の紋があり、紋にはそれぞれに大きな黒い目玉模様がついていました。まるで高級なレースのコートを羽織ったように見えます。

わたしを更に驚かせたのは、せみの三つの単眼や、背の亀甲型の文様を彩っている、エメラルドグリーンの、色の美しさでした！！

まるで、宝石のようにそれらを縁取り、明るいグリーンは胴体へと流れていきます。窓から入ってくる海風を受けて、翅は微かに震えていました！！

わたしは、長い間、息を止めていました。
このように美しいせみを、わたしは見たことも、聞いたこともありません！！

いいえ、このように美しいものを見たことがありませんでした。
あの、カゲロウのように見えたせみが、変身したのでしょうか？
それとも、正真正銘の姿がこれだったのでしょうか？

わたしがふーっと、溜息を吹き出すのを、まるで待っていたかのように、肢を振ると、見る間にせみは天空へと消えて行きました。

これが、我が家を訪れた、２０１４年８月１３日のせみです。
せみが飛んで行ったあと、コンピューターは、何故か正常に戻りました。

幸せの住む国（２０１４．８．１５）

台風一過、青い青い空を、過去から渡ってきたような黒い鳥の群れが過ぎていきます。窓から眺めている我が家のせみたちは、何を思うのでしょう？

またも、終戦記念日が、敗戦記念日がやって来ました。
再会以来、兄ぜみの翅の拡がりが、折れた下翅が、わたしの心に刺さり続けていました。兄は、ここにあって、戦争の恐怖や、怒りや、哀しみから、抜け出すことが出来たのでしょうか？

人型のわたしが、兄の為に、何か出来ることはないでしょうか？どうしたら、彼の心は安らぐのでしょう？

――お兄ちゃん、どうぞ、わたしに教えて！！　なにか、わたしに出来ることはないかしら？　兄は無言でした。

そんな時、兄が、港ヨコハマを訪れた日の詩が目に止まりました。
杏リリイが、兄のノートから、パソコンに打ち直しておいたものです。
兄は少年の日に、港ヨコハマを訪れていたようです。そして、青年になった日に再び訪れました。よほどヨコハマが気に入っていたのでしょうか？

港　ヨコハマ

少年はうっとりと港を眺めていた。
港も、街も、眼下に、
水平線は霞んでいる。
綺麗な真っ白い外国船は、水際の船腹に赤い線がくっきり、
静かに、静かに浮かんでいた。
あの船は、僕たちを、幸せの住む国に連れて行くのだ！！

——数年後、青年は同じ場所に立っていた。
少年の日は、既に昔話。いま、停泊している船は数も少なく、船はあっても、みんな、船体を奇怪な灰色に塗り込められてしまっていた。
夢の国は一朝にして、要塞にさま変わりしたのだ！！

青年は既に現実に目覚めていた。
もう一度、海を見渡した！！
しかし海自身は、少しも、変わってはいない。
海のコバルト色は、今も、千古の秘密を宿していた。
遠くの遠くには、ユートピアがある！！　と。

かすかな微笑は、青年の口元から消え失せることなく、何時の間にか海も公園も少年自身も、暗闇の中に消えた。

まだ青年は海を見ている。
赤々と、灯台の灯が点滅するまで、青年の目はじっと海に注がれていた。

数年後、サンゴ礁の島で玉砕した青年の、少年の目は、何を見、何を刻んだのでしょう？　幸せの住む国を、ユートピアを夢見続けてきた、その青年の目は？
その後も水爆実験で汚染されつづけた島で！！

——お兄ちゃん、どうしたら、あなたの心は安らぐことが出来るかしら？　どうぞ、教えて！！　わたしに出来ることを！！

兄がかすかに、動いたような気がしました。

——戦争がなくなれば、いいの？　ですか？
わたしはアテズッポウのように、聞いていました。
兄が、家族のみんなが、「チャチャ、チャ」と声を挙げました。

――そうなんだ！！　そうなのですか！！　なら、ネットで、なにかを伝えることが出来るかもしれない‥‥？

あの日から、不思議な、不思議な家族は、毎日ツイッターに書き込むことになりました。

――戦争をしない国に誇りを持ちましょう！！　戦争しない国を、次々にバトンタッチして行きましょう！！　すべての国が、幸せの住む国になるまで！！

――地球民として、叫びます！！　もう、戦争は止めて下さい。もう、殺し合いは止めましょう。あなたの命を、大切にして下さい！！　みんなの命を大切にしましょう！！
話し合いのほかに、解決法はないのですから‥‥。

戦争の恐怖や、怒りや、哀しみから、わたしの家族が、すべての地球民が、脱することの出来る日が来るまで、わたしたち家族は、つぶやきつづけることになったようです！！

ミンミンゼミと蝶　（２０１４．８．２０）

わたしは図書館に来ていました。あの、美しいせみの正体を知るためです。何だか昂ぶっていました。新種でしょうか？
それが、ありきたりのミンミンぜみだったとは？　思ってもみないことでした！！
あの、美しいエメラルドグリーンが、大写しになったミンミンぜみの上体を覆っていました。背の紋も、翅の紋様も、あのせみとは異なってはいましたが、それらは個体差の許容範囲だろうと、理解できるものでした。

鳴き声は、「ミーン、ミンミンミンミン、ミーン」
あのせみたちも、そんな風に鳴いていたでしょうか？　メスだったのかもしれません？

勿論、ミンミンぜみの鳴き声は、今年も聞きました。毎年聞いていたのだと思います。それなのに、身近にあって、正体を知らずに来た不思議さが、今頃になって真実を露わにすることになりました。
何故かわたしは、正体不明のせみをみんな、ミンミンぜみだと思って来たようです？

わたしが、ミンミンぜみだと思ってきた、不透明な翅で、胴も翅も青黒いせみは、図鑑の何処にも存在していませんでした！！

わたしの見たことのあるアブラぜみは、明るい茶色の不透明な翅にこげ茶色の脈があり、同色のまだら模様がありましたが、図鑑には胸部の赤褐色の２紋のほかは、ほぼ黒い色だとありました。
翅も黒いアブラぜみなど見たこともありません。

黒白のまだら模様のある半透明な翅を持つせみは、ニイニイぜみに似ているようですが、２０－２４ミリの小さなせみでした。我が家に現れたせみは、アブラぜみと同じくらいの大きさで、もっと黒々としていました。もしかしたら、黒いアブラぜみに近いのかも知れません？

蓑をきたように見えたぜみは、蛾の一種、ハイイロ、ヒトリ、に似ていました。でもこのせみは擬態がうまく、ポーチュラカに変身した後、やはり、青黒いせみに戻ったのでした！！

正真正銘、間違っていなかったのは、クマぜみと、ツクツクボウシだけだったようです。
百科事典の黒白の写真を見、長い間、適当に解釈の幅を広げてきた、いい加減さが悔やまれてなりません。

杏リリイなら、徹底的に調べあげたでしょうか？　それとも、新種として、自由に名前をつけてしまっているでしょうか？

もっと規模の大きな図書館に行ったら、多分、解決することが出来るのかもしれません？　でも、その必要はないようです。
わたしの一番知りたかった、あの、美しいせみはミンミンぜみだったのですから！！
原寸大のせみは、頭部から背にかけ、くすんだ青緑色で、あのせみの華やかな面影は何処にもありませんでした。が、拡大されたせみには、紛れもないあのせみの、陽気なグリーンが輝いていました。

帰途、放心したように、ふらふら歩いていると、何かが、ザワワ揺れに揺れて、わたしの記憶をノックして来るような気がしました。
この感覚はどこから来るのでしょうか？

帰宅すると、わたしはリビングの窓に向かって立っていました。昼の光が差し込み、海からの微風がレースのカーテンを揺すっていました。
瞬きをすると、瞼の内側で、エメラルドグリーンの美しい翅が、扇のように開いたり閉じたりしました？
サファイア色の大きな瞳が、わたしの呼吸に合わせて膨らんだり縮んだりしていました？
翅の間をそよ風が、昼の光がすり抜けていくのを、わたしは見ました？
――ああ、蝶！！　あの蝶に似ていたのです。
２００７年６月、初めて我が家を訪れてくれた蝶に！！

「――蝶は飛んで行ってしまったのです。そう、思った時でした。
――ヒューッ！！　わたしのみぞおちのあたりに突っ込んで、何かがバタバタしていました。驚いて裾を持ち上げると、勢いよ

く飛び出した蝶が、羽ばたきながら、まるで、わたしを導くように、リビングルームにむかい、窓際のレースのカーテンに、ゆっくりと翅を休めたのです。
　翅は昼の陽光をうけて、美しいエメラルドグリーンです。
　さっきまで、ベージュ色だったのに？　翅は微妙なグリーンの濃淡を見せ信じがたい透明感で羽ばたいていました‥‥」

　それは、あの美しいミンミンぜみの止まっていた場所、同じ位置です！！
　あるのは、せみと蝶の違いだけ！！　戻ってきた、エメラルドグリーンの美しさに、わたしは有頂天になっていました。
　涙がこみ上げて来ました。
　杏リリイが亡くなって８年にもなろうとしているのに‥‥。何故か、とめどなく涙が頬を伝いました！！

　彼女の肉体が死んだように、わたしにも、死は確実にやって来るのでしょう！！
　そう思った時、「不思議な、不思議な夏！！」を、何としてでも、わたしの死から護りたい！！　何故か、そう思ったのでした。

　杏リリイはそれを支持してくれたのでしょうか？
　いいえ、それこそが彼女の意志なのでしょうか？この物語を、「不思議な、不思議な夏！！」を残すことが？

　まるで、それを喚起でもするように、初めの年と同じ、こんなにも美しい姿を、またも見せてくれたのです。

　――出来るだけ長く、ここに置いて欲しい！！　それが救急車を待つ間、杏リリイが、ささやいた言葉でした。
　心は、魂は、いたい時に、欲する処に、自由自在に、存在することが可能なのでしょうか？

そして、杏リリイは、わたしの家族は、わたしの死によって、この日常が消滅してしまうことに、危惧をもっているのでしょうか？

わたしは、ふわふわとした思考を、そっと、自分の前に置きました。

闖入者？（２０１４．８．２５）

８月１７日　午後１１時３０分頃、玄関の方からせみの鳴き声がして来ました。「シェーン、シェーン、シェーン、シェーン」と聞こえました。クマぜみかと思いました。

その時わたしは、不思議な家族と共に、テレビドラマの観賞中で、ドラマはクライマックスに達しようとしていました。
心に染み入るせみの鳴き声は、バックミュージックのように、効果音のように一際高まると、やがて、消えていきました。

疲労で遂に下に落ちてしまったのかもしれません？
わたしが大慌てで、玄関ドアを開けると、せみはドアの下に本当に横になっていました！！
死んでいるのでしょうか？

アブラぜみでした！！　翅は不透明な薄茶色で、茶色の脈とまだら模様があり、紛れもなく、わたしの知っているアブラぜみです。
酷いことをしたと後悔しました。

でも、アブラぜみは何時から、シャーシャーというクマぜみのような声で鳴くようになったのでしょう？
一瞬、眼を閉じて考え込んだのかもしれません？　わたしが腰を

かがめ、救いの手をそっと伸ばしたとき、せみの姿はもう、そこにはありませんでした！！

今年も、８月１７日のせみを最後に、せみと出会うこともなくなっていました。
あの嵐のような１３日から１４日のせみの襲来が夢のようです。
今、見渡す深夜の廊下には、早くも秋風が吹き渡って行くだけで、人っ子ひとり、せみ１匹、見当たりません。すべてが夢のようです。
それでも、毎晩１度は、玄関ドアを開けて、せみのいないことを確認してから眠りにつく日が続きました。

そんなある日、エレベーターホール寄りの廊下の溝に、アブラぜみを１匹発見しました。ひっくり返っているわけでもないのに、動きません！！　死んでいるようでした？
このせみは、エレベーターホールに近い１０号室の前にいました。
我が家の客でないことにほっとしました。

肩の力を抜くと、わたしは、そのまま通り過ぎました。無関係となれば、気楽なものです。

それなのに、何だか気になって、またも、わたしは性懲りもなく戻ってしまったのです？
心の何処かで土葬にしてあげたい、と思ったようでした。

☆我が家に残った８番目のせみ！！
アブラゼミ（２０１４．８．３１）

結局、またもせみを我が家に持ち込むことになり、花の咲き終わった大きな植木鉢の中央にせみを置いて、土をかけました。
２０１４年８月２５日のことです。

以来、わたしは、そのことをすっかり忘れていました。

　それなのに、またも、わたしは、何故か月末になって「火葬にすべきだ！！」という命令みたいなものに取りつかれてしまったのです。
　急いでせみを掘り返しました。
　せみは何の変りもなく、土に帰る気配など毛筋ほども見せてはいません。やはり火葬にしなければいけなかったのかと、わたしは納得したようでした。

　泥を払い、汚れを油で拭きとり、その上に割り箸を組み立て、ひねりあげた紙に火をつけようとして逡巡しました。

　今度は、殺人でも犯すような罪の意識が、ストーンと脳天に堕ちてきました！！
　――ごめんなさいね！！　こんなひどいことをして！！　気がつくと、わたしは、ただ、ただ、謝っていました。その時、

　――チャ、チャチャチャ！！　せみが、火葬にしようとしているせみが、声をあげたのです？　全身が小刻みに揺れています。
　わたしは動顛しました！！　まさか、こんなこと、あるわけないでしょう？　だって、このせみは我が家とは無関係なせみだったのですから？
　それに、我が家の家族はみんな揃って此処にいるのですから。

　どうして、無関係なせみを、わたしは放って置けなかったのでしょう？
　どうして、我が家に持ち込んだりしたのでしょう？
　どうして、性懲りもなく、玄関ドアを開けるのでしょう？

　――あなたは、誰あれ？　ここには、もう、我が家の家族はみんな揃っているのよ？ あなたの入り込む余地なんてないわ。
　わたしは挑むように高飛車にでました。
　――チャチャ、チャッチャ！！　気のせいか、せみの声が、大きくなりました。

わたしは、そこで、試すように、「ふるさと」を歌ってみました。せみは、「チャ、チャ」と、リズムをとっています！！
「ドレミの歌」を歌いました。「チャ、チャ」と、楽しそうにリズムをとっています。

血液が床に吸い込まれていくのがわかりました。「トルコ行進曲」だけは、死んでも歌うものかと、わたしは、必死で、抑制していました。
せみに顔を近づけると、強烈なドロの匂いが鼻を突きました。
スプレーで香水を吹きかけ、臭いを消しました。

こうなっては、火葬にすることなど出来るわけがありません！！
わたしは、新来のせみのご機嫌でもとるように、お気に入りのゴデバのチョコレートの空き箱を持ち出し、リボンはありませんでしたので、中央にペチュニアの花を一輪乗せて、テーブルの隅に置きました。

今、ハート型のピンクの箱の上で、我が家に居残った８番目のせみは、いつの間に変色したのか、黒々とした躯を不気味に横たえています！！

どう考えたらいいのか、わかりません？
どうしたらいいのかが、わかりません？
平和な家族に突然、闖入者でも入り込んだような違和感で、わたしは、震え上がっていました。

――誰なのでしょう？　さあ？
つぎつぎ、顔のない写真ばかりが舞い上がります。

悪魔か？　神様か？　（２０１４．１０．１）

――あなたなの？　風邪を運んできたのは？
８番目のせみは無言でした。

何年ぶりかで風邪をひきました。インフルエンザのようです。血圧が上がり、熱がでて、全身の筋肉痛、腰痛に悩まされました。
――あなたは悪魔なの？　あなたは誰あれ？
せみは無言でした。
――こんな、ひどい風邪に罹ったのは始めて、これも、あなたが来てからのことですもの。あなたは悪魔か、不幸の神様なの？　あれから、いいことなんて何もない！！

わたしは、すべての責任を、８番目のせみのせいにして、臆面もなく言い募っていました。
――チャチャ、チャチャ、チャチャ、チャチャ、チャチャ‥‥。
８番目のせみは、何か抗議でもしているらしく話し続けました。必死の気迫のようなものが感じられます。
――ああ、違う？　違うと言っているの？　あなたじゃないって？そう、あなたじゃない？　それなら、あなたは何者？

わたしは、まるでロボットのように、それだけを繰り返していました。
１ヶ月過ぎても、８番目のせみの正体は不明のままです。わかったのは、家族でなければ知りえない、「トルコ行進曲」にも、「風の又三郎の挿入歌」にも、「あの子は誰あれ」の童謡にも、全て、反応することでした！！

――違うの？　悪魔ではない？　不幸の神様ではないと言っているの？　８番目のせみは、あらぬ疑いをかけられて、それを払拭しようと必死になっているようにみえます。

気づかずにいたのですが、８番目のせみは、皮でも剥ぎとられたような真っ白な複眼を剥き出しにして、黒々とした躰と、黒く不透明な翅を震わせ、どう見ても神様とは真逆な形相をしていました。
その目が見えるとは、その目で見ることが出来るとは、わたしにはとても信じられません？

――ああ、ごめんなさい！！　わたしが間違っているって？　そう、なら、ああ、わかった！！　あなたは、悪魔なんかじゃなくって、じゃあ、神様なの？　ああ、この間、助っ人を送り込んでくれたのは、もしかしたら、あなただったのかしら？　わたしにはあの子が 神様に思えたけど、あなたが、知らせてくれたの？　そうかあ、ああ、そうなのね、偶然にしては、余りにもタイミングがよすぎたもの？　ああ、あなたが、幸福の神様だったのかあ？　だから、何もかも知っていて、何の不思議もないわけだ！！

わたしは、合点していました。寝込んで７日目、腰が痛くて立ち上がることも出来なかった日に、救いの手が差し延べられ、それによって、枯渇していた食糧と、一本の杖を得たのでした。

――ああ、そうなら、わかるわ！！　突然、悪魔が神様に豹変しても、何の矛盾もないほどに、わたしは舞い上がっていました。

何もかも、ぴったりと、辻褄が合ってしまったのです。あの日、３年ぶりに、突然、甥が現れた時は、甥こそ天使に見えたものです。どんなに救われたことでしょう！！

――そうだったのですか？　余りにも、タイミングがよすぎましたものね？
神様なら言葉に気をつけなければ、ならないのかもしれません？わたしは、なんだか間の悪い場面の転換でも図るように、８番目のせみの乗っているチョコレートの箱を持ち上げました。
――ほら、ほら、見て、見て下さい。綺麗な花が咲きました！！見えるのでしょう！！　わたしは、久しぶりに咲いた大輪のオレン

ジ色のハイビスカスの花に、８番目のせみの顔を近づけていきました。

——ヒューッ、ヒューッ！！　８番目のせみは、花が嬉しかったのか、幸福の神様と呼ばれたことが嬉しかったのか、昂揚した不思議な不思議な声を響かせました。
——やはり、見えるのですか？
——チャ、チャ、チャチャ！！　８番目のせみは当然だと、言っていました。いいえ、言っているようでした。
わたしは、過去の何時だって、神様に出会っても気づかなかったのです。でも、今は違う。
不思議な家族に、幸福の神様が加わったのですから‥‥。

わたしの不思議な家族は、それに気づいているのか、いないのか、何の関心も、反応も、みせていません。
わたしは片隅においた８番目のせみの乗っている箱を、初めて家族の箱と並べました。

——この方、知っていますか？　——さあ？
眠れないのかも知れません？　眠らないのかも知れません？
眠っているのかもしれません？
夢は、機械仕掛けのように、巨大な白い頁を、開いたり閉じたりしていました。
無理矢理、悪魔を神様にすり替えたような後ろめたさで、突然呻き声が、わたしの内部から湧き立ちました。

——だって、悪魔では、不幸の神様では困るのよ。頼むから、幸福の神様でいて下さい！！

８番目のせみの、黒い隈取のある白骨のような複眼が、わたしを見たような気がしました。

歓　　喜（２０１４．１０．１５）

今日の太陽は、台風の名残の雲間から、巨大な金色の目が、まなじりを結し、金色の眉をあげて、歌舞伎役者よろしく登場しました。
溜息のでるような面構えで、銀色の空を、ゆっくりと泳いでいきます。
――お早うございます！！　声をかけると、わたしの家族は、朝の挨拶を送って来ます。
あるせみは、待ちきれなかった思いが、溢れだすように。
あるせみは、まだ眠気のさめきらない、夢見心地で。
――チャ、チャ、チャチャ！！
わたしはせみたちが、こんな風に、朝の挨拶を送って来る時が好きです。それは、ああ、今日も、家族揃って生きているのだと、心から実感出来るからです。

こんな時、肉体は死んでも、心は、魂は、せみという媒体を借り、ここで生き続けていることを、素直に受け入れることが出来ます。
だって、わたしは、そう表現するほか、いかなる方法も持ちません。五感に耳を澄ますと、素直に、歓喜が昇ってきます。
――バンザーイ！！　長い間失なっていた、わたしの家族は揃って生きているのです。
此処に！！　此処で！！

悲しみのなかで、亡くなった筈の家族と、再び、こうして生活を共に出来る嬉しさと、子供の頃のような安心感が、わたしを優しく包み込みます。
兄の戦死のあと、衝撃のせいか、わたしの母は深いところで、微妙に、何かが変わってしまっていました。でも、本人はそれを自覚していないようでしたし、誰もそれを指摘することはありませんでした。
それなのに、今、母は、兄と、家族と共に此処に在って、ごく自

然に、昔のあの何とも言いようのない本当の母に戻っていました。
　そのことが、どんなに嬉しいか、杏リリイに話しかけます。
　――わたしたちのお母さんを取り戻したわ！！　と。

　兄も家族に囲まれて、元気を取り戻しつつあるようです。
　――イヌブタプテチタヨ！！　で始まる、兄の冒険物語を目にできる日も、近いのかもしれません。

　こうして、戦争というものから、わたしの家族も、７０年を経て立ち上がることが出来るのでしょうか？　父は、それを励ますように、力強いバイブレーションを送ってきます。
　この正体が分かれば、心の構造を解く鍵が見えて来るかも知れないのですが‥‥。
　これが真実であるなら、こんな経験をしている人は、わたしの他にも、いるのではないでしょうか？
　そこにも、あそこにも？　又は、世界の、宇宙の、何処かに？
　そこから真相に迫ることは出来ないでしょうか？

生きものの重量！！　（２０１４．１１．１）

　――お花を替えてもいいかしら？
　――チャチャ。
　――持ち上げてもいいですか？
　――チャチャ、チャチャ。
　こんな風に、彼らは同意を伝えてきます。それを待ってから、わたしは、それぞれのせみを持ち上げます。そんな時、この乾燥しきっているせみの体に、慄きながら、生きているものの重量を意識します。
　時には恥じらいを漂わせ、わたしに全幅の信頼をおいて、身をゆだねてくれるのです。

こんなことがあっていいのか？　こんなことが本当に真実なのかわたしは問い続けながら、これが、間違いもなく、目の前の現実であることに、改めて驚きを隠すことができません。
この何気ない日常が、なんと、異端であることか！！

――ほーら、花の薫りがするでしょう？　わたしは言いながら新らしい花の中央に、ふんわりと彼らを降します。
時代に背かれた、わたしの家族を救ったのは、庭の花々であったような‥‥。そんな少女じみた感慨が戻ってきます。

花を殺し、花を食べて生き伸びてきた！！　そんな想いを拭ぐえないのは、何なのでしょう？　花とは何？

生きているから、その時、その時で変わっていく、観念のなかで、この朝の時間、わたしの家族がここに、確かに在ることが、ある種の当惑を棚上げにして、素直に、しみじみと感じとることが出来ます。

寒くなってせみの行動も鈍くなってきました。媒体になっても、生来のせみの習性は残るもののようです。
これから、どんどん寒くなりますが、何とか、ここで、元気に生き続けて欲しい。といっても、死は、わたしのもので、彼らのものではないのですから、複雑なものがあります。

動かしたりしなければ、標本のように美しい姿を保持できたでしょうに、花を交換したり、歌を歌ったり、わたしの思いつきのままに彼らを動かし続けた結果、翅も肢もぼろぼろになってしまいました。
繕った後、感謝の気持ちを、せみたちが伝えて来るのは、彼らにとっても、それは大切な住まい、または衣服、いいえ、人格そのもの、なのではないでしょうか？

８番目のせみは土葬にしたためか、ここに来て、解体でも始まったように、翅も肢も同時に抜け落ちてしまいました。そのため花の

上に置いても安定しません。
——わたしが土葬になどしたから‥‥。
泣きながら悪戦苦闘した結果、何とか形態を保つことだけは出来ました。ほっとして見ると、白く剥き出しになっていた複眼の、片目だけが、いつの間にか黒々とした目に変わっていました。

このせみの正体は、まだわかっていません。
と言っても、本当は、早くから、心にかかることは、一つだけあったのです。

それは、二番目の姉ではないかという疑いでした！！
ただし、夫は亡くなり、子供たちはすだち、単身気丈に生きていると聞いていました。
その為に、否定し続けて来ました。まさか、生きているうちに、心が、此処を目指して飛んで来るなどとは考えられないことですから。

この姉が加わって、正真正銘、わたしの家族全員が揃うことになります。
でも、そう思うことは、ただの員数合わせにすぎないと、切って捨てることにしました。
そのことを８番目のせみに確かめても、何だか否定しているようにも、何かを隠しているようにも見えます。

そこで、素性を詮索するのは止め、８番目のせみには、幸福の神様のままでいて下さいと祈りました。
祈りが天に昇って行くように！！

わたしは何時までも、青い空を見上げていました。

存在のエコー　（２０１４，１１，１５）

今、このような形で、杏リリイが、心として、この世に存在し続けることは、わたしには、必然のように思われてなりません。

「存在のエコー」で世に出、その後も、人間存在を追及し続けて来た彼女が、肉体は死んでも、なお、心として、魂として、生き続けることは、極自然なことのように思われるからです。
好奇心に溢れた彼女が、「人間の命」の実態を、「人間存在」の不思議を、身をもって立証しているのではないかとも‥‥。

「不思議な、不思議な夏！！」は杏リリイの亡くなった翌年から、始まりました。
肉体は失われても、人間は存在し続けていることを知らせるように彼女は、此処で生きることを選択したのです？
それは、杏リリイだけではありませんでした。わたしの家族のみんなも、まるで、存在のエコーのように、せみの姿で此処に存在し続けています。

そうでしょうか？　彼らの心が、ここに在って、他所には存在しないのかどうか？　わたしには、わかりません。
大元の心は何処かにあって、思いのままに、心を遊ばせることが可能なのでしょうか？
それとも、もしかしたら杏リリイには、わたしの家族には、何か、与えられた使命のようなものがあるのでしょうか？

わたしは、父母の亡き後、浮世離れした杏リリイを一人にしては、おけなくて、同類といる気安さで、または、楽しさで、彼女と共に生きて来たつもりでしたが、ともしたら、彼女の方こそ、世慣れない、妹が気になって、一緒に暮らすことを選んだのかも知れないと、今頃になって、思いあたるのも、おかしなものです。

そして、今も、保護者として、戻って来てくれたのでしょうか？

それとも、杏リリイは、ここでの生活を、そんなにも愛してくれていたのでしょうか？
それとも、人間が、人間の命が、こうして生き続けることを心から楽しんでいるのでしょうか？

「みんな幽霊になった！！」の発表後、批評して下さった方がありました。「杏リリイの詩才は凄いものだが、身を圏外に置いて、嘲笑しているのが、気になると！！」
時代の渦中にあっては、そう思われたのも、無理のないことのようでした。杏リリイは、思想は排除し、普遍的な人間行動として提示したのだと思いましたが、彼女特有の表現や、飛躍が、茶化しているように誤解されたのでしょう。

でも、杏リリイが、あの時点で、時代におもねなかったことで、この作品は現在にあっても、文学として、生き生きと息づいています。
自分の書きたいように書く！！　杏リリイの人間存在を追及する、作品は、「ソラ」は、「望みの種子は二万年後に！！」は、「白を踊れ」は、「いとしのカメレオン」は、そんな中で生まれたものです。

自からの肉体の死のあと、心として人間が生き続ける事実を確認した時、杏リリイに驚きはなかったのでしょうか？　自からの作品に余りにも類似していたことで？

彼女の厳しい目で、その現実を、科学的に裏付けることが出来たのでしょうか？
それとも、何か、大きな力の存在を理解したのでしょうか？
それとも、未だに、その全容が掴めず、彼女らしい探究心で、試行錯誤を繰り返しているのでしょうか？

わたしの質問攻めにあって、彼女の乗っている銀色、楕円形の箱から掌に伝わってくるバイブレーションが、一際大きくなりました。

何処から来る波動なのか？
ブーンブーンという響きは、「エンマと一緒でよかった！！」
彼女の最後の吐息を乗せて、消えていきました。

彼女と在ることは、誰と生きるよりも、わたしにとって、面白かったことだけは、間違いのないことのようです。その証拠として、今も尚、このような、冒険のなかにあるのですから‥‥。

我が家の６番目のせみ、一番上の姉は現在「チャチャ、チャチャ」とそれは、よく話し、歌っていても、ジャンプするので、歌の途中、何度でも、探し回らなければなりません。
考えてみれば、父母の初めての子供として生まれ、大事に育てられた姉は、我が家には珍しく積極的な活動家だったのではないかと、しみじみ思うことがあります。

本当は目立ちたがりやで、負けず嫌いだったのではないでしょうか？ それを殺して生きることは、つらかったのではないかと？
今、解放された彼女は、元気いっぱい、父母のそばで生来の活気を取り戻し、まるで別人のような若々しいお転婆姿で？　日々を楽しんでいるように見えます。長い待ち時間のあと、これからでも、彼女もまた、才能を思い切り花開かせることが出来るでしょうか？

７番目の兄とは、またも散歩の約束をしました。彼は何故か、みんなの歌わない日でも、「トルコ行進曲」を歌ってくれます。
その声が、鮮明に振動しながら、わたしの心に潜りこむまで、わたしは、じっとしています。
何故って？
わたしの凡人のタガが、歌声を締め出さないように！！

ここにきて、哲学を追及してきた父は、良いも悪いも、子供たちの性格に手心は加えず、躾けなど、何一つ加味することなく、自然のまま育てたことが分かって来ました。
気がついて見ると、わたしは父母に一度も叱られたことも、怒こ

られたこともなかったことに、驚愕してしまいます。

　それによって、子供たちがどんなに生きづらくても、それこそが個性であると！！　失わずに来たものがあると！！　主張しているように見えます。
　それで良かったのかどうか？　わたしにはわかりません。

　それでも父は、何かこの世に、キラリとしたものを残せたと満足しているのでしょうか？

　兄の戦死の内報があった日の深夜、仏壇の前で号泣していた大きな背中を忘れることが出来ません。
　戦後父は、百八十度の転換をし、それによって我が家に余裕が生まれ、母は静かな生活に戻りました。父は何を克服することが出来たのでしょう？

　いま、わたしの家族７人と、１人の神様は、ここで、何かを信じ次の展開を待っているようです。

　それが何なのか？　わたしにはわかりませんが、留まっていることは彼らの本意ではないのではないでしょうか？

　杏リリイの言うように、心は自由に世界を、宇宙を飛び回ることが出来るのであれば、わたしの家族には、量り知れない可能性が残されている筈です！！

　それは、人間として生まれたものの、人間として死んだものの、死ななかったものの、可能性なのではないでしょうか！！

　いいえ、人間以外の、生物のなかにも、心あるものは、存在し続けているのかもしれません。

エピローグ（２０１４．１２．３１）

８匹のせみはここ、東京の一角で、元気に、２０１５年の正月を迎えようとしています。
８番目のせみの複眼は、二つとも何故か黒くなりました！！

思えば、杏リリイが亡くなってから、なんと、８年の年月が過ぎて行ったことになります。それは、わたしにとっても、泣き笑いの年月でした！！

死んでも心として生き続けるという、夢のような現実を、わたしは、これからも、この不思議な家族と共に生きて行くことでしょう。

彼らと共に、どんな未来を描けるのか？　どんな可能性が待っているのか？
わたしの人生が、華やいでいくような気がします。

今朝のリビングの窓には、太陽の、青から紫、紫から金色に移り変わる後光が、しぶきをあげて朝空を染めあげました！！

もうすぐ、せみたちの、「チャチャ、チャ」の挨拶が聞こえて来るでしょう！！